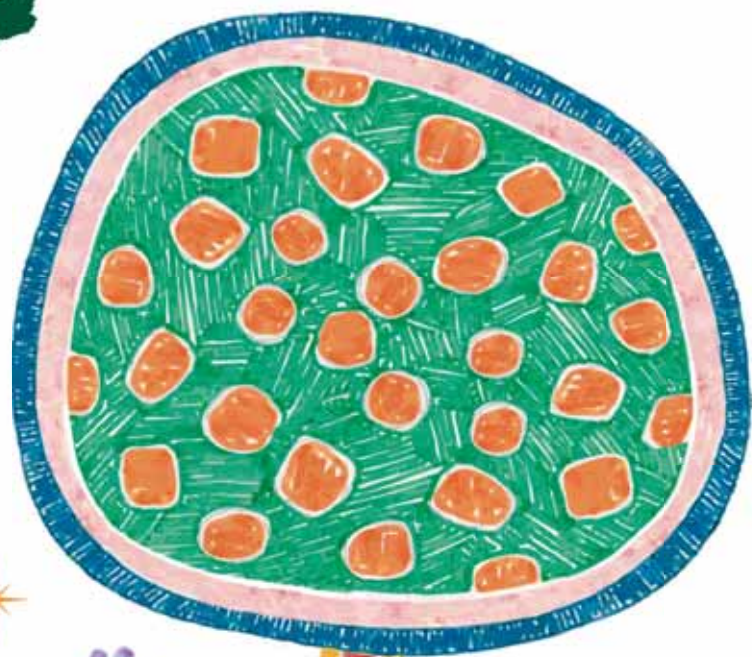


キラリ発進！
サステイナブルスクール

～ホールスクールアプローチで
描く未来の学校～

Vol.2



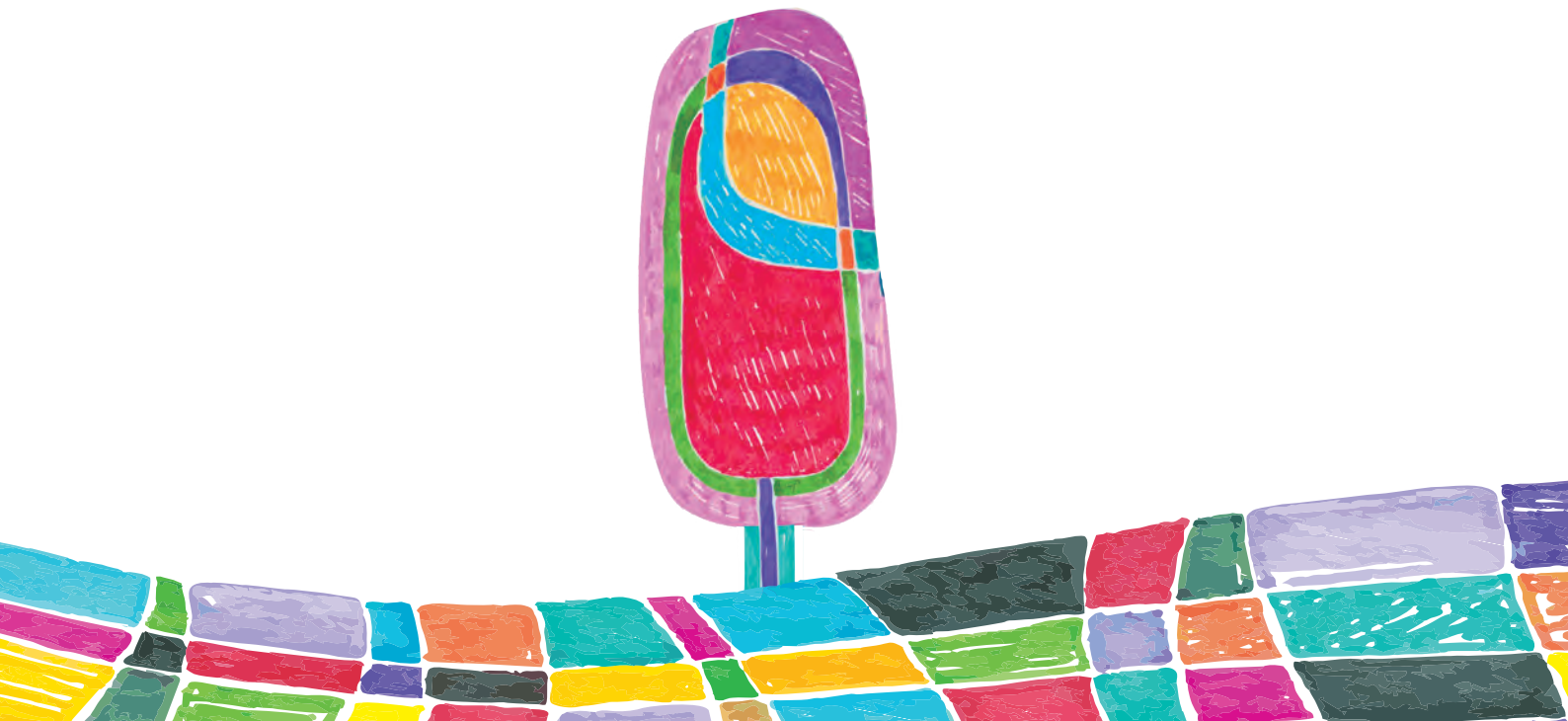
ACCU

Asia Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター

キラリ発進！
サステイナブルスクール

～ホールスクールアプローチで
描く未来の学校～

Vol.2



ホールスクールアプローチの推進に向けて ～サステイナブルスクールに期待すること～

文部科学省国際統括官
日本ユネスコ国内委員会事務総長

川端 和明

ホールスクールアプローチ (whole-school approach) とは、学校全体で E S D に取り組む教育手法です。一部の教員や科目にとどまらず、教職員、児童生徒、保護者などが一体となって、学校運営、教室内外の学び、設備と環境、地域との連携などのあらゆる分野で持続可能な社会づくりを意識して教育・学習を行うことが求められます。国連総会が承認した国際的な E S D の推進枠組みである「E S D に関するグローバルアクションプログラム (G A P)」において、優先的に行動すべき分野の一つとされており、国際的にその推進が求められています。

文部科学省は、ホールスクールアプローチを実践し、E S D を通じた持続可能な社会の構築を目指す意欲のある学校をサステイナブルスクールとして採択し、その活動を支援する事業を平成 28 年度から実施しています。これまで研修会や学校間交流等を通じて、先生や児童生徒の意識が変わり、学校全体にポジティブな変化が生まれていると伺っています。

サステイナブルスクールの活動を通じて、今後ホールスクールアプローチの実践が全国の学校へ広まり、さらには世界へ発信できる実践事例が育っていくことを期待しております。

はじめに

2016 年 9 月、平成 28 年度日本／ユネスコパートナーシップ事業（文部科学省委託事業）の一環として「ESD 重点校形成事業」は始まりました。全国公募を経て、持続可能な開発のための教育（ESD）に継続的に取り組み、そしてさらなる飛躍のポテンシャルがあると評価された学校 24 校が「サステイナブルスクール」として採択されました。以来、教育を通じて持続可能な未来、社会を構築することを目指して活動に臨んでいます。本書は、そんなサステイナブルスクールの 2 年目の軌跡をまとめたものです。

今年度、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）では ESD の専門家の皆様と共に「ホールスクールアプローチ・デザインシート」を開発しました。デザインシートはユネスコ本部が提案するホールスクールアプローチを、オリジナルの 4 領域を基に、より日本の学校現場の現実に即した形に改良したものです。2 年目の終わりには、24 の個性豊かなデザインシートが完成しました。本冊子では、それらを各学校が設定した「ビジョン」と共に紹介し、2 年目を迎えたサステイナブルスクールの様子を余すところなくお伝えしています。

ACCU は、ユネスコスクール事務局としてユネスコスクールの加盟申請や加盟後の活動支援を行ってきました。また、ユネスコ本部の事業として国内外のユネスコスクールの国際協働学習プロジェクトの運営実施の経験、さらに海外との教職員交流プログラムの企画運営の実績などを活かして、今後もユネスコスクールに限らず様々な学校や地域の ESD の推進に貢献していく所存です。

最後になりましたが、本書をまとめるにあたり、ESD の専門家の皆様、そして実践の主役であるサステイナブルスクールの皆様には原稿を執筆頂くなど大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。ACCU は皆さまと共に持続可能な未来へ向けての変化の担い手でありたいと願っています。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
ユネスコスクール事務局

目次

ホールスクールアプローチの推進に向けて ~サステイナブルスクールに期待すること~ ---2
 はじめに -----3
 目次 -----4
 略語一覧 -----5
 ESD 重点校形成事業について -----6
 審査員の紹介 -----9
 デザインシートを活用したホールスクールアプローチの創造と挑戦 -----10

サステイナブルスクールの活動 採択校一覧および分布図 -----14

気仙沼市立面瀬小学校 -----16
 気仙沼市立唐桑小学校 -----18
 登米市立米谷小学校 -----20
 江東区立八名川小学校 -----22
 杉並区立西田小学校 -----24
 目黒区立五本木小学校 -----26
 横浜市立永田台小学校 -----28
 新居浜市立惣開小学校 -----30
 阿南市立桑野小学校 -----32
 大牟田市立吉野小学校 -----34
 石巻市立牡鹿中学校 -----36
 大田区立大森第六中学校 -----38
 名古屋国際中学校・高等学校 -----40
 福山市立福山中・高等学校 -----42
 静岡県立下田高等学校南伊豆分校 -----44

広島県立安古市高等学校 -----46
 愛媛県立新居浜南高等学校 -----48
 独立行政法人国立高等専門学校機構 福島工業高等専門学校 -----50
 千葉県立桜が丘特別支援学校 -----52
 愛知県立みあい特別支援学校 -----54
 NPO法人 東京賢治の学校 東京賢治シュタイナー学校 -----56
 特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園 -----58
 特定非営利活動法人 京田辺シュタイナー学校 -----60
 認定NPO法人 箕面こどもの森学園 -----62

【寄稿】 ホールスクールアプローチにおける新たな可能性を切り拓く -----64

【対談】 住田昌治（横浜市立永田台小学校校長）× 小畑怜美（and seed） -----66

【寄稿】 新学習指導要領とサステイナブルスクールの使命 -----71

ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）について -----72

【略語一覧】

ACCU----- 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
 ASPnet----- ユネスコスクール
 ASPUnivNet----- ユネスコスクール支援大学間ネットワーク
 DESD----- 国連持続可能な開発のための教育の10年
 ESD----- 持続可能な開発のための教育
 GAP----- グローバル・アクション・プログラム
 SDGs----- 持続可能な開発目標
 UNESCO----- 国際連合教育科学文化機関



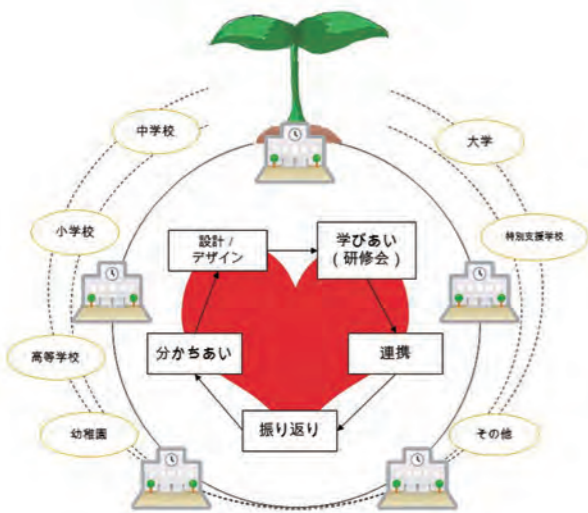
ESD 重点校形成事業について

ESD重点校形成事業開始の背景

国連持続可能な開発のための教育の10年（以下、国連ESDの10年）の最終年となる2014年11月に、日本政府とユネスコの共催により、愛知県名古屋市および岡山県岡山市において、「ESDに関するユネスコ世界会議」が開かれました。その会議において、国連ESDの10年の後継目標として「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」が発表され、同年第69回国連総会にて採択されました。ユネスコ主導の下、2015年から2019年までの5年間、ESDはこのGAPに基づいて推進されています。

また、国内に目を向けると、日本ユネスコ国内委員会に設置されたESD特別分科会が「国連ESDの10年」の成果と課題を整理し、平成27年8月に「持続可能な開発のための教育（ESD）の更なる推進に向けて」と題する報告書を取りまとめました。報告では、今後のESD推進方策として、ESD普及のための取組と並行してESDを深化させる（実践力を高める）ための取組の強化がうたわれています。学校全体で、また他校や地域との連携も視野に入れて活動を実践し、持続可能な未来の実現に向け、教育を通じて一人ひとりが変容していくことが期待されています。

このような経緯を受け、日本におけるユネスコスクール事務局である公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、文部科学省より「平成28年度日本/ユネスコパートナーシップ事業」の委託を受け、ESD重点校形成事業を実施することとなりました。



ESD重点校形成事業とは？

ESD重点校形成事業は、教育を通じて持続可能な社会を構築するために、実践的な取組を行う意欲のある学校を公募・選定し、その取組を発展および深化させるために必要な支援をする事業です。学びあい（研修会）→連携→振り返り→分かちあい→設計/デザインのサイクルを繰り返すことにより、重点校（以下、サステイナブルスクール）に留まらず、ESDの活動を広げつなげていきます。

サステイナブルスクール形成の目的

- ・本事業の支援を受けて、サステイナブルスクールが事業に関わるすべての人に学びをもたらす活動を展開し、自らの思考・行動の変容によって成長すること
- ・他のサステイナブルスクールの成果を自校の取組に生かし、サステイナブルスクール同士も連携しながら多面的な魅力を持つ学校へ発展すること
- ・サステイナブルスクールが本事業の支援を受けてESD実践校として自立し、周辺の他の学校や地域・家庭を先導してESDの深化に寄与すること
- ・サステイナブルスクールの寄与によりESDが教育現場そして地域社会に根付き、持続可能な社会を構築していくこと
- ・加えて、その活動を世界へ向けて発信し、国際的に展開していくこと

選考プロセス

①審査基準の策定

第1回事業推進委員会（2016年5月開催）での協議をもとに、審査基準を策定

②委員による事前審査

事業推進委員会の委員数名が審査員として応募書類を事前審査

③審査員による事前審査結果の共有と審議

第2回事業推進委員会（選定会議、2016年9月開催）において、審査員による評価点と、以下3つの点を考慮し24校を選定

- ・地域、校種が多岐にわたり全体的にバランスがとれている
- ・ESDの取組内容にユニークな特色がある
- ・ユネスコスクールに限らない

④採択校決定（2016年9月中旬）

サステイナブルスクール選考のための枠組み

サステイナブルスクールを選考するにあたり、8つの審査項目を用意しました。

サステイナブルスクールとしての活動を日本に留めるこ

となく、海外へ積極的に発信していくことができるように、世界的にも使用されているユネスコ/日本ESD賞¹等の評価を参考とした評価枠組みが事業推進委員、当センターにて考案されました。

各8つの審査項目と対応する審査内容は次頁の通りです。



本審査基準の特徴は、本事業が「校内の取組をコミュニティ、全国、そして世界へ広げていく」という目的を持つことから「広がり（汎用性）」を含むところにあります。特定の学校環境においてのみ実施可能な高度な事例だけでなく、どの学校でも取り入れられるような身近な取組にもスポットライトをあてる評価項目となっています。これは、

ACCUがこれまでのESD普及支援活動を通じて培ってきた知見に基づいて提案したものです。

ACCUは事業推進委員とともに、上記の評価項目を軸として、すでにこれら全ての評価項目を完璧に満たしている学校ではなく、ESDの芽が伸びていく可能性に満ちている学校を選びたいという強い思いのもと選考を進めました。

¹ 2016年ユネスコ/ESD賞は変容、統合、イノベーションの3つの軸を選考基準としています。詳細はこちらをご覧ください。
<http://en.unesco.org/prize-esd/selection-criteria>

平成 28 年度日本/ユネスコパートナーシップ事業
ESD 重点校形成事業 審査基準

審査項目	内容
1 ビジョン (Vision)	<ul style="list-style-type: none"> ●持続可能な未来の実現に向けた目的が明確に示されている。 ●活動目的・目標と、活動内容に一貫性がある。
2 継続性 (Continuity)	<ul style="list-style-type: none"> ●今後 3 年以上継続的に活動していく意志が明確にある。 ●持続可能な社会を担う次世代を育てる明確な意志がある。
3 バランス (Integration)	<ul style="list-style-type: none"> ●社会・経済・環境がバランスよく教育活動に反映されている。 ●持続可能性に関する内容が明確に教育活動に反映されている。 ●教育課程への位置付けが適切になされている。
4 前に踏み出す (Empowerment)	<ul style="list-style-type: none"> ●学習と実践活動がつながっている。 ●学習者・実践者が対話を通して主体的に参画できるカリキュラムを作っている。 ●批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的、総合的に考える力などを育む教育を行っている。
5 刷新性 (innovation)	<ul style="list-style-type: none"> ●既存の枠にとらわれず、ダイナミックに ESD 活動を創り上げている。または、創り上げようとしている。
6 協働 (Collaboration)	<ul style="list-style-type: none"> ●教師間がチームとして協働し、ESD 活動を推進している。または、その環境が整っている。 ●多様なステークホルダー（地域、家庭、NGO/NPO、企業）と協働し、教育活動を実践している。または、しようと努力している。 ●国内や国外であらゆる学校・校種と相互に学びあう活動を展開している。または、しようと努力している。
7 変容 (Transformation)	<ul style="list-style-type: none"> ●6. を踏まえ、それを学校に還元し学校も常によき変化を求め、柔軟である。 ●学校が社会を変容させる拠点であることを認識し、学校と社会の相互の学びを積極的に推進している。
8 広がり（汎用性） (Scalable/Replicable)	<ul style="list-style-type: none"> ●重点校として、あらゆる学校が活用し実践することができる可能性のある活動を実践する意欲を持っている。 ●実践に見出される工夫や方法、理論等を他の学校にも拡大し、協働していく高い意欲がある。

Copyright : ACCU

審査員の紹介

● 市瀬 智紀

宮城教育大学 教授

専門は ESD、国際理解教育、多文化教育、日本語教育。地域の小中高等学校の国際化・多文化化への対応を支援するとともに、ユネスコが国際的に推進する価値教育にキャッチアップするための研究を行う。

● 石丸 哲史

福岡教育大学 教授

専門は人文地理学、地理教育、ESD。教育課程に SDGs（持続可能な開発目標）を展開していく方法を研究するとともに、九州地方を中心としたユネスコスクールの支援と ESD の推進を行う。

● 永田 佳之

聖心女子大学 教授

専門は ESD、比較教育学、国際理解教育論やオルタナティブ教育論。ユネスコ等の国際協力事業に 20 年以上従事する。「ユネスコ/日本 ESD 賞」国際選考委員会委員を務めるなど、世界の ESD の理論と実践に詳しい。



● 成田 喜一郎

東京学芸大学 教授

専門はホリスティック教育、歴史学、カリキュラム開発。教職大学院にてカリキュラム開発の方法や学校組織マネジメント等を担当。中学校社会科教諭・副校長として長く現場に身を置き、実践者としての視点も併せ持つ。

● 吉田 敦彦

大阪府立大学
副学長/教育福祉学類教授

専門はホリスティック教育 / オルタナティブ教育、人間形成論、教育哲学・教育人間学。日本のシュタイナー学校に初期から関わり総合的研究を進めるなど、多様な学びを追求している。

デザインシートを活用した ホールスクールアプローチの創造と挑戦

ホールスクールアプローチデザインシートの概要

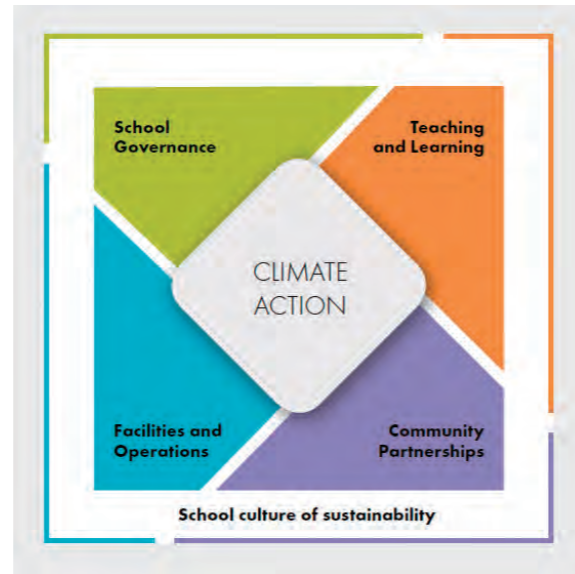
本事業は、ESDを推進していくために必要な概念とされているホールスクールアプローチの実践を中心に据えています。ホールスクールアプローチは、教育内容やカリキュラムの再方向付けだけでなく、コミュニティ内の機関やステイクホルダーからの協力を得ながら、持続可能な開発に応じたキャンパスや学校運営も必要とします。したがって、ホールスクールアプローチを実践していくためには、持続可能性の文脈に沿って学校を変革していくことが重要です。

平成28年度の第二回目の研修会で、各校に「サステイナブルスクールとしてより輝くためには？」という問いを投げかけました。各校から挙げられた声を集約し、下記の3つのポイントの重要性について共有が図られました。

- ① わかるテーマ、自校のキーワード・キーフレーズづくり
- ② 地域とのつながり方・関わり方、地域から世界へ
- ③ 先生も子どももやりたいことから出発する学校づくり

各校が大切に思っている3つのポイントは、UNESCOの提案するホールスクールアプローチ指針¹と親和性が高いことがわかります。

ホールスクールアプローチ指針



UNESCO. (2016). *Getting Climate-Ready -A Guide for Schools on Climate Change.*

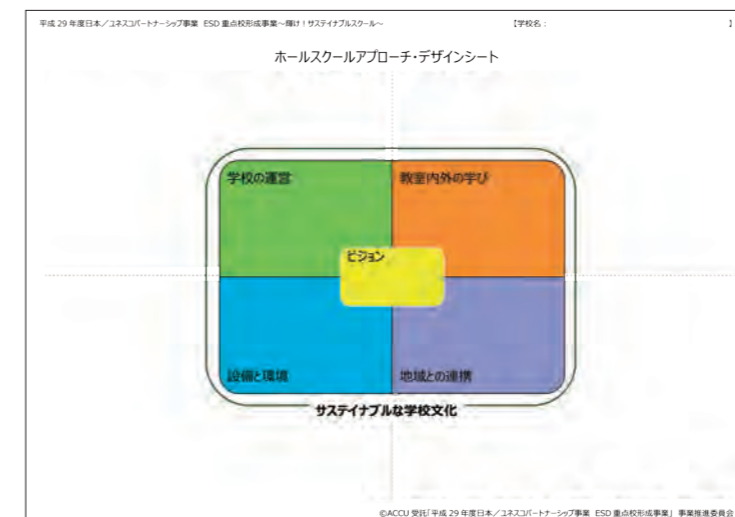
昨年度発行の冊子『キラリ発進！サステイナブルスクール～ホールスクールアプローチで描く未来の学校～』のP62～63にも示されている通り、①の「わかるテーマ、自校のキーワード・キーフレーズづくり」に関しては、図の左上「School Governance（学校の組織運営）」と関連性が高いと考えられます。また、②の「地域とのつながり方・関わり方、地域から世界へ」は図の右下の「Community Partnerships（地域とのパートナーシップ）」と、③の「先生も子どももやりたいことから出発する学校づくり」に関しては、図の右上の「Teaching and Learning（教授と学習）」と図の左下の「Facilities and Operations（学校環境づくり）」に対応すると述べられています。

一方冒頭でも述べた通り、ホールスクールアプローチとは、学校に関わるヒト・モノ・コトを巻き込んだ全てにおいて、ESDが実施されるということです。この時に重要

になってくるのが、さまざまなステイクホルダーがESDを理解し、同じ想いをもって活動に参加することです。多くのステイクホルダーが関わっていたとしても、皆がバラバラに活動している状態では、活動自体が持続可能ではないですし、活動全体につながり（一体性）を見出しにくくなります。このことから、4つのコンテンツ「School Governance」「Teaching and Learning」「Facilities and Operations」「Community Partnerships」にて実施されている教育活動全てが、共通のビジョンのもとに実施されている状態が、まさに理想的なホールスクールアプローチの姿と言えるのです。

このような観点から、事業推進委員とACCUは、どの学校も活用でき、羅針盤となるような「ホールスクールアプローチ・デザインシート（以下、デザインシート）」を作成しました。ホールスクールアプローチを彩る4つの窓「学校の組織運営」「教授と学習」「学校環境づくり」「地域とのパートナーシップ」はUNESCOの指針を活かし、その周りに活動を書き込むことができるように手を加えました。そして、それら4つの窓をつなぐ言葉を「ビジョン」とし、中心に据えることができました。

ホールスクールアプローチ・デザインシート



デザインシートを活用する利点は以下の通りです。

- サステイナブルスクール各校のビジョンを可視化することができる。
- ビジョンに沿った活動を可視化し、配置することにより各校にとっての「羅針盤」となり得る。
- 各校の個性がわかりやすくなり、他校の取組との違いが見えやすくなる。同時に、他校のよい取組も導入しやすくなる。
- 外部へ発信する際のキーアイテムとなる。

このように、デザインシートは決して各校の取組を統一化するものではありません。各校の取組を、ホールスクールアプローチを軸に「共通」の枠組みで整理することによって、活動の可視化を図ることが大きな目的となっています。

デザインシートは、本事業で開発したツールですが、ESDの実践を可視化し、学校全体で取り組んでいきたいと考える全ての学校に役立つものです。具体的な記入方法を次頁に示しますので、ぜひ活用してみてください。

¹ ユネスコ本部が2016年より開始した「気候変動をテーマにしたホールスクールアプローチ実践プロジェクト」のファシリテーター用ガイドに記載されている。サステイナブルスクールからも10校が参加しており、気候変動をテーマにした活動を展開している。

ホールスクールアプローチデザインシートの活用方法

デザインシートを作成する際、学校管理職のみで決定するのではなく、学校に関わるなるべく多くのステークホルダーとともに作成してください。ホールスクールアプローチを学校に浸透させていくためには、学校全体で合意するプロセスそのものが重要です。実施者が納得することが、実施の際の障壁を低くし、取組をさらに加速させます。まずは、ご自身の学校で大切にしてきたことを話し合い、学校全体でビジョンを共有するところから始めてみてください。

A. ビジョンについて

子どもも先生も地域の方々も学校に関わる全ての人たちにとって大切にしているキーワードのことです。文章にしてしまうと、特に大切にしたいはずのコアの部分が希薄化してしまうため、Bの項目やCのアクション（実践）との接合が難しくなってしまいます。したがって、なるべく短い言葉もしくは単語を当てはめることをおすすめします。学校にある特色や学校教育目標、学校経営ビジョンを参考にしながら学校が大切にしている言葉を探し出してみてください。

Q: 学校が大切にしているキーワードは持続可能な未来に向かうキーワードですか？

B. 各領域の項目について

4つの各領域には、該当する取組の項目を挙げてください。項目数はいくつでもかまいません。各項目はできるだけ具体的に設定されることをおすすめします。また、共通してあてはまるものに関しては、どちらかよりウェイトが大きいと思われる領域にご記入ください。

学校の運営とは：学校に関わる人たち（子ども、教員、保護者など）が学校づくりについて考える場、参画するプロセスそのものを指します。例えば、職員会議や年間計画などはここに当てはまります。

教室内外の学びとは：日ごろの教師と子どもたちの学びの場とそのプロセスを指します。授業中の学習だけでなく、幅広く授業内外の学びの場と捉えてください。例えば、個々の教科・領域はもちろん、各種行事なども入ります。

設備と環境とは：学校やその周辺の設備および設備を稼働させるための環境について示しています。例えば、校舎、図書室、電気などが入ります。

地域との連携とは：学校に関わる校外の人との連携について示しています。例えば、地域の方、企業、民間団体などと連携されていればこちらに入ります。

【項目例】

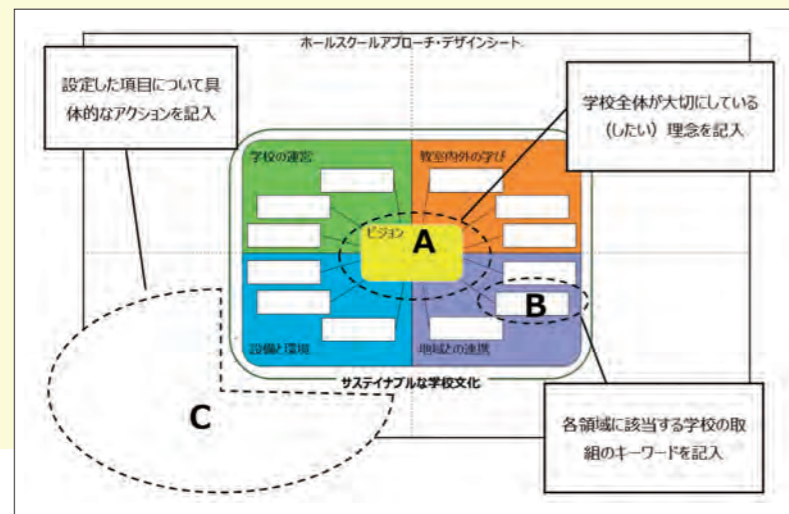
学校の運営	教室内外の学び	設備と環境	地域との連携
<ul style="list-style-type: none"> 職員会議 PTA 校内集会 年間学習指導計画 生徒会（児童会） 委員会 ボランティア組織 学校協議会 …など 	<ul style="list-style-type: none"> 国語 総合的な学習の時間 道徳 運動会 修学旅行 遠足 部活動 校外学習 出前授業 プロジェクトベースの取組 …など 	<ul style="list-style-type: none"> 校舎（図書室、職員室など） 校庭 エネルギー設備（電気、水道、窓など） 給食 学校菜園 ゴミ …など 	<ul style="list-style-type: none"> 自治会 行政機関 公営施設（公民館・図書館など） 近隣の学校 NGO・NPO 企業 高齢者施設 …など

C. アクション（実践）記入欄について

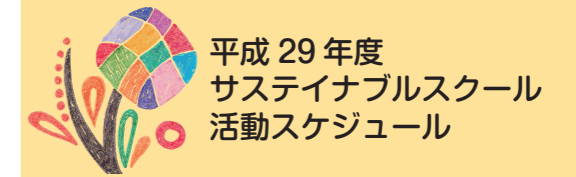
設定した各項目に対する具体的なアクションを記入します。ビジョンを通して各項目を見た場合、どのような実践になるか考えてみてください。それぞれのアクションは、持続可能な未来の実現のための一歩となります。新たな試みはもちろん、既存の活動であっても、関わる人たちが活動を通して変容していくことが大切です。

Q: 実践に関わる全ての人たちが主体的に活動できる取組になっていますか？

Q: 一人一人が楽しみながら取り組むことのできる実践になっていますか？



以上、基本的な記入方法や記入に際しての考え方を示しましたが、デザインシート活用の一番の目的は、学校に関わる全ての人各自が自分たちの「こうありたい」と思う共通の姿を描き、そのために同じ行動指針を持って様々な活動に取り組んでいける学校文化を創ることです。その目的に資するのであれば、デザインシートを用いる学校が自分たちの使いやすいようにアレンジしても全く問題ありません。実際、個性豊かな24校のサステイナブルスクールの中には、自分たち流に発展させたデザインシートを作成しているところも少なくありません（P16～の事例紹介参照）。ぜひ、自分たちの想いを大事にして、各校オリジナルのデザインシートを作るプロセスそのものを楽しんでみてください。



平成29年7月下旬

第一回研修会

サステイナブルスクールとして大切にしていきたい「持続可能な学校文化」を醸成するために、デザインシートを活用し、ホールスクールアプローチでESDの実践を深めていくことを確認しました。各校のアイデアを共有し、今後の活動に向けてお互いにヒントや刺激を与え合う場となりました。

平成29年12月上旬

第二回研修会

今年度進展したサステイナブルスクール間交流について事例報告を行い、交流によってもたらされた化学反応—教師や子どもの変容や、活動の広がりの可能性を実感しました。また、デザインシートを活用し始めてから数ヶ月を経て出てきた課題意識のもとに、外部講師を招いて「ビジョン」の定義とその設定プロセスについて学びました。

通年

サステイナブルスクール同士の自発的な交流

通年

事業推進委員の派遣（5校）

リクエストに応じて事業推進委員がサステイナブルスクールを訪問し、モニタリングや指導助言を行いました。

サステイナブル スクールの 活動

2016年9月に24校のサステイナブルスクールが採択されました。次項より、成長を続ける各学校の2017年度の実績について紹介します。

サステイナブルスクール 採択校一覧

学校名	校種	都道府県
① 気仙沼市立面瀬小学校	小学校	宮城県
② 気仙沼市立唐桑小学校	小学校	宮城県
③ 登米市立米谷小学校	小学校	宮城県
④ 江東区立八名川小学校	小学校	東京都
⑤ 杉並区立西田小学校	小学校	東京都
⑥ 目黒区立五本木小学校	小学校	東京都
⑦ 横浜市立永田台小学校	小学校	神奈川県
⑧ 新居浜市立惣開小学校	小学校	愛媛県
⑨ 阿南市立桑野小学校	小学校	徳島県
⑩ 大牟田市立吉野小学校	小学校	福岡県
⑪ 石巻市立牡鹿中学校	中学校	宮城県
⑫ 大田区立大森第六中学校	中学校	東京都
⑬ 名古屋国際中学校・高等学校	中・高一貫校	愛知県
⑭ 福山市立福山中・高等学校	中・高一貫校	広島県
⑮ 静岡県立下田高等学校南伊豆分校	高等学校	静岡県
⑯ 広島県立安古市高等学校	高等学校	広島県
⑰ 愛媛県立新居浜南高等学校	高等学校	愛媛県
⑱ 独立行政法人国立高等専門学校機構 福島工業高等専門学校	高等専門学校	福島県
⑲ 千葉県立桜が丘特別支援学校	特別支援学校	千葉県
⑳ 愛知県立みあい特別支援学校	特別支援学校	愛知県
㉑ NPO法人 東京賢治の学校 東京賢治シュタイナー学校	その他	東京都
㉒ 特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園	その他	神奈川県
㉓ 特定非営利活動法人 京田辺シュタイナー学校	その他	京都府
㉔ NPO法人 箕面こどもの森学園	その他	大阪府



気仙沼市立面瀬小学校

面瀬発!! 今を見つめ 未来へ漕ぎ出す 環境・海洋教育プロジェクト

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

地域の人とかかわり、自然とふれあいながら、「海と生きる」ふるさと気仙沼への思いや考えを深め、自分の考えを表現し、行動できる「持続可能な社会の創り手」としての児童の育成を目指した。

学区には、古くから地域の水田を潤し、気仙沼湾の生態系や養殖業を支えてきた面瀬川が流れ、児童が生物多様性や山・

川・里・海のつながり等について学ぶ最適な環境が整っている。震災後には、地域社会の課題を背景に「復興」「地域づくり」という新たな創造の視点を活動に取り入れた。恵まれた学習フィールドを生かし、地域の企業や行政、大学等と連携・協働し、ステークホルダーの関係を強化しながら地域に根ざした探究型の学習活動を展開した。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営 ○
- 教室内外の学び ○
- 設備と環境 ○
- 地域との連携 → **連携** ✓

自分たちでデザインシートをアレンジ

<実践例1> 幼保小連携の取組

本校独自のスタートカリキュラムを作成し、幼稚園・保育所との連携を図った。今年度は、教員同士の情報交換を定期的に行い、幼児を発表会や生活科の学習に招待する従来までの取組に加え、小学生が幼稚園・保育所を訪問したり、1年生だけでなく全学年が幼児とかかわったりするなど、連携の強

化に努め、意義ある接続を目指している。「おもせのしぎ～おもせこまつりをひらこう」(1学年・46名 11月)では、児童が季節感あふれる手作りのおもちゃで遊びながら幼児と交流し、活動を通して交流の楽しさや自己の成長を実感することができた。幼稚園・保育所側からも「小学校入学への期待感が高まった」等の声が聞かれるなど、

相互を理解し、小1ギャップを埋める上でも大きな成果を収めている。

<実践例2> 大学の先生と生き物調べ「未来に残そう面瀬の生き物」(3学年・53名/5月～2月)

3年生は、面瀬川や周辺の田畑にすむ生物について探究活動を行った。宮城教育大学の溝田浩二先生を講師とし、生物多様性を学び、春・夏・秋3回の観察会を実施することを通して、児童は、地域の自然のすばらしさ、自然を守る必要性を実感していた。また、面瀬川ふれあい農園で海藻肥料を利用し野菜栽培を行い、学年PTA行事でカレーにして味わった。この活動は、環境・海洋学習へ保護者の目を向けさせるよい契機となった。



変容 (TRANSFORMATION)

学校

学校の経営の基盤にESDを据えたことで、教育目標、児童に育みたい力など、一つ一つの教育活動のねらいと意義が明確になった。ESDをテーマに全校(全家庭)でかたるた作りに取り組んだ。親子で学校の取組を振り返り、表現する楽しさを味わうとともに、改めて実践の価値を見直すことができた。また、取組や価値を積極的に発信することで、保護者の理解が得られ、ボランティアの申し出も増えた。児童、保護者、教師、地域が一丸となり学校を作り上げていこうという雰囲気が高まった。

教員

サステナブルスクール研修会への参加と校内伝講会を通して他校の魅力に触れ、本校もより多面的な魅力のある学校にしていこうという意欲が生まれた。また、ホールスクールとし

てのとらえについて共通理解したことで、総合的な学習だけでなく学校行事や児童会活動等学校教育全般においてESDを意識した取組が実践された。

児童生徒

自分たちの生活は、自然環境と人間、社会と深くかかわっていることを知り、地域を支える人々の存在や身近な自然のよさ、自分たちにできることを継続して行うことの大切さに気付くことができた。また、探究的な学習過程を通し、課題意識の向上と探究のためのスキルを身に付けることができた。体験や考えを多様な方法で表現し、表現力を身に付け、リーフレットの形で発信することで、地域や保護者の啓蒙を図ることができた。学習の成果や児童の変容を広く発信する。

学校情報

学校名 気仙沼市立面瀬小学校
 児童・生徒数 320名
 住所 〒988-0133 宮城県気仙沼市松崎下赤田58番地

TEL (0226) 22-7800
 FAX (0226) 24-7215
 E-MAIL omose-sho@kesenuma.ed.jp
 HP http://www.kesenuma.ed.jp/omose-syou/

気仙沼市立唐桑小学校

未来につなげよう！豊かな海を！ー カキ養殖体験活動を中心とした取組を通してー

KEYWORD
環境学習 その他

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

本校は、カキ養殖体験を中心とした体験活動を通して、唐桑の海の豊かさや人と人の関わりやつながりの大切さを実感し、ふるさと唐桑が今後も持続可能な社会として持続・発展していくことができるよう、地域の課題を探求しながら自分が地域のためにできることを考え実践する力を養うことを目標に、海洋教育に取り組んでいる。

地域と連携した体験学習は、児童に多くの学びをもたらす。児童は、様々な活動の中で地域の人々が自然を大切にしながら、

自然を活用するために培ってきた知識や技を学び、自分たちが生まれ育った地域を深く理解していくことになる。そして、地域のよさを存分に感じることができた児童は、自己肯定感をもち、様々な活動意欲につなげていくと考えた。以上のことから、本校では、豊かな心をもち、ふるさと唐桑を愛する子どもを育てる海洋教育を通した「未来に生きる人材育成」をビジョンとして掲げた。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

(1) 1・2年生「海に親しもう」

4月に自分たちで飼育してきたサケ稚魚を放流し、10月からは次年度の放流に向けたサケの飼育活動を開始した。また、唐桑幼稚園と合同で学校近くの浜で磯遊びを行うことにより、幼稚園児との交流を深め、自分の成長を実感した。さらに海藻押し葉を作るなど海と親しむ活動を行った。

(2) 3年生「ワカメのひみつを探ろう」

地元で養殖されているワカメについて自分なりの課題をもち、地域の方や外部講師の協力を得て課題解決に取り組んだ。ワカメ工場の見学やワカメ養殖業者との交流を通してワカメの生産や加工・販売など地域の産業に従事する人々の努力や工夫を知った。

(3) 4年生「カキのひみつを探ろう」

カキ養殖体験の1年目としてカキの種はさみを体験した。また、カキの解剖を通してカキの生態についての理解を深めた。さらに、カキ筏の仕組みを理解するために、地域の方から協力を得てカキ筏の模型を製作した。難しい作業を疑似体験することで地域の人々のカキ養殖に対する苦労や工夫を知った。

(4) 5年生「カキが育つ環境を考えよう」

岩手県一関市の山で行われる「森は海の恋人植樹祭」に参加し植樹した。その後地元のカキ筏の周りにはいるプランクトン採取して調べ、プランクトンの豊富な海にするためにはその栄養分を作り出す森が必要であることを学んだ。また、森と川と海の実感できるように、気仙沼湾内クルーズを行って川と海が交わる場所を観察した。さらに、唐桑を海側から見ることを通して地元の自然のすばらしさに気付いた。

(5) 6年生「豊かな海を発信しよう」

カキの温湯処理見学やカキの水揚げ、カキむきを体験した。地元のカキまつりに参加し、カキの販売を体験して地域の方との交流を図った。また、唐桑のよさをどのような方法で発信するのかを自分たちの課題として捉え、唐桑のカキをPRするために、カキのキャラクターを考え、それを描いた「唐桑オリジナルフォルダー」を制作し配付した。さらに、多くの場で6年間に学んだことをまとめ、発表した。

(6) 全校

海に関わる学びの発表とお世話になった方への感謝を伝えるため、全校児童が参加する「リアスサミット in 唐桑」を企画し、海洋教育推進のために支援していただいた地域の方を招いて開催した。



変容 (TRANSFORMATION)

学校

全職員で目指す児童像の共有を図り、指導の方針を明確にすることで、海洋教育を支える組織を整えることができた。また、系統性をふまえた海洋教育にしていけるために唐桑幼稚園・唐桑中学校との連携を深め、中心的立場で海洋教育を推進していくことになった。さらに、児童の学びの発信を通して、地域の方や保護者に本校の取組のよさを実感してもらうことができ、学校・地域・家庭の協働体制をより強固なものにすることができた。

教員

本校の海洋教育の全体像が分かるホールスクールアプローチデザインシートを全職員で共有することで、それぞれの活動のねらいが明確になり、指導体制を整えることができた。そ

の結果、教員は自身に取り組んでいる活動に自信と誇りをもつことができ、積極的に研修したり、児童の実態に合わせた体験学習を開発したりするなど、主体的に海洋教育を進めていくようになった。

児童生徒

体験学習を行うことで、唐桑地域が海から豊かな恵みを得ていることを知り、また地域の人々に対して尊敬と感謝の気持ちをもつことができた。体験したからこそ感じたこと、気付いたこと、分かったことを自分の言葉で伝えたことは、表現力や発信力の向上につながった。地域の自然や地域の人々から学ぶ活動を通して、ふるさと唐桑に生まれたことに誇りをもつことができ、未来に生きるための探求心や実践的態度を身に付けた。

学校情報

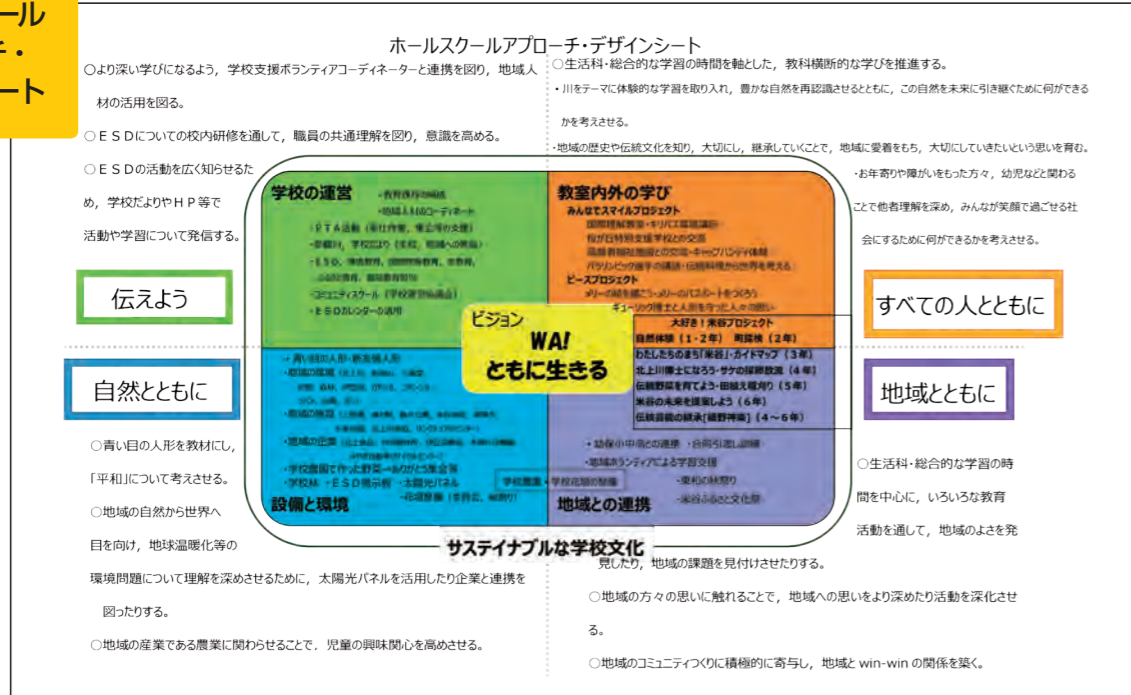
学校名	気仙沼市立唐桑小学校	TEL	(0226) 32-3142
児童・生徒数	82名	FAX	(0226) 32-3071
住所	〒988-0533 宮城県気仙沼市唐桑町明戸 208-6	E-MAIL	karakuwa-sho@kesenuma.ed.jp
		HP	http://www.kesenuma.ed.jp/ karakuwa-syou/

登米市立米谷小学校

WA! 米谷 – ともに生きる –

KEYWORD
世界遺産や地域の文化財等に
関する学習 その他

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

昨年度のキーワードは「WA! 米谷」とし、「WA」には、「話・和・輪・我・わっ!」といった意味を含め、広くESDを捉える言葉とした。ただ、共通のビジョンとしたときに、なかなか捉えづらという面があったため、もう一度児童のゴールの姿を考えながら、ビジョンを修正することとした。本校は、生活科・総合的な学習の時間を中心に「自然とのつながり」「地域とのつながり」「人とのつながり」を大事にしながら学習を進めてきた。その中で、「なぜつながることが

必要なのか」「30年後もみんな笑顔で過ごすためにはどうしたらよいか」を考えたと、共通のビジョンとして「ともに生きる」というキーワードが捉えやすいのではないかと考えた。「自然とともに生きるには・地域とともに生きるには・すべての人々とともに生きるには、どうしたら良いのか」という課題について児童も教師も考えていくことで、活動や学習の目的が焦点化され、自ずと同じ方向を見ながら進めていけるのではないかと考えている。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

みんなでスマイルプロジェクト

- 桜が丘支援学校交流(自己紹介カード)3年総合20名(7月)
- 桜が丘支援学校交流(共同制作)3年総合20名(10月)
- 桜が丘支援学校交流(学校紹介)3年総合20名(2月)
- パラリンピック学習 3年総合20名(6月・2月)
- キャップハンディ体験(障害者理解)3年総合20名(2月)

- キャップハンディ体験(高齢者理解)4年総合22名(2月)
- 米谷のユニバーサルデザインを考える5年総合12名(2月)
- エコキャンドル作り・ミニエコ講座 4年22名・保護者22名(1月)
- キリバス環境講座 5・6年総合32名(9月)
- 地球温暖化と3R 5年家庭科12名(12月)

- 地球温暖化を防止するために 6年総合20名(1月~2月)
- MIA国際理解教育 1~6年生活・総合109名(10月)

大好き!米谷プロジェクト

- 米谷の紹介ガイドマップ作成 3年総合20名(5月~9月)
- 登米市の伝統野菜(調べる・まとめる・提案する)5年総合12名(4月~10月)
- 登米市の伝統料理(調べる・まとめる・他地域とつなげる)6年総合20名(5月~11月)
- 伝統料理から世界を考える 6年総合20名(11月~12月)
- 未来の米谷を提案しよう 6年国語20名(12月)
- 公園(三滝堂)に出かけよう 1・2年生活35名(9月)
- 北上川(支流の生き物調査)2年生活11名(6月)
- 北上川(調べる・体験する(舟下り・サケの採卵放流)・まとめる)4年総合22名(5月~2月)
- 伝統芸能(細野神楽) 3~6年総合74名(5・2月)

ピースプロジェクト

- 青い目の人形(絵を描く)1・2年図工35名(6月)



- 青い目の人形(歴史を調べる)3年総合20名(10月)
- 青い目の人形(他の青い目の人形を調べる)5年総合12名(10月)
- 青い目の人形(平和について考える)6年総合20名(12月)

変容 (TRANSFORMATION)

学校

- 今まで以上に地域とのつながりを意識し、学校運営協議会や地域コーディネーターとの連携を図っている。
- 学習参観で総合的な学習の時間の学びを発表する場を設定し、保護者等にESDについて発信する。(2/24)
- 地域とのwin-winの関係を築くために、「米谷のふるさと文化祭」では、学校の古い写真や青い目の人形の展示なども行い、「地域の学校」としての役割を意識した活動を行っている。

教員

- 「ともに生きる」というビジョンを共有することで、今までの学習をESDの視点から見られるようになってきている。
- ESDカレンダーを活用しながら教科横断的な学びを意識し、いろいろなアプローチの仕方を考えながら授業や活動

- を行っている。
 - 単に指導計画どおりに進めるのではなく、児童の「ゴールの姿」を意識しながら学習や活動を考えるようになってきている。
- ### 児童生徒
- 地域の伝統や歴史、環境を調べる活動を通して、「米谷のよさ」を知るとともに、「伝統を受け継ぐこと」の大切さを下学年に話すようになった。
 - 温暖化防止のちらしや地域のガイドマップを配布するなど、「発信しよう」という意欲が高まった。
 - 福祉や環境の問題について進んで調べたり、学習や普段の生活の中でもESDの学びと関連づけて考えたりするようになってきている。

学校情報

学校名 登米市立米谷小学校
 児童・生徒数 108名
 住所 〒987-0902 宮城県登米市東和町米谷字越路75

TEL (0220) 42-2006
 FAX (0220) 42-2049
 E-MAIL maiya-syo@city.tome.miyagi.jp
 HP http://www.tome-svr.jp/~maiya-syo/html/

江東区立八名川小学校

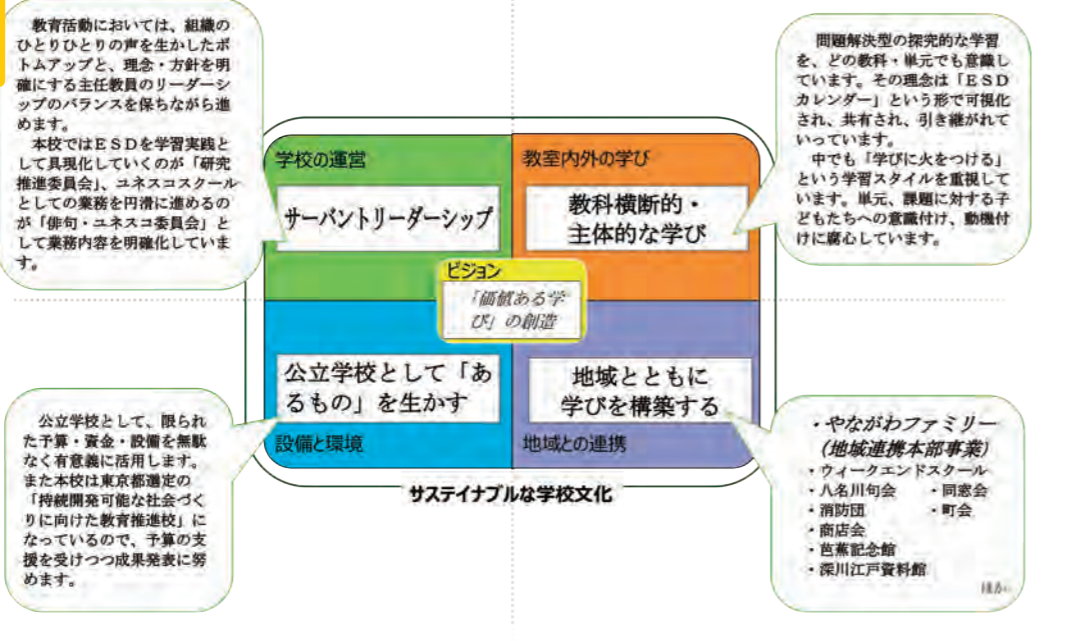
「ESD」「地域密着」「愛」= 未来を豊かにしていく学び

防災学習 生物多様性 気候変動 エネルギー学習
環境学習国際理解学習 世界遺産や地域の
文化財等に関する学習 その他

KEYWORD

ホールスクール アプローチ・ デザインシート

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

学習指導要領が「持続可能な社会の創り手」の育成を目指し、ESDを全面に掲げたときに、「理論は分かるがその具体的な姿が見えない」ようでは、どの学校の校長たちも、従来の教育観を変えられないであろう。だからこそ、ESDを目指して、ESDカレンダーを中心にカリキュラム・マネジメントに取り組み、学びに火をつける導入の工夫を中心に問題解決的な

学習過程づくりを進め、対話の基盤となる民主的で温かな人間関係を基盤とした価値ある学校の姿を示したいと考えている。本校は、ESDの推進校であると同時に、学習指導要領で示そうとしている、新しい時代の日本の教育の姿を提示する学校でありたいと考え、「価値ある学びの創造」を掲げることにした。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

ESDを中心としたホールスクール・アプローチによる学校運営に取り組む

●研究主題を「しんのある子の育成」副主題を～こどもの学びを深めるカリキュラム・マネジメントと学習過程の確立～と定め、全校体制でESDを通じた「価値ある学びの創造」に取り組み、その成果を、ユネスコスクール及び、サステイナブルスクールとして発信し続けている。主な取り組みは次の4点である。

- ①「一人一人を尊重する学校」という視点を踏まえ、一人一人の「子どもの学び心に火をつける」ことを重視した主体的な学習過程の上に、互いの良さを認め合う温かな校風をベースとした「対話的な学び」の進め方について、校内研究会を通じて研鑽を深め、その成果を日常の教育活動に活かし、学びの活性化を図っている。
- ②「ESDカレンダー」を活用することで、教科等を横断的・総合的に結びつけ、体験やふれ合いを取り入れ、地域

に根ざした教育活動の実現を図る。だれがどの学年を担当しても、前年度までの取り組みや指導資料が全て共有されているので、「その先の研究」を進めることができている。

- ③ ESDに関する重要な行事を年間の学習課程に位置づけ、そこに向かって、児童や職員の意識が自然に高まるような工夫をしている。その主なものは、次の3点である。
 - 6月「アメリカ教育視察団の受け入れと全校での交流」児童が自然に世界を意識できる。
 - 9月 江戸・深川の歴史を語ろう」これは、深川江戸資料館を舞台にした地域の歴史学習発表会である。自分の町の文化理解は、国際理解の原点である。
 - 2月「八名川まつり・パワーアップ交流会」どの学年も、自分たちの学びを全校の仲間に向かい、地域や保護者に向かい全力で発信をする。相手を替えて発信を繰り返す中で、自分の考えが整理され、深まり、実践への責任も意識されるようになる。
- ④ 研究活動の公開と相互交流の促進のために、
 - ホームページ上に平成22年度以来開発してきた毎年の授業研究における「指導案・単元展開表・ESDカ



レンダー」を全て公開し、各校での実践的な研究の参考に供する。

- 校内研究会の日程を公開し、参観と受け入れの促進をする。
- ESD研究発表会、ユネスコスクール全国大会、サステイナブルスクール研修会、日本ESD学会等の等への参加と事例等の発表等の手立てに取り組んでいる。

変容 (TRANSFORMATION)

学校

「自分の考えを発信する授業」「友達の考えを尊重する授業」「多様なアイデアが溢れ出す授業」を各学年で指導することで、子ども同士の温かい人間関係が育った。また、保護者・地域の授業参加が進む授業を展開することで、学校に対する信頼が高まり、子ども達を安心して通わせられる学校となった。

教員

ESDの指導で身に付けた「子どもの学びに火をつける問題づくり」「自分の考えを深めたり友達と合意形成を図ったりする対話型授業」といった指導法を各教科の授業でも活用するようになった。これにより、全国学力状況調査において算数の

B問題が18%、国語のB問題が15%向上すると成果も見られた。

児童生徒

児童アンケートより、3・4年生では、「友達と話し合うことで自分の考えが広まったり深まったりした」、「社会の役に立ちたい」、「他の人と協力して持続可能な社会を作っていきたい」と考える児童が増えた。5・6年生では、「学んだことをつなぎ合わせ自分なりの考えをもつことができた」、「自分で課題を見付け解決策を考えることができた」と考える児童が増えた。

学校情報

学校名 江東区立八名川小学校
児童・生徒数 365名
住所 〒135-0007 東京都江東区新大橋 3-1-15

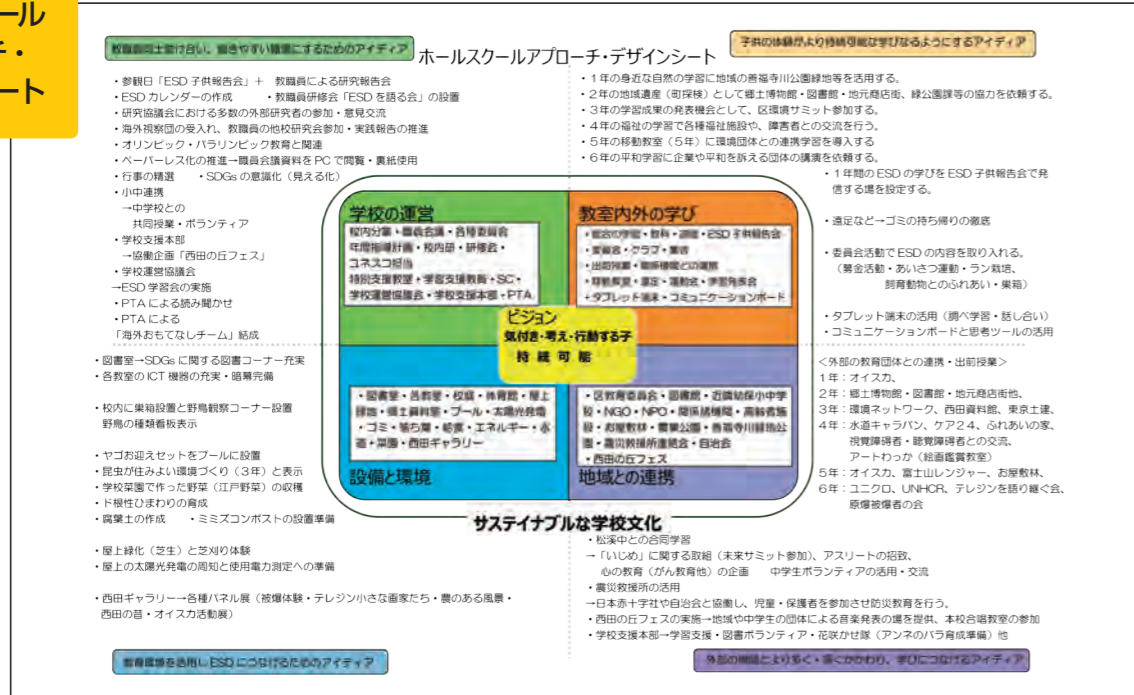
TEL (03) 3631-2260
FAX (03) 3631-3127
E-MAIL t-tejima@koto-edu.jp
HP http://www.koto.ed.jp/yanagawa-sho/

杉並区立西田小学校

人・自然・社会とのかかわりを大切にし、気付き、考え、行動する子を育てる

KEYWORD
 生物多様性 環境学習 国際理解
 世界遺産や地域文化財等の学習

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

本校では本年度より教育目標を「気付き・考え・行動する子」に改訂した。これは今までの教育目標が「知・徳・体」のバランスの取れた人間を育てることをうたっていることに対し、ユネスコスクールとして取り組む「ESD」の視点を重視したことによる。人・自然・社会などとの「かかわり」や「つながり」を大切にし、世界的な視野で課題について考え、足元から行動する子供を育成することが本校のビジョンである。このビジョンを達成するために、次のような観点から取り組んでいる。

- ① ESD カレンダーの改定
 - ② 各学年の授業実践（総合的な学習の時間・生活科）
 - ③ 地域の教育力を生かした開かれた教育課程の実施
 - ④ ホールスクールアプローチの視点に立った、全教育課程からの ESD の取組
 - ⑤ 子供の学び・児童の変容に着目した成果の分析
 - ⑥ 公開研究授業ならびに研究発表会の実施
 - ⑦ 他校サステナブルスクールとの実践交流
 - ⑧ 「持続可能なまちづくり」を目指した地域と協働した活動への拡大
- これらの取組は、サステナブルスクールとして歩んできたもので、日は浅く、模索する日々であるが、「持続可能な学校」を目指して着実な一歩を進めていきたいと考える。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

【授業改善】

- 教職員研修会「ESD を語る会」を設置し、学年を超えた教員間で単元開発について話し合う場とした。(年 6 回実施)
- ESD カレンダーの改訂を実施し、授業改善に取り組んだ。(各学年)
- オリンピック・パラリンピック教育と関連させ、授業の充

実を図るとともに、国際理解や交流、伝統文化、ボランティア活動を重視する。(全学年)

【学習・研究の発信】

- 全児童による「ESD 子供報告会」を設定し、保護者・地域・関係諸機関に子供の学びを発信した。(2月の土曜公開日) また、同日に本校の研究実践報告会を開催した。

- ユネスコ協会支部と連携し、ユネスコ協会関係者に本校の実践を発表する機会を得た。

【教員の研修と他校サステナブルスクールとの交流】

- 研究会には多くの研究者を招き、研究協議会に参加してもらった(年間 50 人)
- ACCU から講師を招き、ユネスコスクールについての理解を深める研修会を実施。
- 研究報告会で、他区市のサステナブルスクールや ESD に取り組む学校(清瀬・清明小、多摩・多摩二小、大田・大森六中)の実践から学ぶ場を設定し、教員の研修とした。
- 他のサステナブルスクールの校内研修(江東・八名川小)に教職員を参加させ研修の場とした。(年間 3 回)

【海外との交流】

- 海外からの視察(本年度 9 か国、年間 80 人)を受け入れた。
- 海外との交流機会を使って、日本文化の紹介や環境問題への意見交換、歓迎セレモニー等を実施。受入れ体制が整えられてきた。

【学校内のエコ活動 / 働き方改革】

- 年度末評価を受け、職員会議資料はペーパーレスを基本とする。
- 落葉貯めを設置し、ボランティア活動につなげる。(準備中)
- ペットボトルキャップ・ベルマーク・古本の回収の呼びか



けを行っている。

- 学習発表会の休日開催をやめ、学校支援本部企画の夜間開催で教員の勤務を削減した。

【社会に開かれた教育】

- 小中連携として中学校との交流学习に ESD の視点を取り入れた話し合い活動を導入。
- 学校運営委員会(10月より)に ESD 学習会を取り入れ、理解を深める取組を推進。

【PTA との連携】

- PTA による読み聞かせ(読書週間)
- PTA による「海外おもてなしチーム」の結成と通訳ボランティアの活動を取り入れた。
- 学習発表会(展覧会)の夜間開催を学校支援本部の企画運営に任せ、「トワイライトミュージアム」を実現した。

変容 (TRANSFORMATION)

学校

- ESD を取り入れた授業改善に取り組んできた実績を、学校の特色ある教育活動としてアピールすることができるようになった。
- 海外との交流(視察)の機会を通して、ユネスコスクールとして ESD に取り組む必要性を認識する機会を得た。ESD に関心がある研究者とともに研究協議会を行うなど、開かれた学校経営が進んだ。
- 地域の教育力を活用した教育活動が充実し、地域との連携がより深まった。地域と協働した企画も始めることができた。

教員

- ESD を取り入れた授業の仕方も理解され、子供の主体的な学びを大切にしようとする意識が高まってきた。
- 教育目標「気付き・考え・行動する子」が浸透し、ESD を

通して世界的な視野で考え、足元から行動することの大切さを指導しようとする教員が増えてきた。

- ホールスクールアプローチという意識が徐々に広がり、教育活動全体を通して改善しようとする意識が出てきた。

児童生徒

- 身近な自然や地域の施設や人とのかかわりを通して、自然や地域を大切にしようとする意識が高まってきた。
- 福祉や環境問題、国際的な課題について調べ、考える機会が増え、課題解決について自分の考えを発信するようになってきた。
- 海外の方とも抵抗感がさほどなく、交流することができるようになった。

学校情報

学校名 杉並区立西田小学校
 児童・生徒数 600 名
 住所 〒167-0051
 東京都杉並区荻窪 1-38-15

TEL (03) 3392-6828
 FAX (03) 3393-7591
 E-MAIL ARAI-MASAAKI@city.suginami.lg.jp
 HP http://www.suginami-school.ed.jp/nishitashou

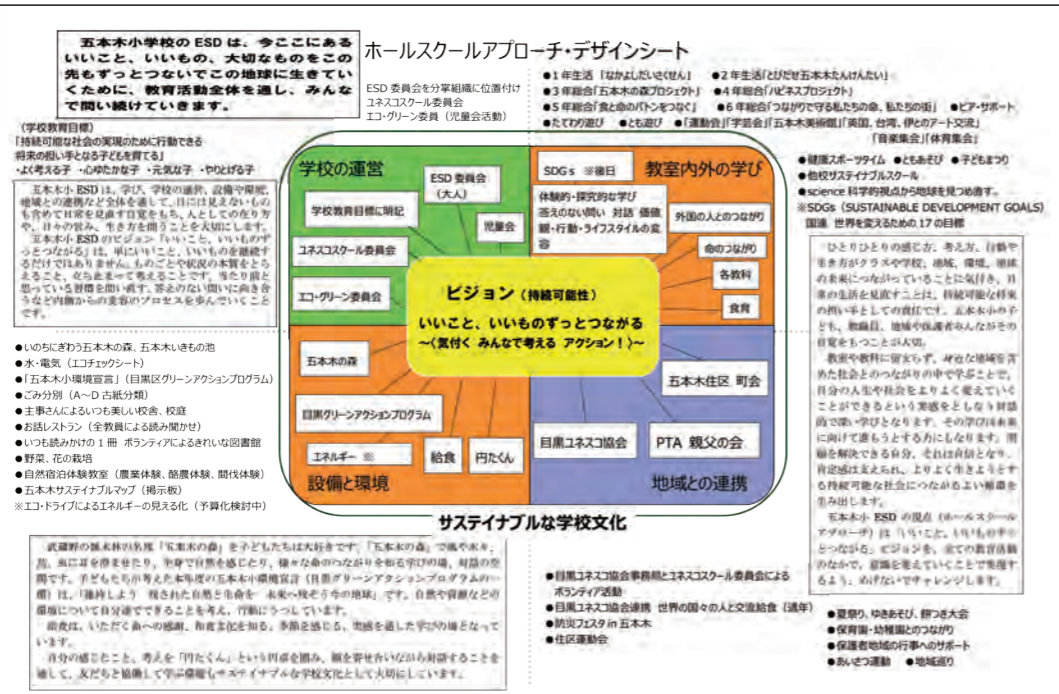
KEYWORD

防災学習 生物多様性
環境学習 国際理解学習

目黒区立五本木小学校

いのちのバトンをつなぐ ユネスコスクールの子

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

「学びをつなげ 深め 広げる子どもの育成」に向け、「命のつながり」や「対話」を通じた探究的な学びを継続的に行ってきた。身近な問題や気づき、現実的な問題を問う学びの楽しさを子どもたちは実感しつつある。さらに行動やライフスタイルの変容に向けて学びを深めていく必要があると考えてきた。そこで、生活科や総合的な学習の時間だけでなく、「学び、学校の運営、設備や環境、地域との連携」など全体を通し、

目には見えないものも含めて日常を見直す自覚をもち、人としての在り方や日々の営み、生き方を問うことを大切にします。「いいこと いいものずっとつながる」は単にいいことやいいものを継続するだけではありません。ものごとや状況の本質をとらえること、他者へ傾聴すること、想像力を働かせ、佇んだり立ち止まって考えることです。当たり前と思っている習慣を問い直す、答えのない問いに向き合うなど、内側からの変容のプロセスを歩んでいくものです。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)



- ① 学校教育目標に ESD の視点を明記した。「持続可能な社会の実現のために行動できる将来の担い手を育てる」として〈よく考える子・心豊かな子・元気な子・やりとげる子〉の育成を図っている。
- ② 特色ある教育活動として教育課程届出にユネスコスクールとして ESD を推進し、持続可能な社会の担い手を育てることを明記した。

- ③ 学校組織分掌に「ESD 委員会」を設置。低・中・高・専科・副校長の 5 名でホールスクール・アプローチに向けた提案、共有、実践に向けた推進を行っている。本年度の ESD の取り組みをリーフレットにまとめ、保護者や地域、他校ユネスコスクール、サステイナブルスクールへの発信に活用した。
- ④ 「五本木小学校環境宣言」集会の実施。「目黒区グリーン

アクション・プログラム」に向けたを特別活動を中心に「ユネスコスクール委員会」「エコ・グリーン委員会」が企画・運営。本年度の宣言文「維持しよう 残された自然と生命を。未来へ残そう 今の地球」を目指して、各学級で目標をたて、「エコ・チェックシート」による月々のエコ活動を実施し、エネルギーの削減をし、自己評価している。特色的なエコ活動を昼の放送で紹介している。ユネスコスクール委員会は毎日の気温を記録し、平均気温や季節の変化、草花の紹介、二十四節季についてなど、自分達でテーマを決め、昼の放送で発信している。また「世界寺子屋運動」の書き損じはがきキャンペーンを年間 2 回全校で取り組んでいる。

- ⑤ ESD 研修会の実施。他校サステイナブルスクール住田校長先生を講師にお迎えしトークセッションとワークショップによる対話
- ⑥ 他校サステイナブルスクールとの交流。京田辺シユタイナー学校を栄養教諭が訪問し、ESD 研修会で共有
- ⑦ ユネスコスクール研究大会への参加
- ⑧ 「五本木小サステイナブルマップ」を職員室前掲示板に更新。「ホールスクールアプローチ・デザインシート」



の形式で子どもの姿を写真で構成し、更新している。

- ⑨ 「答えのない問い」を大切にしたい体験的、探究的な実感をともった学びを大切に、五本木小 ESD の視点〈いいこと いいもの ずっとつながる〉ビジョンを、全ての教育活動の中で、一人一人が意識を変えていくことで実現していく。一人一人の感じ方、考え方、行動や生き方が、クラスや学校、地域、環境、地球の未来につながっていることに気づき、日常生活を見直すことが持続可能な未来の担い手としての責任である自覚を、子ども・教職員・保護者・地域のみんながもつことを大切にしたい。

変容 (TRANSFORMATION)

学校

ビジョンを共有したことで、自分にとっての ESD を意識していくベースができた。ESD 研修会他校サステイナブルスクール校長先生と本校校長の ESD トークセッションとワークショップは教職員に揺さぶりがかけられるものであった。自ら学んで理解を深めたいと思う教員、家庭で家族に伝えたい教員、学校だけでなく社会全体で取り組む必要があることを実感した教員の姿が多く見られた。

教員

ゲストティーチャーを自ら探して招いたり、教材を見付けたりして子どもが問いや課題を発見できるような学びをつくりだすことが楽しいと思える教員の姿があった。また ESD に関する研修会を見つけ、自ら参加する教員がいた。他校サステ

イナブルスクールとの交流により、そこでの気付きや触発されたことを職員室で話題にし、早速自分の授業に取り入れて工夫したことで生まれた子どもの姿を、嬉しそうに共有する姿があった。

児童生徒

地域に暮らしている人との関わりを多く持つことで、自分の知っている人、仲良くなれた人と笑顔で話すようになった。虫や植物に触れることが出来なかった子が、森について学び、触れるようになった。5 年生は和食の危機を知り、自分達が未来につないでいかなければという意識が生まれ給食の和食残菜率が 4% 減った。6 年生は自然災害などのニュースが頻りに流れる昨今、問いから生まれた課題に対し調べたり対話をしたりして深めた学びを家族と話すようになった。

学校情報

学校名 目黒区立五本木小学校
児童・生徒数 390 名
住所 〒153-0053 東京都目黒区五本木 2-24-3

TEL (03) 3711-8494
FAX (03) 3711-8420
E-MAIL meghngeh@meguro.ed.jp
HP http://www.meguro.ed.jp/meghngeh/

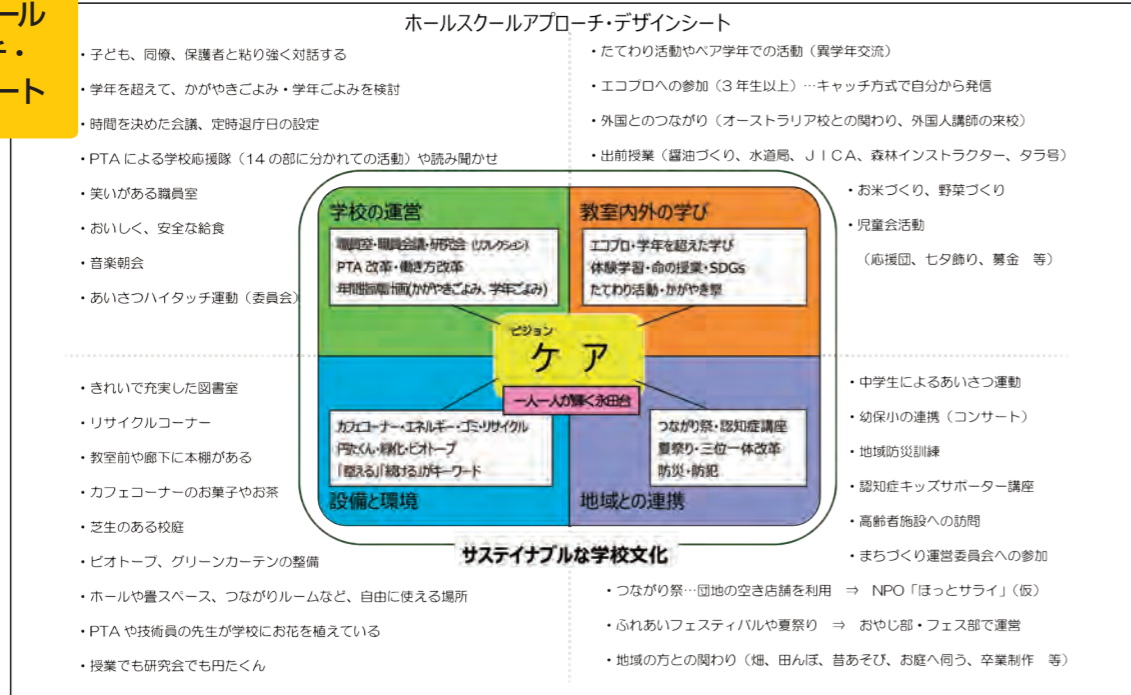
横浜市立永田台小学校

自分から世界へ発信する永田台

KEYWORD

その他 (ESD、ケア、もみじアプローチ)

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

「一人一人が輝く永田台」とは、本校の学校教育目標である。教育活動を通して、子どもたちに輝いて欲しいという願いがある。この目標を達成するには、まず私たち大人が輝いている姿を子どもたちにモデルとして見せる必要があると考える。

本校では「ケア」というビジョンを策定した。このビジョン

から、職員室環境の整備、勤務時間の軽減を行い、教員が元気に気持ちよく学校の中で過ごせるような変革を目指してきた。教員どうしのケアを、教員から子どもへのケアへ、そして子どもどうしのケアへと拡げ、学校全体にゆっくりと浸透させていきたい。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

- 6学年が1学年に掃除の仕方や名札の付け方、2学年が5学年にかけ算九九や数の計算、4学年が1学年、5学年が3学年、6学年が2学年に、歌詞を手話で伝えた。相手に合わせた話し方、関わり方を主体的に行動した。
- 地区センターやコミュニティハウスへ出向き、利用者さんが喜んでもらえるような企画（歌の発表や昔遊び）をした。
- 教職員対象の才能開発支援研修で、自己理解、他者理解をし、自分の強みを伸ばすことについて学んだ。教員同士の

- つながりが豊かになっていると感じている。
- 3年生以上の子どもたちは、エコプロダクツ展に参加している。環境問題について、企業、NPO法人、大学等教育機関、諸外国の団体等の団体がどのように取り組んでいるかを知り、興味を持つことができた。また、自分達の取り組みを来場者に伝えることで、自信をつけ、これからのやる気につなげたり、新たな知識を得たりすることができた。



変容 (TRANSFORMATION)

学校

- 地域・保護者の方に、どんな学びを大切にしているか、広く知ってもらいたいという思いで行動する場面が増えた。例えば毎年行われる、総合的な学習の時間・生活科の学びを発表する場である「かがやき祭」では、地域の方にも来ていただき、どのような活動をしているか見てもらっている。また、研究授業を公開し、NPO法人や民間企業の方々にも来ていただき、色々な視点から見た助言をいただくことができています。

教員

- 一言でいうと、「連帯感」「信頼感」が強くなった。日々生まれる課題や問題には学年・ブロック、はたまた「学校全体」で取り組みたいという意識が教職員全体に生まれた。児童の顔や実態や拝啓も全員で共有し、みんなで解決策を模索したり、声かけをしたりしている。授業の場面では、どんな教科・

活動でも、「ESDの視点」を置いて、未来のこと、地球のことを見据えた取り組みを考えることが浸透してきた。

児童生徒

- 自分の学年だけでなく、他学年の子でも困っている子がいると、自然と気にかけて自分から声をかける姿が見られるようになってきた。
- 代表委員会（児童会）で、4年生以上が意見を活発に交流し合っている。その中で、高学年が低学年のことを考えて提案事項について意見を述べている。また、毎回学校のいいところを出し合ってより一層よい学校にしていこう、いいところを次につなげていこうとする気持ちが溢れている。

学校情報

学校名 横浜市立永田台小学校
 児童・生徒数 479名
 住所 〒232-0075 神奈川県横浜市南区永田みなみ台6-1

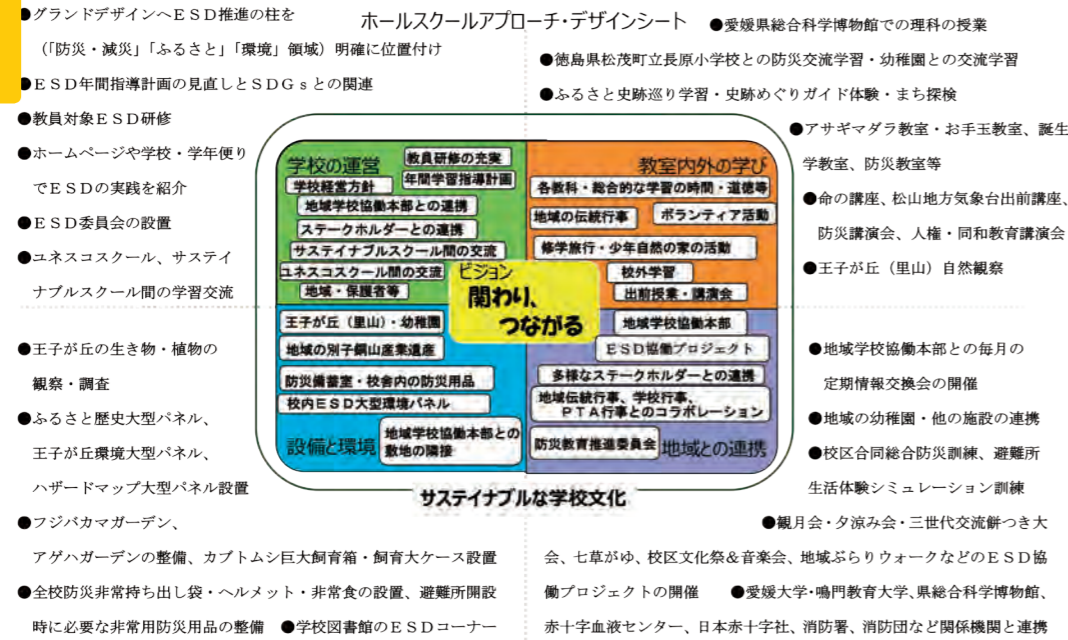
TEL (045) 714-4277
 FAX (045) 713-3631
 HP <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/nagatadai/>

新居浜市立惣開小学校

LOVE&SMILE! そうびらき つながる笑顔で まちがかわる

KEYWORD
 防災学習 環境学習 人権学習
 世界遺産や地域の文化財等に関する学習

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



域行事はほとんど学校と地域の協働プロジェクトになっている。そのため、地域住民4100人であるが、どの行事にも1800人もの参加者があり、地域住民の「感動」「愛顔」「学び」「憩う」場となってきた。地域全体が活性化し、様々

なボランティアの団体（ShareMama、HAPPYMamaなど、子育て中のお母さんたちのボランティア組織）も生まれ、主体的に活動している。

変容 (TRANSFORMATION)

学校

毎年、全学年の児童のESDの取組を保護者や地域に理解していただけるよう、ESDフェスティバルを開催している。「1年生から6年生のESDの学習が繋がっているのが理解できた」「ESDの中で取り組んでいる『防災・減災』『環境』『ふるさと』は、大人になっても大切な内容であり、特に、自然にあまり触れることが無くなってきた現代の子ども達にとって、自然体験の学習は貴重で命の尊さを実感する上で重要だ」という意見が聞かれた。

教員

ESDの考え方が少しずつ浸透してきたことにより、地域の良さを理解し、ESD活動に主体的に協力する教員も増えて

きた。現在だけでなく、「未来」「どんな社会にしたいのか」「そのために何をするのか」という問いを、子ども達に投げかけることができるようになってきている。

児童生徒

受け身ではなく、自分たちで「出身幼稚園や保育園に行って、本の「読み聞かせ」をして、人との絆を結んでいけるようなボランティアをしたい」、「原爆について学習する中で、世界の平和について考え、自分たちの思いを『平和の歌』（児童による作詞・作曲）にして、全校児童や地域の人たちに伝えていきたい」など気付き、考え、主体的に実践していく子ども達の姿が見られるようになった。

ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

- ビジョンの「関わり・つながる」については、校内研修（ESD研修）で、学校のESD推進の柱を来年度も引き続き「防災・減災」「ふるさと」「環境」領域で取り組もうと共通理解を図った。今年度、各学年で取り組んでみて、子ども達がどのように変容したか、取組の過程はどうであったか、今後、継続していく上で改善していくこと、ESDカレンダーの見直しをどうするかなど、低・中・高学年で話し合った後、全体での協議を深めた。
- 地域との協働ESDプロジェクトについては、地域が活性化してきている。来年度、再来年度は、市内全小中学校が

コミュニティスクールとして歩み始めるよう取り組んでいくことも踏まえて、本校も、今後も継続して、更に内容を深化させながら実施していこうと、惣開連合自治会、公民館、学校間で共通理解を図った。

- ESDでどのようなことを基本理念にもって取り組んでいくかについては、「立派な地球市民・立派な大人を育てること」という思いを根底に置いて、取り組んでいきたいと全体で共通理解を深めた。その中で様々な人・もの・ことと「関わり・つながる」ことをビジョンの中心に据えていこうと認識を深めた。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

- 地域との連携はますます充実し、今では、学校と地域が協働で動ける仕組みと絆が出来上がった。来年度はコミュニティスクールとして動いていけるよう、現在、準備に取り

掛かっている。
 ●観月会や夕涼み会、三世代交流餅つき大会、校内音楽会&文化祭、七草がゆ、地域ふらりウォークなど、今では、地

学校情報

学校名 新居浜市立惣開小学校
 児童・生徒数 321名
 住所 〒792-0008 愛媛県新居浜市王子町1番3号

TEL (0897) 37-3401
 FAX (0897) 37-3402
 E-MAIL sobe-ad@esnet.ed.jp
 HP http://sobiraki-e.esnet.ed.jp/cms/

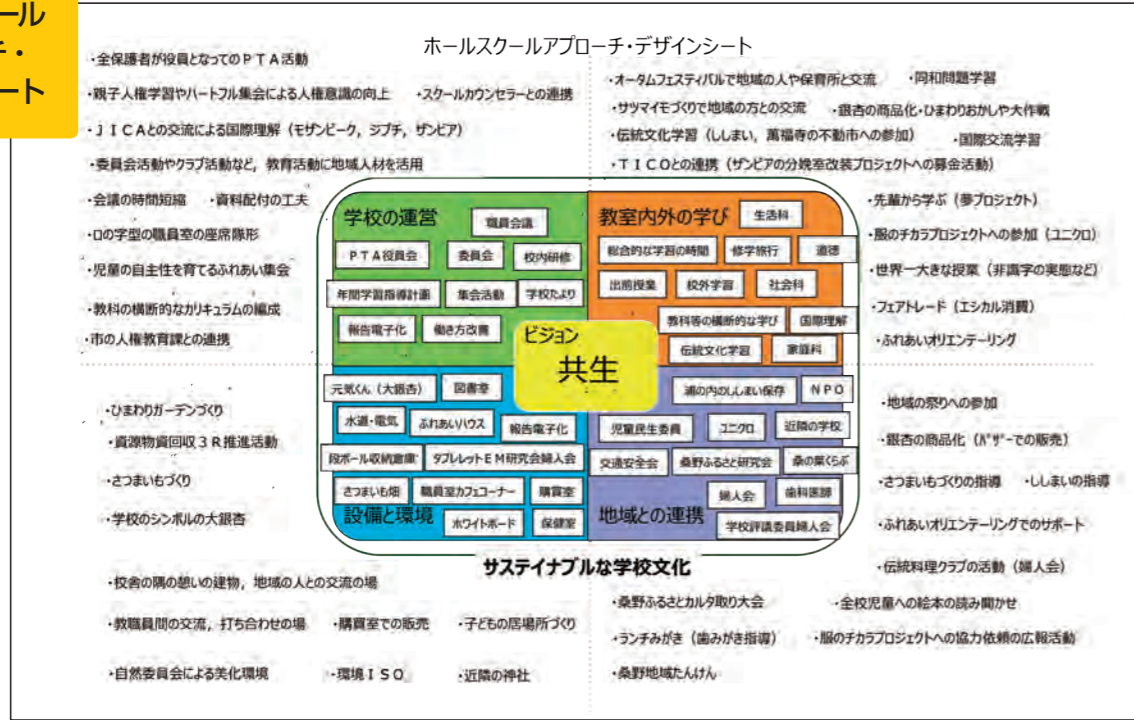
KEYWORD

環境学習 国際理解学習 防災学習
地域の文化財学習 生物多様性

阿南市立桑野小学校

地域文化を継承し、未来を変える・未来をつくる児童の育成

ホールスクール
アプローチ・
デザインシート



- 8月 サマーフェスティバルに参加
- 9月 服のチカラプロジェクトⅡ (5年19名) 総合…国際貢献できること (広報)
ひまわりお菓子屋大作戦 (特別支援学級5名) 生単・総合…消費者教育
- 10月 桑の葉クラブの活動をさぐるう (3年27名) 総合…ぼくたちへの思い
楽しいイモ掘り (1・2・3年77名) 生活・総合…地域の高齢者との交流
- 11月 ザンビアの現状 (5年19名) 総合…吉田医師から学ぶ
わくわくあきまつり (1・2年50名) 生活…保育所・地域の高齢者との交流
ふれあいオリエンテーリング (全校147名) 行事…

- 地域探検・地域交流
- 服のチカラプロジェクトⅢ (5年19名) …国際貢献できること (収集・発送)
銀杏販売 (6年23名) 総合…地域のJA祭で販売活動
- 12月 よりよい未来を考えてⅠ (6年23名) 総合…国際交流 (韓国・アメリカ)
- 1月 よりよい未来を考えてⅡ (6年23名) 社会…同和問題の解決に向けて
- 2月 わくわく学校へようこそ (1年22名) 生活…保育所との交流
服のチカラプロジェクトⅢ (5年19名) 総合…世界平和のためにできること

ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

少子化高齢化が最大の課題である小さな町の子どもたちが、地域住民と共に多様な活動を行い、世界的視野で行動することをめざしたい。そして、地域での体験・交流活動を通して、ふるさと桑野のすばらしさに共感し、持続可能な社会をつくるために互いの人権を尊重し合える子どもを育てたいと考える。

他者と積極的にコミュニケーションをとり、協力する態度や人権を尊重した多面的・総合的に考える力を養い育てることが、共に生きていこうとする (共生) 姿勢と様々な人権問題を解決しようとする意欲や態度を育てることにつながると思われる。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

- 5月 桑の葉クラブとイモのつるさし (3年27名) 総合…地域の高齢者から学ぶ
浦ノ内地域の獅子舞の願いを知ろう (4年28名) 総合…伝統文化にふれる
世界一大きな授業 (5・6年42名) 総合…非識字の実態から学ぶ
- 6月 保育所のみんなとカレーパーティーをしよう (1年22名) 生活…交流
服のチカラプロジェクトⅠ (5年・19名) 総合…国

- 際貢献できること (計画)
日本・日本人のよさ発見 (6年23名) 総合…TOPIAとの国際交流
- 7月 みんなで獅子舞をつくらう (4年28名) 総合…伝統文化にふれる
夢プロジェクト (6年23名) 総合…世界で活躍している先輩から学ぶ
桑野ふるさとカルタ取り (全校147名) 国語…ふるさと再発見

変容 (TRANSFORMATION)

学校

具体的な実践を通して、これまでの活動とESDの理念との関連を理解できるようになってきている。また、学校だけでなくPTA・地域・各種団体と連携して、教育活動が充実するようになってきている。

教員

生活科・総合的な学習の時間を中心に「育てたい子ども像・育てたい学力等」を明確にし、教科横断的なカリキュラムを再編成し、より効果的な指導ができるようになってきている。地域への思いだけでなく、世界へ目を向け、目の前の子ども

たちに、自分たちの生活で何を考え、どのような行動をとっていくことが必要かを問いかけながら、教職員全員でよりよい教育活動をめざし取り組める集団となってきている。

児童生徒

人権を尊重し多面的・総合的に考えることで、仲間・地域の人たち、世界の人たちと共に生きていこうとする姿勢が見られるようになってきている。特に、仲間意識が高まり、学校生活をよりよいものにしていこうと自主的な取り組みが見られるようになってきている。

学校情報

学校名 阿南市立桑野小学校
児童・生徒数 136名
住所 〒779-1402 徳島県阿南市桑野町岡元40の1

TEL (0884) 26-0200
FAX (0884) 26-1750
E-MAIL kuwanoha@mg.pikara.ne.jp
HP http://e-school.e-tokushima.or.jp/anand/es/kuwano/html/htdocs/?page_id=13

大牟田市立吉野小学校

KEYWORD
 生物多様性 世界遺産や世界遺産や
 地域の文化財等に関する学習 気候変動

みんなが安心みんなが笑顔で暮らすことができる社会を目指して

ホールスクール アプローチ・ デザインシート

ホールスクールアプローチ・デザインシート

教育指導計画にビジョンを明記する。
 児童会で気候変動への取り組みを発

- ESDクラブでダンスを練習し地域の祭りで披露
- 緑化委員会でグリーンロード
アサガオ棚のお世話

- 学校菜園で育てた野菜を給食
- グリーンロードの設置
- アサガオ棚の設置
- 太陽光エネルギーの掲示
- 紙のリサイクル 表裏使用する。
- ビオトープ ○つながろう集会



- 気候変動に関する単元一覧を作成
- 遠足・修学旅行のごみは持ち帰る。
- 運動会や行事で呼びかける。

- 地域まちづくり協議会の方をGTとして授業に招く。
- 公民館で発信する。

ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

みんなが安心して暮らすことのできるよりよい社会を構築していくために、持続可能な社会づくりに関わる課題を自らの問題として捉え、追求することを通して、子どもたち自らが考え行動できるようになるだろうと考えている。そのように主体的にみんなが協働して行動することにより、達成感を味わい多くの子どもたちが笑顔となることができると思う。さらには、持続可能な視点から子どもたちが、懸命に考え行動

することで、周囲の人々を笑顔にできるとも考えた。本校では、そのことを学校全体で取り組んでいきたいと考えたため、学校のビジョンを「安心・笑顔」とした。このビジョンを策定するに当たっては、職員研修において、全職員で目指す子ども像や方策を付箋紙に書き、整理・分類しながら検討した。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

●生活科

- 1年「昔の遊びを楽しもう」では、時間軸として過去と現在をつないだ学びと、空間軸として人と人をつなぐ学びを行った。
- 2年「吉野のすてきをみつけよう」では時間軸として季節の変化と人々の生活をつなぐ学びを行った。

●総合的な学習の時間

- 3年「吉野のまち工夫見つけ隊」では、ひとのつながりや

空間軸として、福祉の視点からまちを見る学びと、時間軸としてもっとよりよいまちとするにはどのようなことができるか考える学びを行った。

- 4年生「生き生きビオトープ大作戦」では、空間軸としてビオトープを児童自身が考え創っていく体験的な学びと、時間軸として持続可能な生き物のよりよい生活の場を考え、行動する学びを行った。
- 5年生「桜プロジェクト」では、桜でつなぐ吉野のよりよ

いまづくりをテーマとして、地域の方とつながりながら、自分たちにできるまちづくりに取り組む協働的な学びを行った。

- 6年生「大牟田の未来をえがこう」では、時間軸として過去、現在、未来をつなぎ、世界遺産と福祉の視点からの大牟田の未来像を考える学びと認知症の方への接し方を体験したり、広報パンフレットを作成したりする主体的・体験的な学びを行った。

●遠足 (児童)

1、2年生は自然豊かな濃施山公園 (みやま市高田町) へ出かけ、自然とふれ合う活動を行った。そのような活動を通して、自然を身近に感じると共に、自然のよさを感じることができた。3、4年生は甘木山 (市内) へ行き、そこで見られる植物や生き物について調べる活動を行った。その際、ネイチャーガイド・オオムタの柿川さんから専門的な視点から活動のサポートをしてもらった。

●学年集会 (つながろう集会)

つながろう集会と称して、朝の活動において月1回程度学年集会を行った。内容としては、気候変動に関する事象を取り上げて子どもたちへ問題提起を行ったり、総合的な学習の時間や生活科の時間において学んだことを発信する活動を行



たりした。

●掲示板による広報・啓発

各階に学年のESDカレンダーと実践の様子を掲示した。子どもたちへのESDの意識付けと同時に、様々な実践がつながっていることが理解できるようにした。つながろう集会で取り組んだことについて掲示板を活用して、掲示することで、日常的に気候変動へ関心を持てるようにした。また、掲示することで他学年や来校者へも啓発できるようにした。

変容 (TRANSFORMATION)

学校

学校の校務分掌にユネスコスクール担当を位置づけたことで、組織的に気候変動に関する内容に取り組むことができた。本校の取組の特色である地域とのかかわりが表れたカリキュラムとなった。そのことで、地域の方が学校へ来られる回数が多くなった。ESDの中でも、気候変動に関する視覚的 (写真・絵・地図等) な掲示物が増えた。

教員

全職員で気候変動に関する取組として何ができるか検討して実践したため、節電・節水、リサイクル等の意識が高まり、子どもたちへの指導の仕方が変わった。例えば「電気を消し

ましょう」→「シロクマさんのためにも電気はこまめに消しましょう」等、声のかけ方。時事ネタとして気候変動に関する内容をタイムリーに取り上げようとしていた。

児童生徒

代表委員会における議題の中で「気候変動」に関する内容が出てき、自分たちにできることを実行しようという意識が高まった。テレビ等で気候変動に関する事を見聞きした児童が、つながろう集会後や学校生活の中で、教師へ話しかけに来る機会が見られるようになった。

学校情報

学校名 大牟田市立吉野小学校
 児童・生徒数 420名
 住所 〒837-0912 福岡県大牟田市大字白銀967番地17

TEL (0944) 58-1037
 FAX (0944) 58-7990
 E-MAIL yoshihiro-402@st.city.omuta.fukuoka.jp
 HP http://www.e-net21.city.omuta.fukuoka.jp/yoshino-es/

石巻市立牡鹿中学校

地域貢献活動「笑顔創造プロジェクト (ESP)」

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



各学校の児童生徒が合唱や踊り、合奏等を発表した。本校は全校生徒で「全校合唱」と「侍ソーラン」を披露し、小学生や地域住民に笑顔と元気を与えた。

(3) 鯨について学ぶ教室

地域の捕鯨会社である(株)鮎川捕鯨の伊藤社長と外房捕鯨(株)鮎川事業所の大壁所長、そして東京海洋大学で鯨について研究している助教の中村先生の3名を講師に招いて、「鯨について学ぶ教室」を開催した。全校生徒37名と保護者が

鯨の生態や捕鯨の歴史などについて学んだ。

(4) 鯨肉の缶詰のラベルデザイン作成

外房捕鯨(株)鮎川事業所と連携し、本校の生徒が鯨肉の缶詰のラベル図案を考え、商品化し、販売する取組を進めている。今後、ラベルができれば、缶詰にラベルを貼る作業やそのラベルが貼られた鯨肉の缶詰の販売体験を実施する予定である。

変容 (TRANSFORMATION)

学校

サステナブルスクール研修会やユネスコスクール全国大会、ユネスコスクールリーダーシップ研修などへ教職員を積極的に参加させた。また、職員会議や校内研修会でESDについての研修を行なった。職員室前にサステナブルスクールのコーナーをつくり、サステナブルスクールの活動やESDについての情報を生徒へ発信した。そして、学校便りやホームページでもサステナブルスクールとしての活動を積極的に地域に発信した。

教員

ユネスコスクール関係の研修会へ教職員が積極的に参加し、全国のサステナブルスクールの教職員との交流を通して、他校のESDの活動について知ることができた。また、校内で

ESD研修会を行ったことで、教職員のESDについての理解が深まった。そして、ホールスクールアプローチ・デザインシートを作成したことで学校としてのビジョンや活動の方針が明確になり、教職員が積極的に活動に取り組むようになった。

児童生徒

地域貢献活動「笑顔創造プロジェクト」を生徒会が企画し、全校生徒で地域を巡り、地区内の公園や網地島白浜海水浴場の清掃活動に取り組んだことで、身の回りの環境美化に努め、牡鹿の自然を大切にしていこうとする意識の高まりが見られた。また、地域での職場体験学習を実施したことで、地場産業に興味を持ち、将来の職業について考えることができた。様々な形態の避難訓練を体験し、生徒は防災への意識を高めた。

ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

本校は宮城県の牡鹿半島の先端に位置する。地域は天然の良港に恵まれ、養殖及び栽培漁業が盛んであり、鯨の捕鯨基地として繁栄してきた。しかし、商業捕鯨の禁止や遠洋漁業の衰退などにより人口が減少し、平成22年4月に牡鹿半島の3中学校が統合し、現在の牡鹿中学校が開校した。開校1年目の平成23年3月11日、東日本大震災の津波発生により本校学区の全域が被災し、人口流出や水産業の衰退など深刻な影響があった。現在は、海岸部のかさ上げや住宅地の高台移転が進み、基盤産業である水産業の再開など、地域の復興・再生に歩みを進めているところである。

このような環境にある本校では、持続可能な社会づくりを育む教育活動を推進するための重点指導事項を
 (1) 自ら学ぶ意欲を育む学習活動の構築
 (2) 地域の文化・伝統の継承活動及び防災教育の充実
 (3) 自ら進路を開拓する自己表現力
 の3点におき、教育活動を推進している。
 そして、この教育活動を展開し、学校教育目標である「豊かな心、健康な体、自ら学ぶ意欲をもち、たくましく未来を創る生徒の育成」の具現化を図るため、学校のビジョンを「たくましく未来を創る生徒」と策定した。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

みんなでスマイルプロジェクト

(1) 鯨まつり

牡鹿地区の伝統的な祭りである「鯨まつり」へ全校生徒で参加し、会場周辺の清掃活動と牡鹿中学校伝統芸能「侍ソーラン」の披露を行い、地域の復興や活性化に取り組もうとする

心情を育てた。
(2) 近隣の小学校 (ユネスコスクール) との合同発表会
 ユネスコスクールである石巻市立鮎川小学校や近隣の小学校3校と合同で、牡鹿中学校区の小・中学生の交流会(行事名「クリスマスドリーム」)を牡鹿中学校体育館にて開催した。

学校情報

学校名 石巻市立牡鹿中学校
 児童・生徒数 47名
 住所 〒986-2523
 宮城県石巻市鮎川浜鬼形山1-24

TEL (0225) 45-3117
 FAX (0225) 45-3603
 E-MAIL jhsoshi@city.ishinomaki.lg.jp
 HP http://www.mediaship.ne.jp/~jhsoshi/info.html

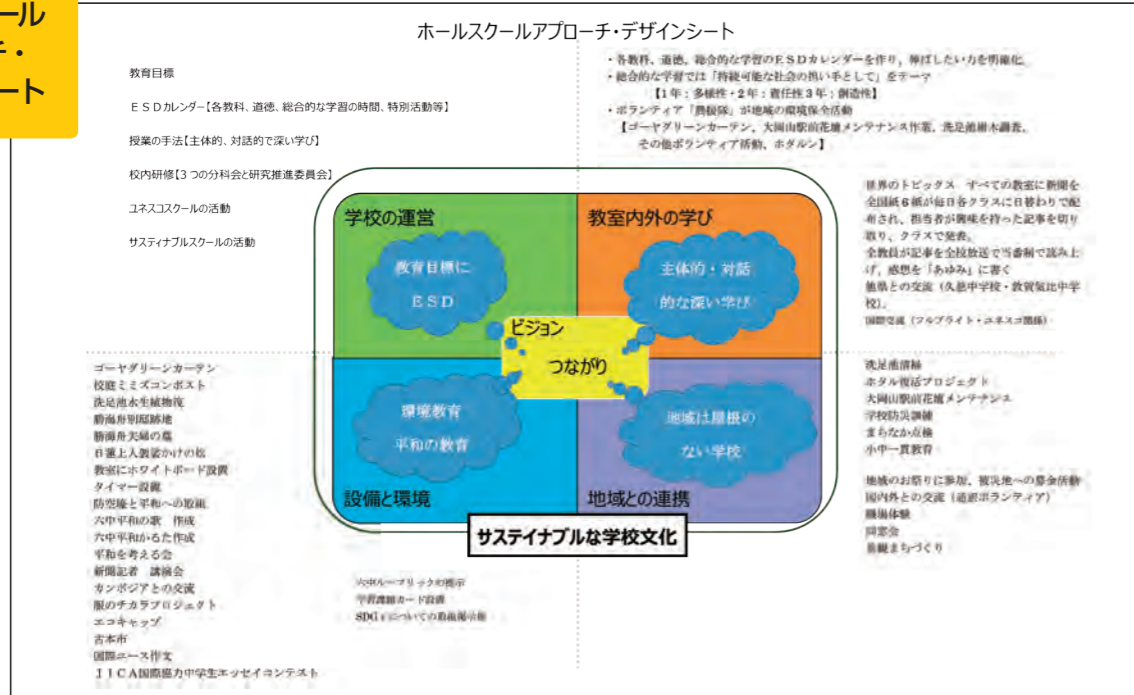
大田区立大森第六中学校

「地域は屋根のない学校」から始まったESD推進及び授業改善

KEYWORD

防災学習 生物多様性
環境学習 国際理解学習

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



変容 (TRANSFORMATION)

学校

SDGsについての意識が高まった。授業の質が高まった。生徒の学力が高くなった。

教員

六中カフェを使って、意見交換や授業招待状の掲示が増え、お互いの授業を見合い、「問い」についての追及が深まっている。

児童生徒

ボランティア活動に対する意識は高く、もとよりその必要性を感じている。加えて、学びに対する意欲がさらに高まっている。

ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

環境教育、防災教育、国際理解教育、平和教育、など、地球規模で起こる問題をESDを通して、解決する資質と態度を育み、未来を担う生徒に育てる。

ホールスクールアプローチで、様々な経験と関連させ、自己

評価による自己変容を図る。

ESDカレンダーを作成することにより、カリキュラムマネジメントに取り組む。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

学校の運営

教室内外の学び

設備と環境

地域との連携

国内外の学校や地域の機関、大学、NPOなどと交流し、多くの学びを取り入れる。

教室には育てたい力と態度をルーブリック化し、自己評価することで、自己変容を図っている。

各教室に環境NAVIを設置し、教室環境に個々で留意する態度を養う。

常に話し合うことができるように、教室に10枚ずつホワイ

トボードを設置し、共同作業ができるようにしている。

国内外からのお客様が増え、本校の活動を発信すること、生徒も含めて抵抗がなくなっている。多くの期待があることを感じる。

今年度は、エネルギー教育モデル校、ボランティアスピリッツ賞、環境大臣賞、低炭素杯ファイナリストに選ばれ、多くの評価を受けることができた。

学校情報

学校名 大田区立大森第六中学校
児童・生徒数 383名
住所 〒145-0063
東京都大田区南千束 1-33-1

TEL (03) 3726-7155
FAX (03) 3726-7157
E-MAIL om6-j03@educet01.plala.or.jp
HP http://academic3.plala.or.jp/om6j/

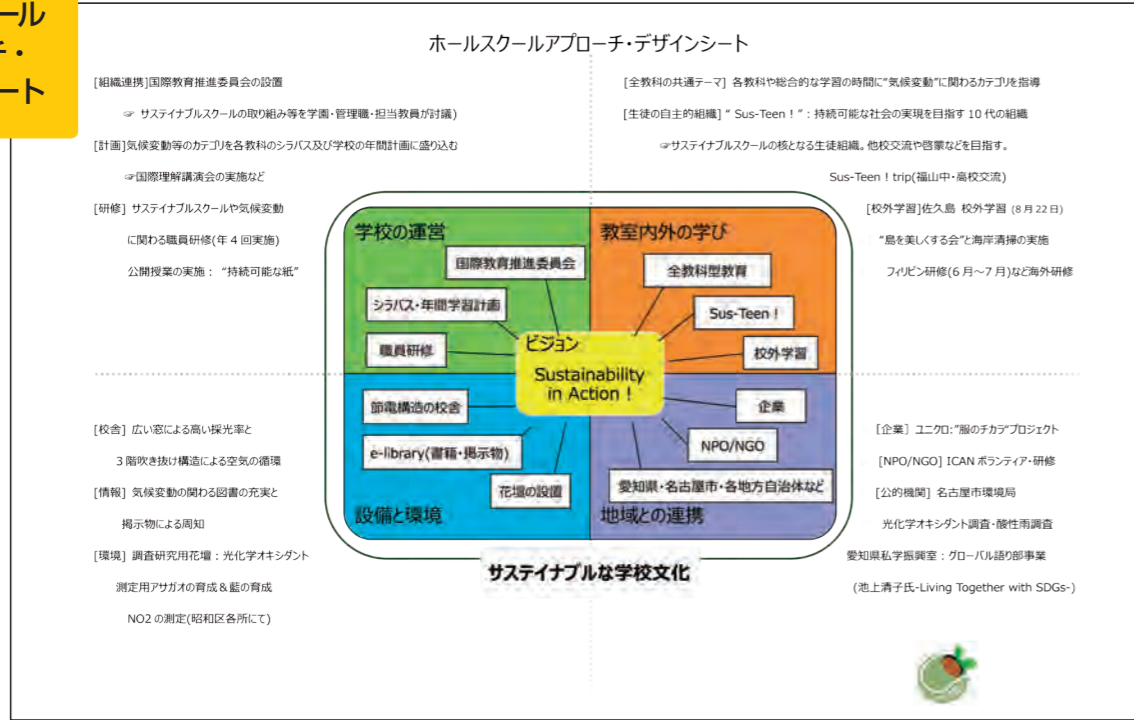
KEYWORD

国際理解学習 気候変動
環境学習 防災学習

名古屋国際中学校・高等学校

世界と日本の未来を担う国際人になるために

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ブ (中学1年1名・中学2年1名): 横浜、豪・ジロング市との湿地提携に基づく人的交流事業 (中学2年1名): オーストラリア、2017 JCI JAPAN 少年少女国連大使 (中学2

年1名): ニューヨーク、第9回環境教育ポスターコンクール 学校賞、昭和シェル石油 環境フォト・コンテスト 佳作 (中学1年)・学校賞

変容 (TRANSFORMATION)

学校

生徒や教員の積極的な取り組みに関して、学校教育活動の啓蒙の要素としてよい位置づけとなっている。本校が目指すグローバルリーダー像とリンクしているため、サステイナブルスクールの取り組みは、変容でなく発展というイメージになっている。ただ、ホールスクール度は、まだまだ低いと思われるので、今後は統一感を重視して改善していく。

教員

本校の取り組みに関わる教員に関しては、指導法に対する探究性が大きく改善され、研修や資格取得、生徒との関わりにおいてかなりの成果があったと感じる。その反面、関わりが薄い教員に関して、変容は見られない。今後取り組みにおいて

自分がどの位置にいて、どのような生徒を育成し、どのようなゴールがあるのかを明確に理解できるように改善していきたい。

児童生徒

取り組みに対して関わりがあった生徒は、“自主性” “積極性” “学習に対するプラスイメージ” がかなりの割合で伸びている。関わりが薄い生徒は、それに比例して伸びていない。通常授業の知識を基盤にして、サステイナブルスクールの活動がその応用になっている。その応用が伸びると基礎学力への積極性が増すというプラスのスパイラルが起きている。

ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

生徒の基礎学力の定着の次に、自主的により深く学びたい・知りたいという環境づくりを目指している。全体では、総合的な学習の時間の活用や深く学びたいという生徒に対する組織の創立を行うことによるピラミッド型の学習体系を考えて

いる。また、学校づくりにおいても、教職員・保護者・地域の関係性をより良くするつながりを形成していきたい。特に、教職員に関する意識改革は急務であり、困難な事例も多くある。そのためにも共通のゴールを設定していきたい。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

- Sus-Teen! の創立：生徒全員がやる気があるわけではない現状、その中からより自主性と積極性を持った生徒を選定し、より柔軟により深く学習ができる環境を作る必要があった。Sus-Teen! はそうしたメンバーで構成され、活動も予想を超えた発想とアイデアが生まれた。福山中学校 (8月3日生徒9名) との交流や環境局 (9月～25名) との合同調査 (酸性雨・光化学オキシダント・窒素酸化物の大気環境調査：名古屋市環境局) などがそれにあたる。
- 訪問学習：「あかりの進化と光るしくみ (Panasonic): 中学

- 2年98名」「宇宙一日出前授業 (JAXA): 中学3年87名」「名古屋市における酸性雨問題 (名古屋市環境科学調査センター): 中学3年87名」「届けよう、服のチカラ プロジェクト (ユニクロ): Sus-Teen!25名」
- グローバル語り部事業：国連で活躍された池上清子氏など世界で活躍する方々をお招きして、活動内容や若者への助言などを行った。(11月30日生徒30名)
- コンクールや各種大会等参加：愛知県ユネスコスクール交流会 (中学2年4名): 東海市、SDGs こどもワークショップ

学校情報

学校名 名古屋国際中学校・高等学校
児童・生徒数 815名
住所 〒466-0841
愛知県名古屋市昭和区広路本町1-16

TEL (052) 858-2200
FAX (052) 853-5155
E-MAIL senior@nihs.ed.jp
HP http://www.nihs.ed.jp

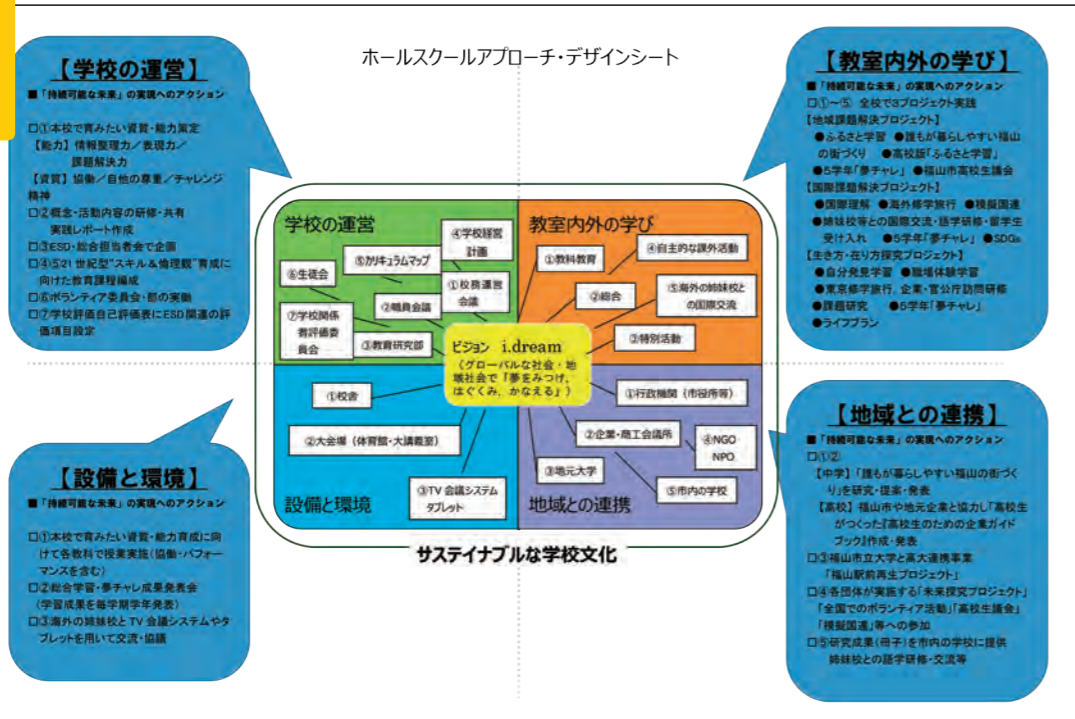
KEYWORD

国際理解学習 その他（地域課題解決学習・生き方在り方探究）

福山市立福山中・高等学校

グローバルな社会・地域社会で「夢を見つけ、はぐくみ、かなえる」

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

(1) 「グローバルな社会・地域社会」について

①本校が設定している3つの「ミッション」の一部には、以下のように「地域社会をリードする人材の育成」と「グローバルな社会で活躍する人材の育成」があり、その両者を「グローバルな社会・地域社会」という言葉で表現した。（本校ミッション）

- 生徒一人一人の夢を実現する公立中高一貫教育を推進し、地域社会をリードする人材を育てる。

●さまざまな国際交流・国際体験を通して、グローバルな社会で活躍する人材を育てる。

②福山市の取組に「グローバル人材の育成」があり、それを表現している。

(2) 「夢を見つけ、はぐくみ、かなえる」について

本校の中学校を平成16年に開校した際に設定したキャッチフレーズが「夢を見つけ、はぐくみ、かなえる」であり、ESDの取組を通してこれを実現しようと表現した。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)



本校での「持続可能な未来」の実現へのアクションは、以下の通りに行った。

- ①教科教育
- ②総合的な学習の時間
- ③特別活動
- ④自主的な課外活動

⑤海外の姉妹校との国際交流

①～⑤をまとめて、本校では全校体制で以下の3プロジェクトを実践した。

(1) 地域課題解決プロジェクト

- 1学年「ふるさと学習」（地元福山について歴史や資源等について理解を深める）

- 1学年「誰もが暮らしやすい福山の街づくり」（出身地域の長所と課題を冊子化する）
- 4学年「グローバル人材育成事業」（福山市の企業を研究し、冊子にして配布する）
- 5学年「夢チャレ」（各自が夢の実現に資する活動に挑戦し、学びをまとめ発表する）
- 5学年「福山駅前再生プロジェクト」（大学生と協働してまちづくりを提案する）

(2) 国際課題解決プロジェクト

- 3学年、5学年「国際理解」（各自がテーマを設定し、調査結果を発表する）
- 5学年「海外修学旅行」（マレーシアの高校生と地球環境をディスカッションする）
- 有志「模擬国連」出場（調査を行い国連会議に出席する、5年で3度の全国大会）
- 姉妹校等との国際交流・語学研修・留学生受け入れ（韓国、オーストラリア、マウイ）
- 5学年「夢チャレ」（各自が夢の実現に資する活動に挑戦し、学びをまとめ発表する）

(3) 生き方・在り方探究プロジェクト

- 1学年「自分発見学習」（小学校の活動（賞状、認定書等）



から魅力を発見する)

- 2学年「職場体験学習」（マナー学習を行ったうえで5日間体験を行う）
- 3学年「東京修学旅行、企業・官公庁訪問研修」（研修テーマを設け生徒が運営する）
- 4学年「ライフプラン」（講演会やインタビューを通して夢や目標を設定する）
- 5学年「夢チャレ」（各自が夢の実現に資する活動に挑戦し、学びをまとめ発表する）
- 6学年「課題研究」（進路に関連した課題を設定し調査研究を行い発表する）
(高校2年・有志23名、5～11月、課外活動)

変容 (TRANSFORMATION)

学校

本校は、併設型中高一貫校として14年目になり、開校時に設定した数値目標をほぼ達成できた。

広島県は「学びの変革」アクション・プランを、福山市は「福山100NEN教育」を示し、これらに則り本校は、「ESD重点校形成事業」サステナブルスクールの取組を始めたことにより、これまで実践してきた教育内容を整理・構造化し、「次代に求められる資質・能力」を育む教育内容を創造（研究・実践）することができている。

教員

サステナブルスクールに認定後、次第にESDの考えが浸透している。各教員は校内研修等を通じて、これまでの取組の多くがESDの方向性にあったことを認識し、活動結果をESDレポートにまとめることで思考を深めることができた。

11月には公開研究会で石丸哲史先生の講演を拝聴できたことにより、「ESDは今後の教育の方向性であり、今後は各教科の中で実施する必要性を感じ」、これらの成果を次年度の研究の方向性に生かす予定である。

児童生徒

学校長の講話（教育の方向性やESDの取組）や、生徒の主体性を重視した学年の取組を通して、生徒は、福山市高校生議会に参加するなど、ESDを意識した主体的な活動をし始めている。ただし、本校設定のルーブリック評価によると、4月から10月の「資質・能力」の学校平均上昇率は約75%であり、「ESD3大プロジェクト」では51%であった。このことから、今後は教員・生徒とルーブリック内容や意義をさらに共有し実践していく必要がある。

学校情報

学校名 福山市立福山中・高等学校
 児童・生徒数 929名
 住所 〒720-0843 広島県福山市赤坂町赤坂910

TEL (084) 951-5978
 FAX (084) 951-6518
 E-MAIL kou-ichifuku@edu.city.fukuyama.hiroshima.jp
 HP http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/kou-ichifuku/

KEYWORD

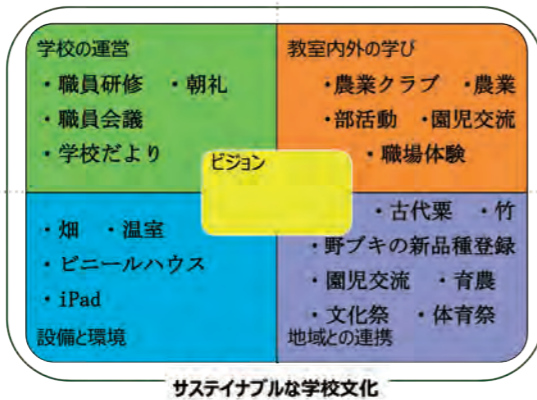
防災学習 生物多様性 気候変動 エネルギー学習
環境学習 国際理解学習 世界遺産や地域の
文化財等に関する学習 その他

静岡県立下田高等学校南伊豆分校

地域社会の将来を担う人材育成へ 今分校ができること

ホールスクール
アプローチ・
デザインシート

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

デザインシートのビジョン設定は各学校におけるESD活動の核に成る。そのため、ESD活動を認識し教員間のESDに対する認識が広まりつつある現在、その核を少数で確定することを避けたいと考えている。その為、現在は白紙にした。サステナブルスクールに認定いただき今までの地域への活動を見直すことができた1年目。その1年目を踏まえて教員間へ認識が広まり始めた2年目。私自身、ESDの研修を踏まえて教員生活を送る中でESDの大きさや教員へもたらす化学反応のようなもの、さらにそこからの教育活動というものを体感した。だからこそ、南伊豆分校のESD活動の

核に成るビジョン設定を、少数で一言で集約することを今現在避けたいと思う。2年間を通じてESDの土台が南伊豆分校にできたと思う。それを元に3年目にESDを基にした教育活動を展開した中で感じたものを多くの先生方で話し合い、ビジョンを設定することでよりよい南伊豆分校におけるESDのビジョンが固まっていくように思う。2年ほどで入れ替わる管理職とそれより長いスパンで分校に係わる現場レベルの教員と、どのようにESD活動を学校現場で展開できるのか、3年目に挑戦したい。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

地域の農家・農協・認定こども園・竹の子村と、幅広く連携を強化することができたが、教育機関（小学校・中学校）と

の連携も来年度以降、さらに強化していきたい。



変容 (TRANSFORMATION)

学校

地域の課題解決や、地域を担う人材の育成を教育目標に掲げている南伊豆分校であるが、より具体的にそれらに向けた取り組みを教員1人1人ができるようになったと感じる。もう少しESDに関する研修へ多くの教員が参加できるようになれば、ホールスクールで取り組む意義を共有できるのではないかと感じている。また、教員の垣根を飛び越えていけるネットワークの軽さなど、学校の変容に至るまでの取り組みを強化していきたい。

教員

SDGsを意識することで、今までの授業展開や地域との係わり合いを世界共通の目的・課題解決に向かって見つめなおして活動の意義を見つけ出すことができ、今までの授業や活動

に教員が自信を持つことができた。さらにまた、それらの為に子どもをどの様に育てるか・意識付けていくのか、新たな課題を見つけ出し、生徒を「観る力」が強くなった。

児童生徒

いままでの地域課題解決の為のプロジェクト活動から、ESDという見方をつけることにより生徒の理解度が深まったように感じる。生徒の主體的・対話的で深い学びが求められる昨今において、このESDという軸が1本入ることにより各学年や各教科で学んでいることを生徒が理解し認識を深めているようであった。また、そこから学びへの自信が芽生えたように見受けられた。

学校情報

学校名 静岡県立下田高等学校南伊豆分校
児童・生徒数 117名
住所 〒415-153
静岡県賀茂郡南伊豆町石井58番地

TEL (0558) 62-0103
FAX (0558) 62-2799
E-MAIL minamiizu-b@edu.pref.shizuoka.jp
HP <http://www.edu.pref.shizuoka.jp/minamiizu-b/home.nsf>

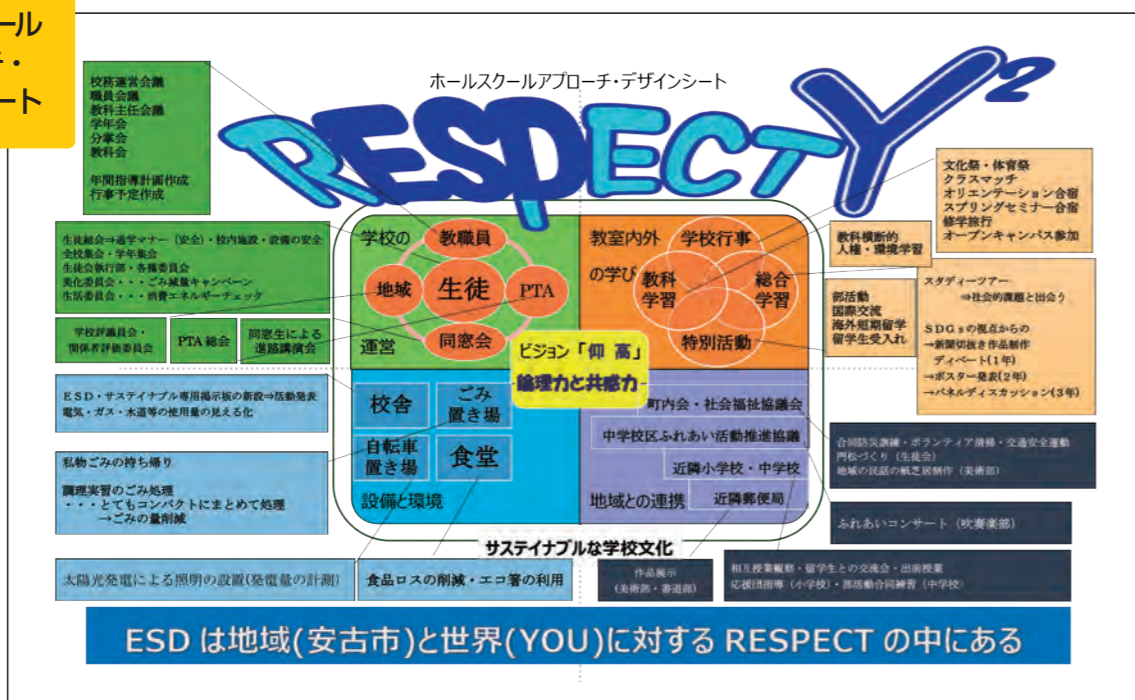
広島県立安古市高等学校

「頑張ることがかっこいい」を合言葉に、さらなる高みをめざす

KEYWORD

気候変動 エネルギー学習
環境学習 国際理解学習 その他

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

本校の校訓「仰高」（心豊かな人生の創造をめざし高遠の理想を仰ぐ）の精神のもと、広島を愛し、グローバル社会に貢献できるリーダーを育成することを本校の使命としている。そのため、この事業を通して2つの力、すなわち、友人、地域や世界の人とつながるために不可欠な言語や理論で表される「論理力」と、相手の考えや思いを理解し気遣う「共感力」

の両方を育成していくことを目指している。その「論理力と共感力の育成」という視点から、総合的な学習の時間の取組・ボランティア活動・部活動・学校行事を整理し、本校の教育活動全体を1つのカリキュラムとしてつなげることを目指して策定した。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

総合的な学習の時間「仰高ゼミ」内での取組

●1年生は討論・発表（ディベート）を地域に公開して実践した。ディベートにおいては、大学の先生から指導をいただき、ディベートの手法を学ぶとともに実際にクラス内だけでなく他のクラスの生徒とも対戦できるように工夫し、論題も複数用意した。そのことにより、生徒自身が相手に伝えるときに何が必要であるかを知るとともに、相手の意見を傾聴することにより相手を説得できる機会となった。

さらに、自分の考えと対峙する考えに身を置き、その根拠までさかのぼりながらその主張を支える価値基準を考察していくことで、感情的な共感とは異なる他者理解や異文化理解とは何かを認識し、共感の幅を広げた。

●2年生は中間発表（ポスターセッション）を公開して実施した。ポスターセッションについての手法を理解し、リハールも含めて自分の課題研究の中間報告を行なった。ここで初めて、校内だけでなく、地域の方や保護者の方にも来

ていただき、初めて出会う人に自分の考えていること、調べたことを丁寧に伝え、質疑応答ができる場とした。

地域との合同防災訓練

地域の防災訓練に参加し、救急搬送訓練、初期消火訓練、救出訓練を行なうことで、災害に対する地域の準備状況を理解し、防災意識が向上した。

紙芝居の制作

地域のサークルからの依頼を受け、美術部員が地域に伝わる民話を紙芝居化した。今後も毎年1話ずつ制作する予定である。地域の一員であるという自覚が生まれ、次の世代へと繋げていこうとする意識が高まった。

地域のふれあいコンサート

吹奏楽部が今年度も地域のコンサートに参加した。地域の人とのふれあいを深め、ボランティア精神を高揚させた。



変容 (TRANSFORMATION)

学校

生徒に身につけさせたいコンピテンシーを以下のように設定し、学校教育の諸活動の見直しをすすめている。

【生徒に育みたい価値観・態度】

- 1 仰高スピリット：集団としての質を高める目標を設定し、困難に耐え、積極的に目標達成にむけて努力を継続している。
- 2 グローバル・シチズンシップ：国内外の多様な考え方に配慮しつつ、有為な社会の形成者として自覚的に行動している。
- 3 ESDの視点：持続可能な開発に関する諸課題の解決に向け、具体的・継続的に考え、実践している。

【その他のコンピテンシー】

- 1 課題発見・設定能力
 - 2 論理的思考力
 - 3 批判的思考力
 - 4 他者との協働力
 - 5 独創的な課題解決・提案力
 - 6 的確かつ効果的な表現力
 - 7 洞察力・考察力・省察力
- また、今年度は、各教科・特別活動等を横断して、「他者との協働力」「知識・技能の活用力」を重点的に育成していくことを確認し取り組んだ。教員はもちろんであるが、生徒にもそのことを伝え、重点化したコンピテンシーを学校全体で常に意識して学ぶことができるようになった。

教員

教員は教科指導で「主体的・対話的な学び」、総合的な学習で「パフォーマンス課題による協働的な学び」、特別活動で「自主性・自律性を育む学び」を推進するという意識を高めている。学びのプロセスを重視し、すべての領域においてさらなる高みを目指して努力を継続する生徒の育成のために工夫を重ねている。「何を教えるか」という視点から、「生徒が何をどのように学ぶか」という視点が持てるようになっている。

児童生徒

探究活動を通して、現代社会の人権等に関する諸課題について理解を深めるとともに、異なった意見をもつ人と議論する力を身に付け、倫理的な見方をもとにしながら理性的で建設的な解決案を提案し表現する力が伸びてきた。自分一人で考えていたことを、協働的に学ぶことを通して、今まで考えてもみなかった視点に気づかされるなど、自分自身の考えを広げ深めるとともに、協働的な活動を通して、達成感や充実感も感じられるようになった。

学校情報

学校名 広島県立安古市高等学校
児童・生徒数 956名
住所 〒731-0152
広島県広島市安佐南区
毘沙門台三丁目3番1号

TEL (082) 879-4511
FAX (082) 879-4512
E-MAIL yasufuruichi-h@hiroshima-c.ed.jp
HP www.yasufuruichi-h.hiroshima-c.ed.jp

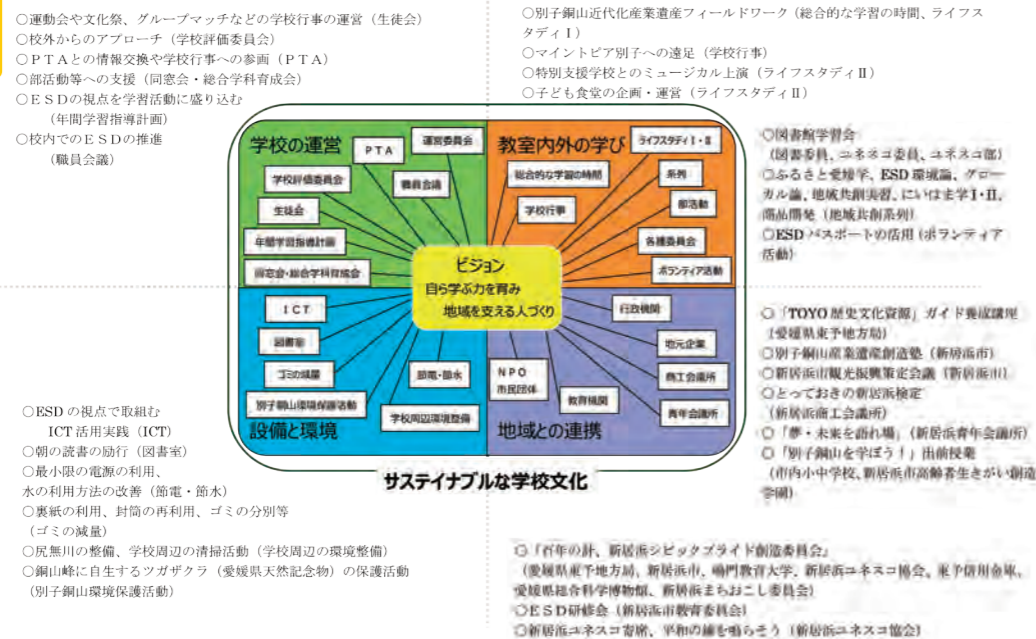
愛媛県立新居浜南高等学校

マインからマインドへ

KEYWORD
環境学習、国際理解学習、
世界遺産や地域の文化財等に
関する学習

ホールスクール アプローチ・ デザインシート

ホールスクールアプローチ・デザインシート



- 名) 10月
- 旧広瀬邸企画展
[新居浜市市広瀬歴史記念館主催] (市内外一般約 170 名、本校生 14 名) 11 月
- 近代化産業遺産イベント
[愛媛県総合科学博物館主催] (市内外一般 50 名、本校生 7 名) 11 月
- 高校生といっしょに別子銅山を探検しよう!
[角野小学校・角野公民館・本校主催] (5 年生児童 100 名、本校生 20 名) 12 月
- ESD フェスタ
[新居浜市教育委員会] (市内小中高校の児童・生徒・教職

- 員約 250 名) 12 月
- 惣開小学校とのサステナブルスクール連携事業 (小学生 11 名、本校生 7 名) 1 月
- 平成 29 年度「えひめスーパーハイスクールコンソーシアム」
[愛媛県教育委員会] (県内中等教育学校・高校生・教員・地域住民 1,200 名) 2 月
- 東予東部圏域振興イベント開催記念・県民シンポジウム
(産業観光ワークショップ in えひめ東予東部)
[愛媛県東予地方局主催] (地域住民 200 名、本校生 4 名) 2 月

ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

四国屈指の工業都市である新居浜の基礎作りに大きく貢献した別子銅山。先人たちの偉業や体験者の記憶の次承、残された近代化産業遺産の意義を後世に継承し、地域の活性化に活かしていくために、地域・企業・行政・学校などと連携・協働する。

また、それらの活動の中で、シビックプライド (地域への誇りや愛着をもつ心情) を高め、未来の地域人としての育成を図るとともに、ESD を持続発展可能な地域づくりの学び『学びの絆づくり』と位置づけて、その循環サイクルを構築したい。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)



- ESD 中高連携事業「ふるさと学習」出前授業 [各中学校・本校主催]
(東・北・泉川・船木・角野・中萩・川東中学校 1 年生計 656 名、3 年生 98 名、本校生のべ 35 名) 4 ~ 10 月
- 地域イベントでの PR 活動 [正起ガス主催] (地域住民約 80 名、本校生 8 名) 5 月
- 県立学校新規採用教員地域研修・別子銅山案内 (高校教員 7 名、本校生 2 名) 8 月
- ESD 講演会 [新居浜市教育委員会主催] (市小中学校教職員 560 名、本校生 7 名) 8 月
- 高齢者社会を賢く生きる [市高齢者生きがい創造センター主催]
(地域住民約 70 名、本校生 14 名) 8 月
- 惣開親月会 [惣開小学校・惣開公民館主催] (地域住民約 1,000 名、本校生 7 名) 9 月
- 夏井いつき俳句イベント
[新居浜市観光協会主催] (市内外一般約 100 名、本校生 7

変容 (TRANSFORMATION)

学校

学校と地域との連携の裾野が広がるとともに、その内容も一段と深まりを増すことができた。ESD に関する意識も少しずつ高められてきた。

教員

学校と地域が連携することで、生徒たちがビジョンに向かって変容していく姿を目の当たりにし、教員のモチベーション

が上がり、実践への意識の高まりが見られた。

児童生徒

地域に対する関心が高まるとともに、視野が広がり、シビックプライドが醸成された。そのことで、ボランティア活動をはじめとする地域の様々なイベントへの積極的参加につながり、キャリア教育の充実も図ることができた。

学校情報

学校名 愛媛県立新居浜南高等学校
児童・生徒数 353 名
住所 〒792-836
新居浜市篠場町 1 番 32 号

TEL (0897) 43-6191
FAX (0897) 44-7447
E-MAIL niish-ad@esnet.ed.jp
HP <http://niihamaminami-h.esnet.ed.jp/>

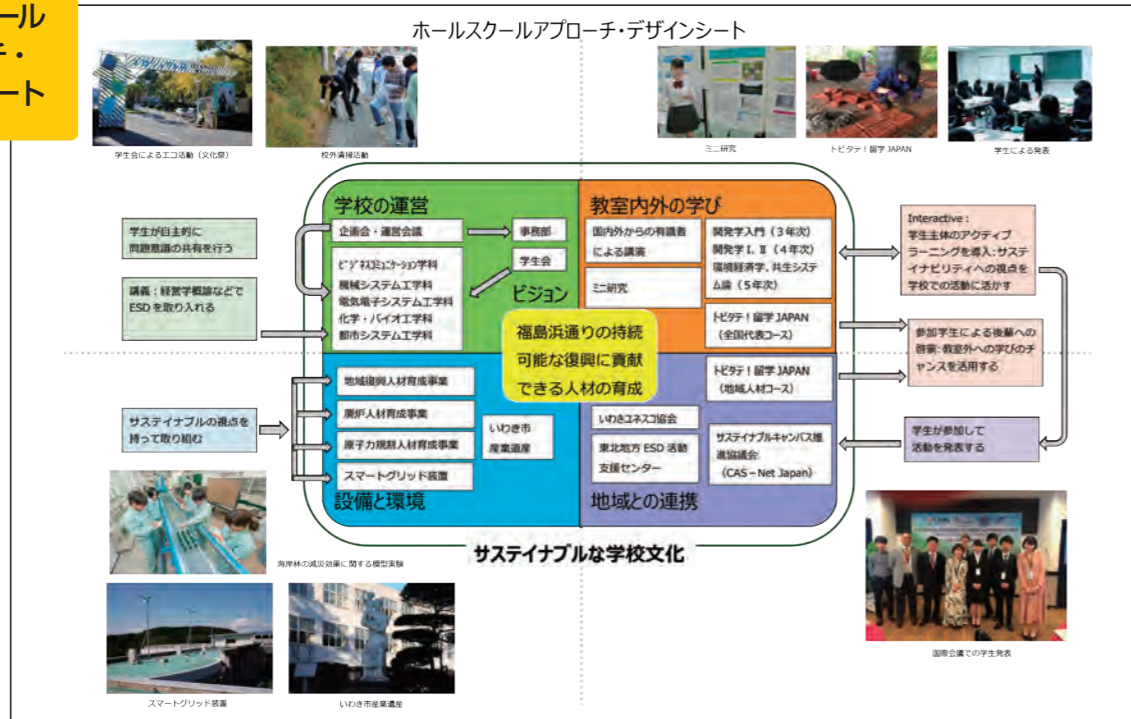
独立行政法人国立高等専門学校機構 福島工業高等専門学校

いわきから世界に活躍するイノベーション人材を育てる

KEYWORD

防災学習 エネルギー学習
環境学習 国際理解学習

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



変容 (TRANSFORMATION)

学校

本事業に取り組むことにより、ESD 活動支援センター等の関係機関や、キリバス共和国名誉領事を始めとする有識者とのつながりが生まれ、活動を展開する環境が広がりつつあると感じている。こうしたつながりが、ビジョンに掲げる人材育成やグローバル化に向けた取組に展開できる資産になると考えている。サステナブルスクールの使命の一つである地域への展開といった活動も本事業にかかわる中で必要性を感じており、今後検討することとしている。

教員

当該プロジェクトを運営する教職員においては、積極的に勉強会やセミナーなどに参加し、サステナブルスクールの基礎を学んだ。今後、ホールスクールアプローチで活動を拡大し、より多くの教員の変容を図る。

児童生徒

今年度の発表会及び講演会を経て、学生は様々な面から刺激を受けることができた。海外に短期留学した友人の話や聞き、海外留学への決意を新たにしたりした者。温暖化の影響に苦しむ島嶼国の話を聞き、自分たちの生活が全く知らない国に影響することを知り、地球という中でつながりを感じる者など、学生の中での気づきを与えることができた。また、自分たちの生活一つ一つが持続可能な社会づくりにつながっていることを知り、自らの生活を振り返って考えることができた。事業終了後には、留学して現地を見たい、ESD を伝えるところから始めたい、SDGs に向けて活動する場所を作っていきたい、という声が聞かれ、今後のそれぞれの学生の活動に対するきっかけを作ることができたと考えている。

ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

福島県浜通り唯一の国立工学系高等教育機関である本校は、これまで地元企業の第一線で活躍する実践的技術者を輩出してきており、常に時代の変化や社会の要請に対応できる人材の育成を行ってきた。そして東日本大震災以降は、震災からの地域復興や、福島県が復興の柱として掲げる再生可能エネルギーの推進等に貢献できる人材を養成すべく、「モノづくりと環境保全の調和に配慮し、持続可能な社会の発展に貢献

できるエンジニア」「長期的な視野をもち、持続可能な社会の実現に貢献するビジネス・スペシャリスト」をそれぞれ工学系及びビジネス系学科の養成する人材像の一つに掲げ、教育を行っている。このサステナブルスクール事業を通じて、これからの社会づくりを担う学生たちに、学内外での様々な学びを経験し、持続可能な社会の実現を意識の根底に備えた人材として育ててほしいと考えている。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

ビジネスコミュニケーション学科1年生42名、2年生40名を対象に、有識者等による講演会、トビタテ!留学 JAPAN 留学生による発表会を開催した。
1 回目「トビタテ!留学 JAPAN 日本代表プログラム参加学生等による発表会」
(平成 29 年 11 月 1 日 (水))
2 回目「キリバス共和国名誉領事ケンタロ・オノ氏による講

演会」
(平成 29 年 12 月 1 日 (金))
3 回目「マレーシア サバ大学ハサナル教授による講演会」
(平成 29 年 12 月 15 日 (金))
4 回目「東北地方 ESD 活動支援センター ESD コーディネーター海藤節生氏による講演会」
(平成 30 年 1 月 19 日 (金))

学校情報

学校名	独立行政法人国立高等専門学校機構 福島工業高等専門学校	TEL	(0246) 46-0705
学生数	1,102 名 (平成 28 年 4 月 1 日現在)	FAX	(0246) 46-0713
住所	〒970-8034 福島県いわき市平上荒川字長尾 30	E-MAIL	soumu@fukushima-nct.ac.jp
		HP	http://www.fukushima-nct.ac.jp/

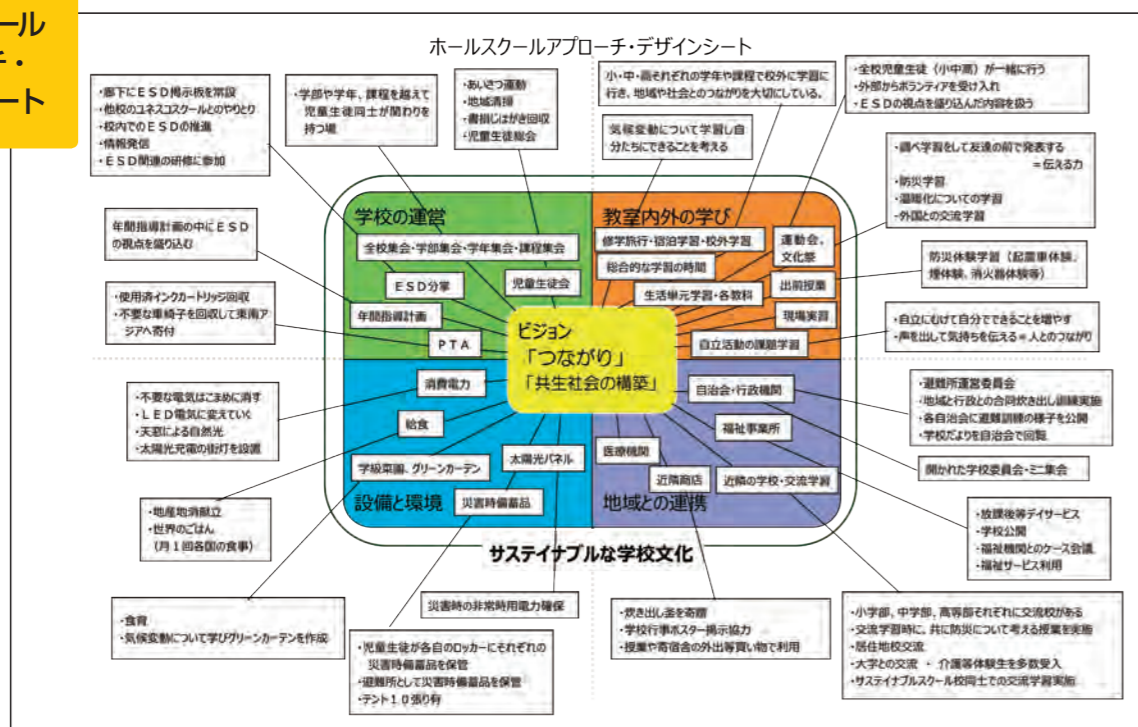
KEYWORD

国際理解学習 防災学習
生物多様性 その他

千葉県立桜が丘特別支援学校

「つながろう」桜が丘から地域へ 世界へ そして 未来へと

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

本校は肢体不自由児が通う特別支援学校であり、障害をもち、自分から関わる力や発信する力が弱いという一面をもっている児童生徒が多い。ユネスコスクールに加盟し、様々な学校と交流したり、地域や社会と積極的につながりを持つことが、児童生徒にとって、「外とつながる力」「発信する力」「人と関わる力」を育む大事な学習であると捉えている。また、本校での取組を外に発信していくことで、障害をもった児童生徒や特別支援学校を知ってもらおうと

となり、障害者や特別支援学校への理解が深まり、それが、障害の有無に関係なくお互いに助け合い認め合いながら過ごすことのできる「共生社会の構築」へとつながると考える。「つながり」や「発信する」ことを大切にし、「持続可能な社会の構築」「共生社会の構築」という視点で「自分達にできること」はどういうことがあるかを考え、行動に移す児童生徒たちの姿を期待して、児童生徒にとっても教員にとってもわかりやすいキーワードを二つ設定した。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

●防災教育の実施

小・中・高それぞれで防災学習を年間計画の中に位置付け、授業を実施。

- 小学部A、B課程1、2、3、4、6年生、教科：生活科、生活単元学習
「簡易防寒具、簡易クッションづくり」「防災クイズ」「校内

- 防災マップ作り
- 「防災設備点検」「応急手当の方法」
- 中学部B課程2、3年生、教科：生活単元学習
「非常食の確認」
- 高等部A課程1～3年生、教科：総合的な学習の時間、特別活動



は揺れが感じにくいことが課題として挙げられていたが、車椅子から降りて床に座ることで揺れが身体に伝わりやすくなり、大きな揺れを身体全体で感じる事ができた。また、火災を想定した煙体験では、普段は自走で車椅子移動できる児童生徒も、ハンカチ等で口を押さえながら煙が充満した真っ白なテントの中を一人で車椅子移動するのは難しい様子が見られた。体験を終えた児童生徒から「揺れが怖かった」「煙で前が見えなくて焦ってしまった」という声が聞こえ、言葉での表出が難しい児童生徒からも普段にないこぼれた表情や緊張した様子が見られた。このように言葉による説明や写真等の提示だけでは、状況を理解しにくい児童生徒が、日常では経験できないことを体験的に活動できたことは大きな成果である。

「高校生としてできる防災」について、交流校の高校生とディスカッション。

- 高等部B課程3年生、教科：生活単元学習
「被災時の身の守り方」「我が家の防災のきまり」「校内防災マップ作り」
「非常食の確認」「非常食の美食」
上記の様に、児童生徒の発達段階や実態に応じた実践を行った。

●校外学習の実施

小学部、中学部、高等部それぞれにおいて各学年や各課程で実施。校外に学習に行き、公共施設、公共交通機関、商業施設を利用し、地域や社会とのつながりを大切にし、社会的ルールやマナーを習得することができた。校外に出ると、車いすで移動することの不便さや社会の厳しさを感じることもあるが、それと同時にどのように周囲の方と一緒に生活すればよいかを児童生徒自身が考えることができ、また、障害者自身が社会とのつながりをもっていくことが相互理解へとつながり、共生社会の構築へとつながっていくと感じた。

●防災体験学習の実施 (平成29年7月14日)

起震車体験、煙体験、消火器体験が行われ、小学部1年から高等部3年までの児童生徒のべ100人が参加した。起震車体験は、本校の児童生徒にとって実際に起きる小さな地震で

変容 (TRANSFORMATION)

学校

ホールスクールアプローチ・デザインシートにまとめることで、それぞれの項目でESDを整理することができたり、ビジョンを明確に提示することで目指すところを共有しやすくなり、学校全体でESDに取り組んでいこうという意識が高まった。また、「つながり」という項目をさらに4つの領域に分けて取り組みを整理したことで、学習のねらいをESDの視点で捉えやすくなり、ESDの実践の充実につながった。

教員

サステイナブルスクールに選ばれたことでユネスコスクールとしての自覚が高まったり、校内分掌体制を工夫したことで、

各学部でのESDの広がりが見られたりし、ESDの視点で学習を捉えることができる教員が増えた。「つながり」を大切にしたい取り組みが「共生社会の構築」へとつながるという考え方が昨年度より浸透してきた。

児童生徒

様々な活動の積み重ねで児童生徒自身のできる事が増え、自信につながっている。また、他者と関わることや学習環境を広げることで、興味関心の幅や視野が広がったり、コミュニケーションスキルが高まったりした。生徒自身が「桜が丘のESD＝つながり、共生社会の構築」ということを理解し、自分たちができることを実行しようという態度が育まれてきている。

学校情報

学校名	千葉県立桜が丘特別支援学校
児童・生徒数	169名
住所	〒264-0017 千葉県千葉市若葉区加曽利町 1538

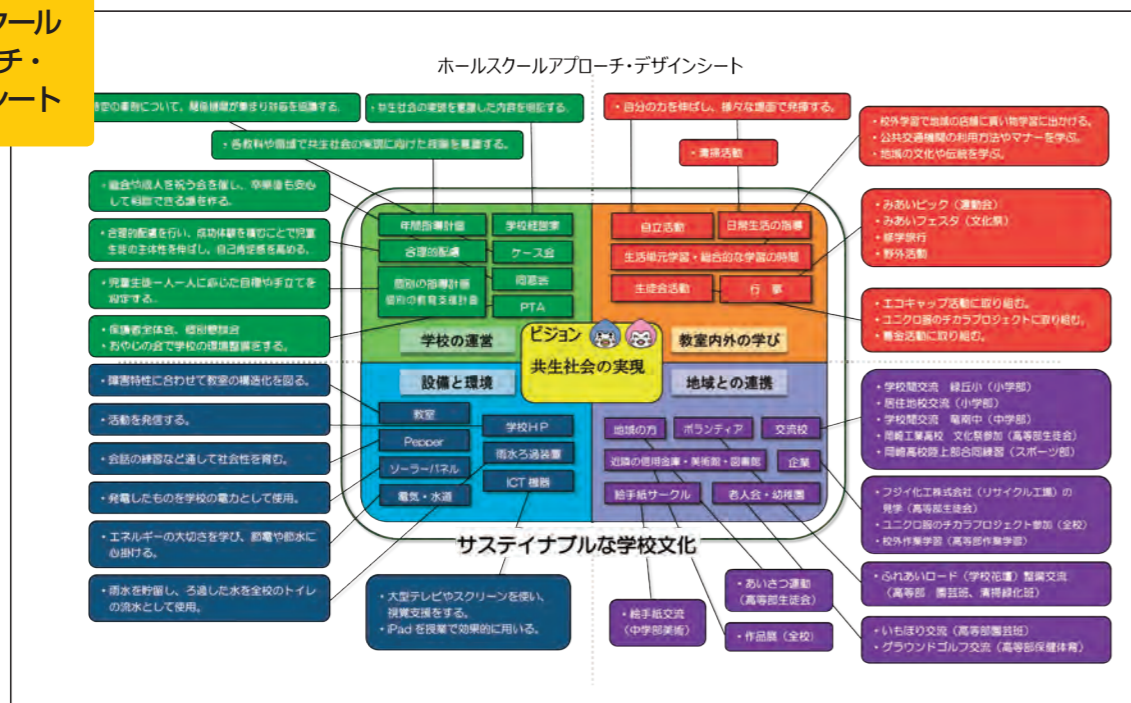
TEL	(043) 231-1449
FAX	(043) 231-3069
E-MAIL	sakuragaoka-sh@chiba-c.ed.jp
HP	http://www.chiba-c.ed.jp/chibapref-sakuragaoka-sh/

愛知県立みあい特別支援学校

ESD と ICT でつながる社会、ひろがる豊かな心

KEYWORD
 生物多様性
 国際理解学習 その他

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

知的障害のある児童生徒が通う特別支援学校として障害のある人もない人も共に尊重される社会の実現に向け、児童生徒自身が社会性を身に付け、コミュニケーション能力を高めること、そして、地域で主体的に生きていくためのスキルの獲得や自己肯定感の向上をねらい上記のビジョンとした。

ビジョンの達成に向けて学習活動を「自分の力を発揮する活動」、「社会に参加する活動」、「社会に役立つ活動」に分類し、

能力や年齢に応じた学習を展開することにした。本校児童生徒が学校を出て、地域で学習を進めることで、障害のある児童生徒と地域の人々との出会いの場を作ることができ、障がいがある人に対する理解推進につながる。活動を継続的に展開していくことで、障害のある人も互いに助け合い、支え合いながら生活できる「共生社会の実現」につながると考えた。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

- 学校間交流 (小) (2月:本校児童 13名、交流校児童 38名)
本校で自己紹介やゲームなどで交流を深めた。
- 学校間交流 (中) (6、10月:本校生徒 41名、交流校生徒 70名)
本校と交流校を1回ずつ訪ねて自己紹介やゲームなどで交流を深めた。
- 居住地交流 (通年:小学部児童 22名)
居住地の小学校に伺い、授業や行事に参加して交流を深めた。

- ブロック交流 (11、12月:小学部児童 5名 中学部生徒 13名)
居住地の中学校区で行われる特別支援学級合同交流会に参加して交流を深めた。
- 部活動交流 (高) (8、11月:本校スポーツ部生徒 30名、交流校生徒約 30名)
8月:陸上大会に向けて本校での練習と一緒に取り組んだ。
11月:地域のマラソン大会と一緒に出場した。



- キャップリサイクル工場見学 (高生徒会) (8月:生徒会役員 3名)
キャップのリサイクル工場を見学し、自分たちが集めたキャップがどのようにリサイクルされるか知り、校内で発信した。
- ユニクロ服のチカラプロジェクト参加 (通年:全校児童生徒 288名とその保護者)
子ども服を集め、難民の方々に送った。生徒会役員を中心に服の収集を呼びかけ、集めた服は高等部の一部の生徒が洗濯や梱包をした。
- 校外作業学習 (高) (9月~3月:高等部生徒 122名)
学校近隣の店舗や施設で清掃や商品の整理、洗車、調理補助などの作業体験に取り組んだ。
- 学校花壇整備交流 (高) (通年(月に1回):高等部生徒 23名、地域ボランティア 10名程度)
地域のボランティアと学校花壇の整備を行った。整備後と一緒に飲み、会話を楽しみながら交流を深めた。
- いもほり交流 (高) (11月:高等部生徒 13名、地域老人会約 10名、幼稚園児約 30名)
地域の老人会の方と幼稚園児を本校に招き、本校生徒が育てたサツマイモと一緒に収穫した。収穫したサツマイモは一部プレゼントした。

- グラウンドゴルフ交流 (高) (2月:高等部生徒 27名、地域老人会 10名)
地域老人会の方を招き一緒にグラウンドゴルフを行った。
- あいさつ運動 (6、1月:高等部生徒会 7名)
最寄り駅で朝の時間 (8:00~8:30) にあいさつ運動に取り組んだ。
- 作品展出品 (8、1、3月:一部の児童生徒各 20名ほど)
近隣の信用金庫や市内の作品展に出品した。
- 絵手紙交流 (中) (1月:中学部3年生徒 28名、絵手紙サークルの方 10名)
絵手紙の描き方を習い、作品と一緒に作った。作ったものは卒業制作として学校に飾った。

変容 (TRANSFORMATION)

学校

校務分掌に ESD 部を配置し、現職研修などを企画して教職員に対する ESD の啓発活動をしたり本校の ESD 活動をまとめた資料を作ったりすることができた。
ホールスクールアプローチ・デザインシートを作成できた。
今後教職員向けに発信していきたい。

教員

外部講師を招いた校内研修を積極的に行うことで、個人差はあるものの ESD や本校の ESD 活動に対する理解が深ってきたと感じる。研修会の事後アンケートには、「学校教育全般で ESD を意識しようと思った」「今後具体的な活動を考えてい

きたい」など ESD に対する前向きな意見も多くなってきた。
児童生徒
 ●校外学習などの体験活動を通して社会のルールやマナーが習得できている
 ●交流及び共同学習など他者との関わりがある活動を通してコミュニケーション能力が向上している。
 ●リサイクル活動など社会に役立つ活動を通して自分にもできることがあると知り、人や社会の役に立っているという自己有用感を高められている。

学校情報

学校名 愛知県立みあい特別支援学校
 児童・生徒数 256名
 住所 〒444-0802 愛知県岡崎市美合町並松 1-51

TEL (0564) 57-0013
 FAX (0564) 53-0034
 E-MAIL mi ai-toku@pref.aichi.lg.jp
 HP http://www.mi ai-sh.aichi-c.ed.jp/

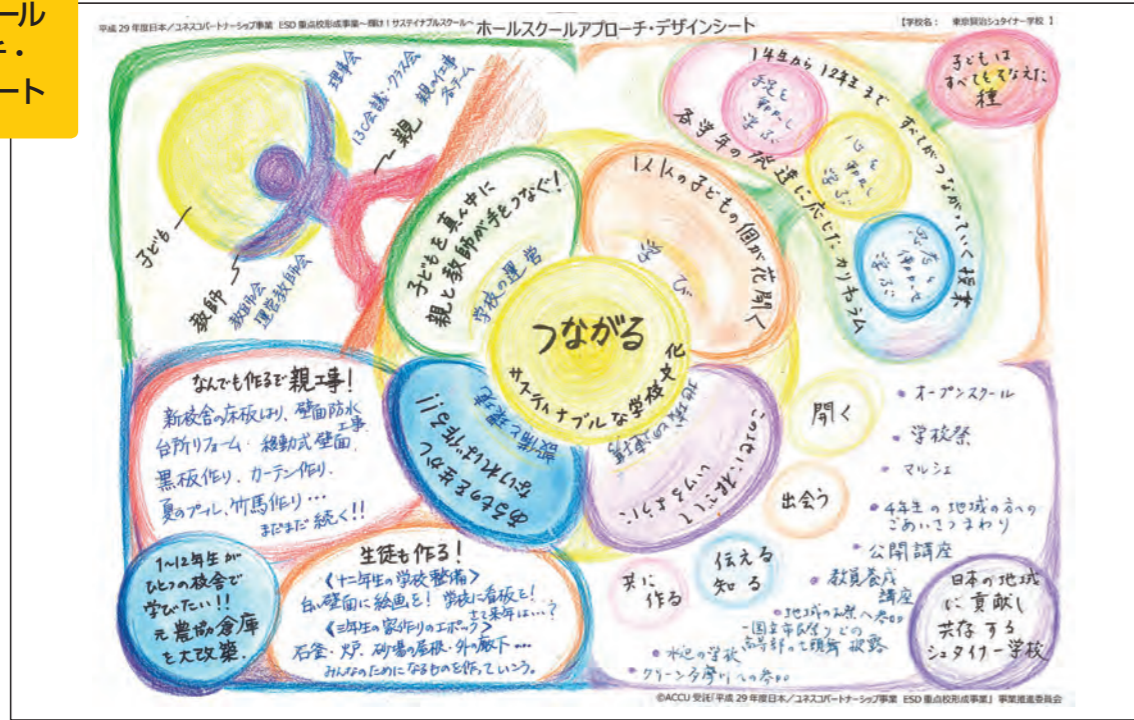
NPO 法人 東京賢治の学校 東京賢治シュタイナー学校

心からの学びと心からの喜び 真に自立した人間を育てるために

KEYWORD

生物多様性 エネルギー学習 環境学習
国際理解学習 世界遺産や地域の文化等に
関する学習 その他

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

- プロセス：担当者間で原案を練り、教師会に提案、検討、決定していった。
- 込めた思い：この学校の教育が、クラスの生徒間、学年を超えた生徒間、学びと学び、自然環境、日本社会、世界と

繋がるものになること。そして自分自身と他者としっかりとつながる自己を確立していくことを目指すものであり、その様に生徒が成長していくことに願いを込めた。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

- 【12年生 [18名]：ヨーロッパ芸術旅行(イタリア～フランス～ドイツ)・オイリュトミー 100周年記念公演参加(ドイツ・ヴィッテン市)】2017年5月13日～6月3日→期間中、ドイツニュルンベルグ、ニュルンベルグシュタイナー学校、ベルリン、メルキッシュフェアテルシュタイナー学校にて、オイリュトミー公演を行う。
- 【12年生[18名]：卒業論文発表】2017年7月15日～17日→18名がそれぞれのテーマを持ち30頁の論文を作成、45分間のプレゼンテーションを行う。
- 【11年生 [18名]：福祉実習】2017年9月11日～30日

- 【10年生 [20名]：測量実習】2017年9月11日～30日→長野県南佐久郡南牧村野辺山の牧草地を測量、地図作成を行う。
- 【9年生 [5名]：農業実習】2017年9月11日～30日→宮崎県東諸県郡綾町のエコロジカルな農業を実践している農家で3週間働かせていただく。
- 【8年生 [10名]：8年劇発表】2017年11月10、11日→学校ホールにて「シェークスピア『真夏の夜の夢』」を上演。
- 【7年 [10名]、6年 [10名]：祝島合宿】2017年7月20日～26日



変容 (TRANSFORMATION)

学校

持続可能な運営に向けて、親たちが学校を支える活動に今まで以上に知恵を絞り、協力し取り組んだ。新ホームページ作成、校舎改築、生徒募集活動と、教師と親とで協力して新しい動きを作り上げていった。また、13C会議(各クラスの親の代表者が1名、各クラス担任が出て、学校全体で必要な議題を話し合う会議)において、学校が持続可能になっていくために何が出来るか、活発な議論がなされ、具体的に実行に移す行動を始めている。

教員

本校そして日本におけるシュタイナー教育が持続可能となっていくために、教員養成講座の運営を始めた。このために、教師達は講座を担当し、受講生たちとつながる場を作り、力を合わせて未来の教師を育てていくことに取り組んだ。それが他校との連携に繋がり、日本シュタイナー学校連盟主催の連携型教員養成が発足した。未来に向けて、学内間だけではなく、日本のシュタイナー学校の教師と協力して教員養成を

行う意識が生まれた。

児童生徒

この事業の2年間の活動及び12年間の本校での教育のもと、最終学年である12年生は大きく変容した。卒業論文で移民問題や子供の貧困など、持続可能な社会とはいかにあるべきなのかを問う内容を取り上げ発表した。オイリュトミー公演では、ドイツという異国の舞台上で演技を行い、国内では他のシュタイナー学校(京田辺、横浜、福岡)に遠征した。卒業劇では、現代に起きている問題を想起させる、カレル・チャペックの脚本『白い病氣』を選び、権力、戦争、病氣、人間の弱さと強さを見事に表現した演技を見せた。そして卒業に向けて、この学校が持続するために自分達は何が出来るのかを考え、4つのプロジェクトを行った(前述)。そこには、他者のために自ら喜びを持って働く姿があった。「自らは何をしたいのか、社会の中で何が出来るのか」という思考で、自分自身を見つめ、そして仲間と、他者と協力する姿を見せている。

学校情報

学校名	NPO 法人 東京賢治の学校 東京賢治シュタイナー学校	TEL	(042) 523-7112
児童・生徒数	181名	FAX	(042) 523-7113
住所	〒191-0023 東京都立川市柴崎町 6-20-37	E-MAIL	teacher@tokyokenji-steiner.jp
		HP	http://www.tokyokenji-steiner.jp

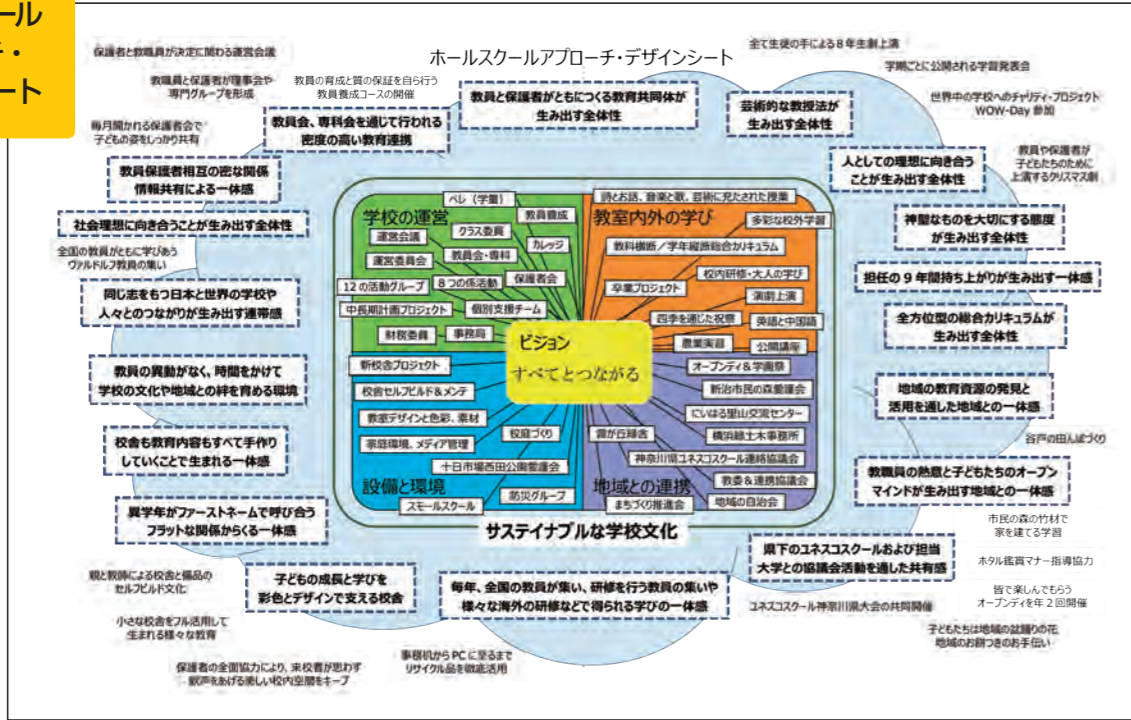
特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園

お話と芸術に充たされた、子どもたちの本質に応える学び

KEYWORD

その他（暗示的な機関包括型アプローチによるオールラウンドESD）

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

他にも案が出ましたが、本校の教育の本質が簡潔に表現されていることから「すべてとつながる」をビジョンに選びました。子どもたちが、他者や世界と自分の間に網の目のようなつながりをイメージ豊かに築いていくことが、この教育の中心にあるからです。

他案としては、人の尊厳の深奥に通じる「Learning to be」が挙がりました。これはユネスコの教育理念の4本柱のひとつですが、他の3つの柱を包括する深みを持った言葉です。「すべてとつながる」ことが、自らの存在の奥深さと尊さを子どもたちの実感となり、他者もまたそのような存在である

ことを見出させるのです。ここでひとつの問いが浮かびました。ただひとつのビジョンによる求心力だけで、十分にESDの実質をもったホールスクールアプローチを生み出せるのだろうか。そこで、授業や学校運営に浸透している自立的な活動や仕組みに着目し、それらが学校に生命の通った全体性をもたらしていることをシートに表現しました。学内と周辺に広がる個々の営みにホールスクールとしてのまとまりを与えている要因は何か。ビジョンを囲むようにそれを配置すると、そこに曼荼羅のような小宇宙が浮かび上がりました！

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

平常の活動については、毎週の教員会や研修を通してESDとしての確かさを確実なものとしています。それ以外の特記事項としては以下の活動が挙げられます。

- 第8回ユネスコスクールESDアシストプロジェクト助成

を受け、「循環型社会理解の基礎となる体験型『暮らしと仕事』学習」プロジェクトを実施した。3年生19名の総合学習カリキュラムをそのままプロジェクトとし、農の営み（稲作・畑作／通年）、住まうこと（風雨から身を守る



家を実際に建てる／11月～12月）、収穫物を食す（脱穀精米した米を古民家の釜屋で炊飯／12月）、暮らしを支える職人の仕事（江戸指物職人に桧の八角箸づくりを指導していただいた／1月）など数多くの体験型学習を行った。

- 1年生から9年生（中学3年）まで、本校の活動の中に深く浸透している演劇文化のESD性を明らかにするために、

第9回ユネスコスクールESDアシストプロジェクト助成に「舞台まるごとESD」プロジェクトを申請した。「演劇は当校のESDの重要な要素を成す。役を通して異なる考えや感じ方を全身体験する。舞台美術、音楽、衣装等、劇は全ての学びの統合であり、それ自体ESD的である。1～9年生の劇活動を貫くESD性を明らかにしたい。」

変容 (TRANSFORMATION)

学校

学校を完成されたシステムとは考えない学校運営の手法が徹底されているので、教職員も保護者もともに手を携えて教育の場をつくっているという共通感覚が生まれ、それが学校全体の統一感を育てています。その雰囲気子どもたちも受け取って、子どもたちの心にひとつの家族のような感情が育まれ、卒業してからも事あるごとに学校を訪れる卒業生が絶えません。

教員

神奈川県ユネスコスクール連絡協議会主催のユネスコスクール神奈川県大会や東海大学主催のユースセミナー合宿などに教員が積極的に参加し、他校の教員との交流を深めています。

これまでなかなか取り組む余裕がなかった学外への発信や他校との交流に、教員が積極的に関わっていく余裕（時間的、心理的）が生まれてきました。

児童生徒

毎学期に行う学びの発表の場「月例祭」の質がどんどん向上しています。保護者の温かい眼差しのなかで子どもたちは「自分」をのびのびと表現しており、学年を越えたバランスのよさが伝わってきます。個々のクラスは個性的でありながら、卒業研究の発表や劇の上演ではどのクラスもESDと呼ぶにふさわしい水準を安定してクリアできています。推進拠点となる以前より取り組んできたESDの成果が着実にあがっています。

学校情報

学校名 特定非営利活動法人
横浜シュタイナー学園
児童・生徒数 110名
住所 〒226-0016
神奈川県横浜市緑区霧が丘3-1-20

TEL (045) 922-3107
FAX (045) 922-3107
E-MAIL jimuj@yokohama-steiner.jp
HP https://yokohama-steiner.jp/

特定非営利活動法人 京田辺シュタイナー学校

体験を通じた芸術的な学びにより 内面からの ESD 実現をめざします。

KEYWORD

地域文化 生物多様性 環境学習
エネルギー 国際理解

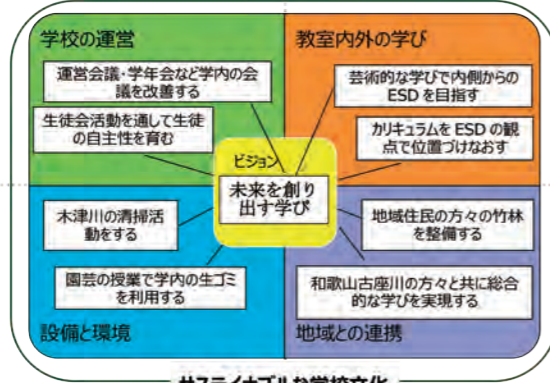
ホールスクール アプローチ・ デザインシート

ホールスクールアプローチ・デザインシート

保護者の方々の積極的な参加をさらに促すために、現在は運営会議・学年会について話し合いを進めている。この組織の特徴である水平性を保ちつつ、効率的な運営ができるよう学校組織の見直しを進めている。

シュタイナー教育においては日々の学びが ESD であると実感しているが、それを ESD 的観点でも捉えなおそうとしている。今回は公立の先生方からも多数本校にご訪問頂き、その方々から見えるシュタイナー教育の意味や魅力を聞かせていただいたのはとても大きな学びとなった。

高等部では、生徒の自主性を育むために、生徒会を自主運営している。自分たちの力で様々なイベントを企画運営し、自ら考え、共に話し合い、実現していく、というダイナミックなプロセスを体験することは、とても大きな教育的意義がある。



そうした視点を踏まえ、シュタイナー教育のカリキュラムを分かりやすい言葉で表現し、一般の方にも理解し共有していけるよう、カリキュラムの改訂などにもさらに動いていきたい。

京田辺の地域住民の方々竹林整備事業が始まり、地域の方々から「ぜひ竹の林もおもしろい」という声をいただいている。ESD 的視点、地域の方々からの感謝の気持ちなど様々な学びを得ていると感じる。

地域の清掃活動に「するだけ」でなく、自分の住む環境を自主的に美しくしていく意識や姿勢を育てるために、園芸での生ゴミのリサイクル、木津川の清掃活動に取り組んできた。畑の土を自ら作って行くことで、ESD を体験することが出来ていると感じる。

和歌山の古座川での体験学習は大きな成果を得た。カヌーでの川下り体験では、机の上で学んだ、地形や地質、川の流れを自ら体感する機会となった。他にも林業の体験、田エビの捕獲など、様々な生きた体験することが出来た。そして何より、そうした機会を支えて下さった地域の方々と深く交流することが出来、感謝の気持ちを持ってこの体験を終えることが出来た。

ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

「日々の学びの中でこそ、ESD の精神を体現していきたい。」
そんな願いを教師会で確認し、それを生徒、教員、保護者の
全員で実践していこうと考えました。それを表わすのが「未

来を作り出す学び」です。この精神をベースに、様々な領域
で、学校に関わる全員が実践を重ねていきます。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

- 学校の運営
- 教室内外の学び
- 設備と環境
- 地域との連携

- 全ての学年の授業において、物語やお話、ディスカッションを中心にした、芸術的、実践的、全人的な学びが行われており、それらは生徒たちの深いところで、確実に ESD 的精神を育てている。
- 本年度は持続可能なスクール間の交流が活発であっ

た。目黒区立五本木小学校、横浜市立永田台小学校から先生方の訪問を受け、当校からも 6 名の教員が永田台小学校を訪問し、授業見学を実施。公立での ESD の実践例を見学し、多くの学びのある、大変意味深い交流をすることが出来た。



変容 (TRANSFORMATION)

学校

学校運営の見直しについて、保護者も交え、全ての参加者で話し合うプロセスそれ自体が、参加者一人一人の学びに繋がっているという実感を持つ。意見を述べることで、意見を聞きあうこと、そして皆で合意を作り出し、実現して行くこと。こうした全てが学びであると実感する。

教員

今回は、特に横浜永田台小学校を始めとする公立学校の方々との交流に於いて、とても豊かな学びを得たと感じている。子どもへの向き合い方、それもチームで日々真摯に向き合っている姿、姿勢を感じられたのは、とても大きかった。また、

永田台小学校など公立学校の先生方からも、日々 ESD を授業の中で実践するということを実感した、という感想をいただいた。

児童生徒

当校の授業自体が ESD 的であるため、生徒たちは年齢に応じて、それぞれ豊かな変容を遂げている。それは簡潔に言うならば「その子らしさが凝縮され、豊かな個性となって花開いていく」ということになる。また本年度始めた地域の方々の竹林整備は、地域の方々に大変喜ばれ、他者の喜びが自分の喜びになるという、とても豊かな体験を得た。

学校情報

学校名 特定非営利活動法人
京田辺シュタイナー学校
児童・生徒数 262 名
住所 〒610-0332
京都府京田辺市興戸南鉾 94

TEL (0774) 64-3158
FAX (0774) 64-3334
E-MAIL info@ktsg.jp
HP http://ktsg.jp/

認定 NPO 法人 箕面こどもの森学園

民主的で持続可能な社会をにやう市民を育む学校

KEYWORD

環境学習 防災学習
国際理解学習 その他

ホールスクール アプローチ・ デザインシート

これからのビジョン

ホールスクールアプローチ・デザインシート

自然と調和したライフスタイル

自然の中の学び

対話文化の促進

里山保全

再生可能
エネルギー

循環型の社会づくり・廃棄物活用

これまでの取組み

学校の運営

- 全校集会・クラス集会、加えて行事や学校のルールを決定
- 実行委員会、子どもたちが学校の行事を中核に企画・実行
- スタッフ会議
- スタッフ研修 (ESD などさまざまなテーマで毎月1回実施)
- あそびの会、保護者とスタッフの事前共有・準備
- 連携委員会・NPO、学校運営について話し合う場
- ビジョンミーティング、学校の存続や方向性を話し合う場
- ボランティアチーム (学芸・広報・校務・大人数など)

教室内外の学び

- 子どもたちが主体・実践する授業 (体験型・調べ学習など)
- 行先・自由な目的地で子どもたちが作る授業進行
- テーマ学習 (健康・人権・平和)・地域学習 (SDGsの学び)
- 自己学習・探究 (学習計画・つなぐレポート)
- 自分から考える場、野外学習
- 対話を通して知恵を創出する、習字・書道など
- 教育実践発表 (国際理解、読書の理解との関連)
- こぼれ学習 (SDGsの学び)
- SDGsの学び

サステイナブルな学校文化

持続可能なまちづくり

設備と環境

- ピピオトープ
- 学校庭園 (はたけのクラブ)
- 自然の力を活用する本質的体験
- 自然に配慮した取り組み
- テーマ学習「自然体験」を通して子どもたちが主体的に学ぶ
- アグリカルチャー (野菜・動物など)
- エコ活動
- 子どもたちが企画・制作した環境学習教材

地域との連携

- 地域団体との連携・出前学習
- 地域住民の方との関わり
- 子育てカフェ (子育てサポート)・土曜親子クラスなど
- 教育フェスティバル (別冊)・ロケットフェスティバル (別冊)
- 企業との連携・産学連携プロジェクト・地域学習実践
- 教育機関との関わり (インターンシップ生人・教員研修)
- 子どもたちの主体性教育やESDを推進する
- 学び場コーディネーターMeetupプログラム

SDGs

自然保全

地域社会と
の関わり

子育て支援

生涯学習の場

多世代交流の場

ビジョンに込めた想いとその策定プロセス (VISION)

●ビジョン策定プロセス

ビジョンを描く過程では、スタッフ全員や保護者を含む学園の運営委員会メンバーが集まり、ワークショップや合宿を行い、思いを出し合うビジョン・ミーティングを行った。ミーティングでは、私たちが『何を大切にしたいか・何のために・どこに向かっていきたいか・どんなことがしたいのか』について意見を出し合い、共通の思いをビジョンとした。またビジョンは、一枚の絵にビジョン・マップとしてまとめた。

●ビジョンに込めた想い

子どもたちが自分の個性を大切に、人と協働しながら、のびのびと学ぶ学校。持続可能な社会に向けて、さまざまな個性をもった人たちが、互いに違いを認め合い、思いや意見を尊重し、よりよい社会を築くために、対話を通し物事を解決することができる市民をはぐくむ場。そして、これら持続可能な社会をつくるライフスタイルが、学校というコミュニティを中心にしながら、子どもたち・家庭・地域・社会へと広がっていくという想いが込められている。

2年目に力を入れた活動 (ACTIVITY)

学校の運営

教室内外の学び

設備と環境

地域との連携

●全校集会(通年/小学1年～6年生・中学1～3年生 55名)
子どもたちとスタッフが集まり、学校行事を企画運営することや、学校のルールや起こった問題について話し合い、学校をより過ごしやすい場にする活動を行っている。

●学校行事 (小学1年～6年生・中学1～3年生 55名)
子どもたちが主体的に様々な行事を企画し、運営を行った。体育祭(5月)・夏祭り(7月)・釣り(9月)・ハロウィンパーティ(10月)・ホワイトパーティ(2月)卒業を祝う会(3月)



●大人の会 (4月・6月・9月・11月・2月)

保護者とスタッフ(教員)が集まり、さまざまな情報共有や関心のあるテーマについて話し合う場を設けて、学校と

家庭の連携をはかっている。

※これまでの活動テーマ例：子どもたちの学習体験、哲学、性教育など

変容 (TRANSFORMATION)

学校

ESDを学習やカリキュラムの中だけで行うのではなく、学校全体の視点で取り組む大切さを共有し、活動に取り入れるようになった。学校だけでなく、家庭・地域・社会へと持続可能なまちづくりの中心となっていくようなビジョンが明確になってきた。また、サステイナブルスクールとして、学校外にもESDを深め、広めていくような活動をより一層行うようになった

教員

学習目標やカリキュラム作りを行う際に、ESDや持続可能性を考慮しながら行うようになった。教員の多くが、ESDに関わる国内や海外の研修事業や会議に積極的に参加するこ

とや、外部の専門家をお招きし、研修を行うなどESDへの理解を深めるために自己研鑽を行った。また、サステイナブルスクール間での交流では、教員が他校を見学を訪れ、意見交換するなど新たな知見を得ることに努めた。

児童生徒

ESDの学びを重ねていく中で、子どもたちのなかで協働する姿勢が生まれている。学習プログラムの中で、特別講師として来られたファシリテーターの方が、子どもたちが話し合いを持ちながら協力し合う様子が育まれていることに感心されていた。これらの協働や対話で問題を解決することは、ESD活動の積み重ねによる子どもたちの中に生まれた変化だと感じている。

学校情報

学校名 認定 NPO 法人
箕面こどもの森学園
児童・生徒数 43名
住所 〒562-0032
大阪府箕面市小野原西 6-15-31

TEL (072) 735-7676
FAX (072) 735-7676
E-MAIL info@kodomonono-mori.com
HP http://kodomonono-mori.com/



【寄稿】

ホールスクールアプローチにおける 新たな可能性を切り拓く

宮城教育大学 教授 市瀬智紀

ホールスクールアプローチとは、カタカナ言葉であり、教育学の用語としてなじみ深い概念とはいえません。そもそも ESD を推進していく中で、ホールスクールアプローチとは、どのように定義され、認識されているのでしょうか。

UNESCO の International Implementation Scheme for the Decade of Education for Sustainable Development(2005) では、ESD は領域を超え、ホリスティックに、そして参加型で行われるとともに、「持続可能な開発について学ぶためには、分断された教科ではなく、すべてのカリキュラムで実践されるべきである」と述べています。また United Nations Economic Commission for Europe (国際連合経済社会理事会、略称 UNECE) (2005) は、ESD が公教育においてホールスクールアプローチで実践されることを推奨するなかで「児童生徒と教員、管理職、そのほかの職員に加えて保護者も、持続可能な開発の原則を導入すべきである」と述べています。実際に、ホールスクールアプローチは、オーストラリア (2006)、フィンランド (2006)、英国 (2005) など、政府レベルの ESD の行動計画に示され、サステナブル・スクールやエコスクールの実践において実現されてきました。

このようにホールスクールアプローチとは、①教科を超えて学校全体のすべてのカリキュラムで行われること、②児童生徒と教員、管理職、保護者が参画しながら行われるべきことを意味していると考えられます。オーストラリアのサステナブルスクールイニシアティブ (AuSSI) では、

児童生徒、教員に加えて、行政やコミュニティへの広がりを目指しています。

私たち日本のサステナブルスクールを振り返ってみれば、一方で上述の定義を実現しつつも、世界に誇れるようなホールスクールアプローチの独自性と先駆性を示しているといえるでしょう。それを次の6つにまとめてみました。

1. ホールスクールアプローチにおける 教科の統合を可視化できたこと

「教科を1つ1つ独立したものとしてみとらえるのではなく、相互の関連性を作り出していくことで子どもたちの学びの意欲を高めていった」としている江東区立八名川小学校の実践では、クロスカリキュラム、ホールスクールアプローチを可視化した ESD カレンダーの推進と普及で世界のホールスクールアプローチに貢献したと言えます。また、最近では、八名川小学校をはじめとして、複数の学校で SDGs のロゴを活用してホールスクールを可視化していく動きも広がってきました。

2. 分断された教科ではなく、 すべてのカリキュラムで実践していること

「暗示的な機関包括型アプローチによるオールラウンドな ESD」を実践される横浜シュタイナー学園や京田辺シュタ

イナー学校の「エポック授業」などは、本来的に分断された教科ではなく、すべてのカリキュラムで ESD を実践しているといえます。

3. 教員の変容を促すことでホールスクール アプローチを実現しようとしていること

「教師一人ひとりが安心して取り組めるように、教師間のケアリングを大切にしている」横浜市立永田台小学校の取組は、ホールスクールアプローチを実現するにあたって、教員の変容を出発点にしているという点で、ユニークな視点からの取組であると言えます。

4. キャンパスサスティナビリティに 積極的に取り組んでいること

英国のエコスクールでは、環境教育を中心にしてキャンパスの活用が盛んでしたが、上述のホールスクールアプローチの定義には、キャンパスのサスティナビリティが十分に表現されていません。サステナブルキャンパスを国際的に先導されている福島工業高等専門学校の取組は先駆的です。また私たちの一連のワークショップでは、施設設備における持続可能性の実現についてさまざまなアイデアを出して学び合ってきました。

5. 地域のコミュニティと 密接な連携をしていること

気仙沼市立唐桑小学校や、石巻市立牡鹿中学校、阿南市立桑野小学校などの実践では、地域の伝統文化の継承や地域と共に生きることを追求しています。地域の持続可能性に危機意識を抱きながらホールコミュニティ、ホールエリアで人材育成を行っていることは、日本の ESD の一つの典型的な姿といえるでしょう。

6. 教育委員会の支援のもと ホールスクールアプローチを進めていること

大牟田市立吉野小学校や、気仙沼市立面瀬小学校などは、上述の定義における「行政」、すなわち教育委員会や市による協力や支援を受けながら取組を進めています。このように教育委員会のバックアップの元で ESD を推進していることは、世界の中でも突出した事例です。

紙面の都合で言及できなかった学校もありますが、日本のサステナブルスクール 24 校は、世界のホールスクールアプローチに独自性と新たな展開を切り拓いていると言えます。今後も、私たちの取組から、次なるホールスクールアプローチの可能性が広がっていくことを期待しています。

<参考文献>

Australian Department of the Environment and Heritage. (2006). *Caring for our Future: The Australian Government Strategy for the United Nations Decade of Education/or Sustainable Development, 2005-2014*. Canberra: Australian Government Department of the Environment and Heritage.
Finnish National Commission on Sustainable Development. (2006). *Strategy for Education and Training/or Sustainable Development and Implementation Plan 2006-2014*.
United Kingdom Department of Education and Skills. (2005). *Learning/or the Future: Department of Education and Skills Sustainable Development Action Plan 2005/06*. London: UK Department of Education and Skills.
United Nations Economic Commission for Europe. (2005). *UNECE Strategy for Education for Sustainable Development*. Vilnius: UNECE.
United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization. (2005). *International Implementation Scheme for the United Nations Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014)*. Paris: UNESCO.





【対談】

住田昌治 (横浜市立永田台小学校校長)

×
小畑怜美 (and seeds)

聞き手：篠田真穂 (ACCU 教育協力部)



サステナブルスクールの軸となっているホールスクールアプローチを実施していくためには、それぞれの教育活動(アクション)が点にならないよう、「つなげるもの」が必要となってきます。では、その「つなげるもの」とは一体何で、どのように創り上げていくものなのでしょうか。コーチとして個人や組織のビジョンづくりに携わってきた経験から、今年度のサステナブルスクール第2回研修会においてビジョンづくりのワークショップをしてくださった小畑怜美さん、長年ホールスクールアプローチを実践されてきた住田昌治先生にそんな疑問を投げかけてみました。学校という組織に馴染む、「つなげるもの」の創り方をみなさんで考えてみませんか？

ビジョンをもつ意味について

住田：12月の研修会ではありがとうございました。

小畑：こちらこそ、ありがとうございます。ビジョンづくりのプロセスを通じてサステナブルスクールの皆さんと出会えてとても嬉しかったです。

住田：研修に参加させていただき、楽しさも感じながら、同時に学校がビジョンをもつ難しさも感じました…。というのも、研修会に参加した先生に聞いてまわった時に、デザインシートの真ん中の捉え方が様々であったことに気がつきました。ビジョンを「価値」として捉えている人もいたし、学校教育目標を入れている人もいた。学校は様々な教育活動をしていて、基本的にその活動は学校教育目標の実現に向けて実施してい

ますから。

小畑：なるほど…。12月の研修会では、まずはビジョンの意味と機能を分かりやすく捉えて欲しいという思いがありました。ビジョンは一言で言うと「ありたい姿の理想」です。ビジョンをもつ主体を個人と組織で分けると、個人がビジョンをもつとき、まず自分自身が成し遂げたい・実現したい未来の青写真を描きます。一方、組織の場合は、「何のために・何を成し遂げるために働くのか(存在するのか)？」という、あるべき姿・ありたい姿の理想を可視化し、組織で統一した目的として目指す方向性を描きます。ビジョンを明確にすることによって、目の前にある一つ一つの目標をなぜ達成するのかという目的を捉えることができますし、目標の先にあるものを意識してモチベーションが向上したり、自発的に取り組むことができたりするよ

うになるのです。例えば目標となるのは、今回「デザインシートを作るう！」と研修内で盛んに言っていました、まさにそれです。

住田：そうすると、新学習指導要領に「持続可能な社会の創り手」という文言が入ってきたんだけど、これを実現する学校は？人は？文化は？を描くことが、まさにビジョンになってくるということでしょうか…。皆が引っかかっている既存の学校教育目標とビジョンの位置づけの話ですが、そもそも学校教育目標は学校や地域の実態を捉えた上で、どんな子どもに育てたいか…というように考えながら創り出しているんです。そうすると、デザインシートの真ん中には何を置こうかという話になってしまうんです。

小畑：学校教育目標は、学校が社会に生み出していきたい価値のために何をするか、という「ミッション(使命)」のようにも捉えられますね。〇〇な世界を目指します、そのために、一つ「元気でたくましい子を育てます」、二つ～、のような。

住田：私の学校(永田台小学校)の場合、デザインシートの真ん中は「ケア」ですが、これまでビジョンを「価値」と捉えていました。

小畑：「ケア」ってとても素敵ですよ。永田台小学校の学校教育目標を達成していくために、母体である学校組織・教員として大切にすること、行動原理が「ケア」と位置づけられるのかなとも思いました。

住田：そうですね。多分私の学校の場合でも、この上にビジョンというものがあったんです。これ(右上参照)が永田台小学校の学校教育目標なのですが、「一人一人が輝く永田台」とある。「輝く」ってどういうことだろうって教員と一緒に考えたときに、人は一人で



学校教育目標

一人一人が輝く永田台

豊かな人間関係の中で
共に生きる力を育てます
主体的活動と進めの中や
自分の個性とよりよく
發揮できるようにします
個性
さまざまな場面において
自ら解決していく力を育てます
自立

は輝けなくて、人と人との関係性の中で輝くよねという話になった。人と人との関係性が悪いと輝けないし、大体の問題って人間関係から起こるでしょ(笑)。だから、輝くための根っこにある価値が人と人との「ケア」にあるんじゃないかという話になった。それを全ての教育活動でやっていくということが輝く人を育てることにつながるということで、中心に「ケア」を置くことになった。

小畑：学校教育目標を実現した先に何があるのかというのを考えていく。それが学校のビジョンになるだろうなと思います。永田台小の「一人一人が輝く」は、ビジョンに近いものだと思います。

住田：一方で、学校教育目標を達成するための教育活動をおこなっていく時に、学校教育目標が絵に描いた餅になってはいけない。作ることが目的化するのではなく、「輝く」とは何かを考えるプロセスが重要であると感じますよね。

ESDを推進するエッセンスとは

住田：そもそも、ホールスクールアプローチは学校内のどこの活動を見てもESDの要素が見えるということ。ESDという切り口から、学校で大切にしている要素は何なのかを考えたことがあった。先生たちが何年か前に持続可能な社会を創るためには何を大事にして子どもたちに向き合うか、というのをアンケートにしてまとめたことがあったんだけど、その中で特に、「人と人との関わり方」や「子どもに対する関わり方」が多



く出てきた。これを日々やっていくことが持続可能な社会を創るために重要なんだよという話になり、そこにも「ケア」が結びつくのでその言葉を使っていこうとなった。以前から「ケア」を大切にしていたこともあって、学校には比較的スムーズに浸透していったんだよね。そのあとは、ホールスクールアプローチだから、どの教育活動にも「ケア」が見られるようにしなければね、と一つ一つの教育活動を見直したりした。

小畑:なるほど。どの教育活動にもつながる要素をホールスクールアプローチの核に置くものとして扱うというのがしっくりくるのでしょうか。その要素、エッセンスを大切にすることで目指す教育の姿が創られていくのかもしれないですね。

住田:もしかするとデザインシートの中心に据えるもののせいで、これまでの目標や取組でよかったものでも変えたりやめたりすることになってしまうかもしれない。だからこそ、皆が納得して決めていくことが重要になってくると思います。学校には学校経営ビジョンというのがあり、その学校経営ビジョンは校長のビジョンとして出すものなんだけど、これが先生にしっかり浸透していくかが重要になってくる。つまり、しっかりみんなで共有できているかがキーになってくるんです。校長の想いだけを話して、先生に納得してもらえるかというやっぱりそれは少し難しい。だから、私の学校は3～4年前から伝え方を変えていて、学校教育目標に向けて教育活動を進める先には、持続可能な未来という目指すものがあり、螺旋状に向かっていくという前提があるという話を、先生の前で絵を描きながら説明してきました。こうやって皆と話していくうちに、やっぱり活動のコアになるものが「ケア」だったんです。最終的に、これは校長のビジョンではなく、みなさんのビジョンですと言って進めていくことになりました。実は、新学習指導要領で言われてい

るカリキュラムマネジメントでも同じような過程を踏むことが求められているんだよね。

小畑:何を目指した教育活動をするのか、目的や大方針が「学校経営ビジョン」で、そこに向かうために先生たちが大切にすべきことは何か、そこに到達するための具体的な目標(ステップ)は何かと落とし込む作業が「学校経営ビジョン」とは別に起こってくると。これまで、学校では組織としての方針出しは校長先生の役割であり、その方針を示したときに他の先生たちが納得をしていなくて、結果的にみんなで動けない体制にあったということでしょうか。

住田:動けないというか、先生たちは自分たちで勝手に動ける人たちなので、それぞれのベクトルで動きだしてしまっていたということですね。それぞれの教育観をもって教室に入ってしまった。そういう環境の中で、先生たち全体をどのように束ねていくのかというのが、中心価値に「ケア」を置いた出発点な気がします。

小畑:束ねるときの合言葉ですか。先生たちからすると、束ねられ、向かう行き先がビジョンという話になりますね。12月の研修会を設計する時に、船の例えをACCUの皆さんに話したんですけど、学校が船だったとしたら、その船の行き先を決めるのが、まさにビジョンづくりです。そして、その船の先導者(校長やサステイナブルスクール担当者)は、乗組員を束ねてどの方向に行こうかという話し合いの場を作ったり、乗組員との関係性を築いたり、方向性を照らしていく役割を担っています。あらゆる教育活動に重なるデザインシートの真ん中には、活動の先にある方向性を示すビジョンか、取り組む際に皆が共通して大事にする要素、行動原理が置きやすいと思いました。



ビジョンづくりのプロセス

住田:その話を聞いて思ったのは、学校経営ビジョンは1年先を示すものなんです。あまり中長期的には話しませんね…。学校教育目標の場合は子どもが居る間なので1～6年のスパンで考えられています。企業は何年後に設定するんですか？

小畑:一概には言えませんが、社会の変化・スピードに合わせて考えることが前提としてあります。おそらく10年より先だと、社会は目まぐるしく変化し、先をイメージしにくくなる。3～5年とか、あとは企業の業界に関わる世の中の大きなイベントを見越して設定します。

住田:3～5年後にはこういう会社になり、こういう価値を届けていたいという基準で置くということですよ？

小畑:そうですね。適宜見直しはしますが、社会に生み出したい価値について考えます。逆に、1年ごとというのは聞いたことがなくて、それは毎年の行動指針や目標のようなスローガンみたいですね。例えば、とある球団が今年の選手層、チーム状況を見て、今年のスローガンはこれですと提示するみたいな。ビジョンの設定は、この球団が社会に届ける価値は何かというもっと大きく高次なもので設定していきますね。

住田:学校でそれを描く意味がいったいあるのかというところですよ。それを評価できるのかというのも気になるところです。

小畑:ビジョンは理想の姿であり測るものではないと言われてます。ビジョンの実現のために立てる目標は数値化できるものですが。

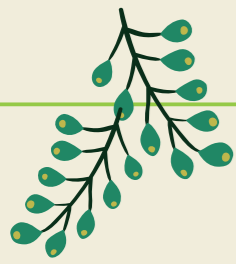
住田:学校教育目標を具体的なものに落とし込んで、例えば学年ごとに決めていくわけでもすんね。その視点に立つと評価の面でもすっきりとしました。しかし、「ビジョンは理想の姿」とは、やはり大きいものという印象をもちます。社会にどんな価値を生み出したいかというレベルの話なんですかね。企業ではどういうタイミングで作るんですか？

小畑:社長が変わるタイミングとか、経営方針を切り替える時とかが多い気がします。ビジョンの策定に半年かけるような会社もあって、社長とリーダー層、メンバーと話し合いを重ねながら納得のいくものを生み出すと言うプロセスを踏みます。しっかりボトムアップでいろんな人の声を引き出しながら意見を集約していきます。

住田:そういうプロセスは学校でも踏んでいると思うんだけど、ビジョンづくりの意味合いとつながっていないのかもしれないね。どちらかという、課題を出してそれを解決していくというプロセスの方が多い。理想を描いて向かっていくところには力を入れていないかもしれない。

小畑:そうですね。日々、目の前の課題やトラブル解決に忙しいですもんね…。

住田:核となる価値がないとトラブル解決が難しくなってくることも確かだと思う。ホールスクールアプローチを通して、ケアのようなものが学校全体に浸っていると、トラブル対応をするときに、一定の判断基準をもって対応することができる。みんながばらばらに判断しちゃうと炎上するんだよ。だから、皆で共通の価値をもっておくことはとても大切。ただ、決める時間をそんなに取れないですもんね…。これから学校教育目標を作っていくときには、ビジョンづくりをう



まくやりながら教育目標も作っていくといいですね。

小畑：これまで組織や個人のビジョンづくりに伴走しながら気づいたことは、「(ここでのビジョンにあたるような)既存のものがあるから安心」といった羅針盤も目標もなく、それらは、人や環境、時代の変化によって刻々と変わるもの、むしろ磨き上げていくものだという事です。組織におけるビジョンの策定は、時間が取られるものですし、人と人の関わりから衝突も起こりうる多くの人にとって面倒なことかもしれません。ある時期にはメンバーのパフォーマンスが目減りするものかもしれませんが、ビジョンがピシッと組織にハマるとスピードもチームの強さも格段に上がります。個人的な意見を言えば、ビジョンを作る過程は希望を語る楽しい時間です。個人の人間性にも触れられるので、周囲との関係性も育まれる貴重な場です。ビジョンを描く楽しさや、そこからひらかれる可能性のことをもっと先生方にも知って欲しい、感じて欲しいなと思っています。

今回の対談では、ホールスクールアプローチを実践するにあたって鍵となる「つなげるもの」についてお二人に語り合っていました。デザインシートでは「ビジョン」と呼ばれていますが、企業や教育機関などの組織によって、さらに個々の学校によってもその在り方は様々です。永田台小学校がどのようにして「ケア」に行き着いたのかというお話を伺いながら、改めてビジョンづくりの魅力と大切さに気付かされました。この対談のテーマである「ビジョンをもつことの意味」は、学校関係者全員で時には難しさも感じながら練り上げていく過程そのものにあります。そしてその過程から見えてくる「つなげるもの」とは、思い描く理想の姿を実現していくため、教育活動を展開していく際の皆の拠りどころ(行動原理)となるものなのではないでしょうか。

デザインシートの中心に据えるもの

住田：学校教育目標などの軸になっている新学習指導要領に「持続可能な社会の創り手」という文言がでてきている通り、学習指導要領はいまの社会の流れに沿って作られているので、サステイナブルスクールが目指すこととかけ離れているものではないはずです。持続可能な未来に向かって、ホールスクールアプローチを軸にあらゆる教育活動をつなげて実施していく中で、行き先を迷わないように、何かあったらここに戻れる、拠りどころになる言葉であることが重要ですよ。

小畑：住田先生のお話を伺っていてすごく大切だと感じたことは、先生自身がESDやここ(学校教育目標)に書かれていることに納得して、自分の言葉で説明できるということだと思います。話す人によってちよつとずつずれるのは仕方ないけれど、自分が納得して話せるようにするという作業が、デザインシートの真ん中を考える過程でもすごく大事になってくると感じました。



【寄稿】

新学習指導要領とサステイナブルスクールの使命

福岡教育大学 教授 石丸哲史

2017年3月、小学校および中学校の新学習指導要領が公示され、前文および総則においてESDの概念が盛り込まれることになりました。また、2018年2月には高等学校学習指導要領案に関する意見募集が実施されました。今回新たに設けられた前文では、「これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手(傍点筆者)となることができるようにすることが求められる。」と記されました。

一方、たとえば中学校学習指導要領総則では「豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手(傍点筆者)となることが期待される生徒に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体並びに各教科、道徳科、総合的な学習の時間及び特別活動の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながら、教育活動の充実を図るものとする。」とされています。

このたびの改訂には、先の中央教育審議会答申において、持続可能性を追求する生きる力が明確化されたという背景があります。前文に「このために必要な教育の在り方を具体化するの、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。」とあるように、実際に教育実践を行う上でバックキャスト思考が求められるかどうかは別としても、持続可能な社会の構築をゴールのひとつとしたバックキャスト設計の教育課程が必要となるのではないのでしょうか。したがって、持続可能な社会の創り手を育成するならば、各教科等は何ができるか、という問題提起をしていることにもなります。

これまで申し上げてきたように、ESDは特定の教科・領域ではなく、持続可能な社会をめざした教育全体といえます。それは、教科・領域の論理や使命を越えた視角が求められているからでもあります。一教科・領域でこの課題

に立ち向かえるものでもないからです。とりわけ、高等学校学習指導要領案には、あらゆる教科に「持続可能な」という文言がみられ枚挙にいとまがありません。

教育課程全体で展開していくホリスティック・アプローチや各教科・領域において持続可能性を扱うインフュージョン・アプローチがあるように、ESDの実践においては特定の教科に委ねることなく教育課程全体で取り組む必要があります。ここに、ホールスクールアプローチの重要性が明確になり、サステイナブルスクールの皆さんにはこの実現を期待したいところです。このままでは持続不可能な状況に陥ることを明確に事実認識することから始まり、このことを回避すべく、持続可能な社会づくりに必要な「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を模索すれば、まさに新学習指導要領の趣旨に適うはずです。

各教科は「わかる」だけでなく「つくる」あるいは「できる」ことにも貢献することができます。前述の前文の思想にもとづき、新学習指導要領のもとで各教科等を実践することによって、子どもが持続可能性を追求(場合によっては追究)する姿が見られるはずです。単位時間に垣間見ることができる子どもの「態度」だけではなく、卒業後も持続可能性に向かうであろう「姿勢」を見取っていただきたいものです。「姿勢」があれば「態度」に表れます。サステイナブルスクールには、ぜひ持続可能性に向かう「姿勢」の明確化に努めてほしいと思います。

※本稿は、以下の小論の一部引用したものです。詳しくは、下記をご参考ください。

【引用文献】石丸哲史(2018):ESD(持続可能な開発のための教育)の教科横断的使命と実践方法、福岡教育大学紀要第67号第6分冊。



ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) について

人をつなぎ、知をはぐくみ、未来をひらく ACCU は日本と世界の人々と共に学びの輪を広げます

ACCU はユネスコの基本方針に沿ってアジア太平洋地域と日本国内で教育と文化の分野で活動しています。2015 年からは、ユネスコが実施する GAP のキーパートナーとして各方面と連携したプロジェクトの更なる発展に寄与しています。

ACCU は主に、「教育協力事業」「人物交流事業」「模擬国連推進事業」「文化遺産保護協力事業(奈良)」の4つの柱のもとさまざまなプログラムを行っています。

教育協力事業

文部科学省委託事業日本/ユネスコパートナーシップ事業に係る、ユネスコスクールやESD推進に関連する主な事業は本冊子に掲載のとおりです。ここでは、その他の事業を紹介します。

若者主体の持続可能な コミュニティ開発プロジェクト

アジア地域の若者(15~35歳)が、みずから持続可能な未来に向けてコミュニティ開発に取り組むプロジェクトです。ACCUはアジア地域のNGOと連携し、これまでにパキスタン、インドネシア、フィリピン、インドにおいて活動を展開してきました。女子のためのノンフォーマル教育施設が設立されたり、村の道路が整備されお年寄りに優しい村づくりが実現したりするなど、目に見える様々な成果が報告されています。

2017年は過去4年間にわたる各国での実践の集大成として、若者がいかに地域の発展を思い描き行動に移してきたのか、その活動を通じて彼ら彼女ら自身が、あるいは地域がどのように変容してきたのかを記録したストーリーブックを作成しました。ストーリーブックでは、現地を取り入れられてきた様々な手法についてもご紹介致します。



SMILE Asia プロジェクト

SMILE Asia プロジェクトはACCUがアジアで推進する母子保健をテーマにした識字教育支援プロジェクトです。女性の関心の高い母子保健をテーマにし、家庭でも子どもと一緒に活用できる教材を提供することで、クラスを卒業した後も日常生活で、識字能力を使い続ける環境を現地の団体と一緒に作っています。これまでにアジアの7か国で展開してきました。

2008年から活動しているカンボジアの場合、基礎教育を受ける機会を奪われ、基本的な読み書きを習得できないまま成人となった人々が240万人存在し、そのうちの70%が女性だといわれています。2017年度はプノンペン市より45kmほど離れた場所に位置するコンボンスプー州の5つの村において、75名の成人学習者を対象に活動を実施。現地をモニタリング訪問したり、参加者からプロジェクトに関するヒアリングをしたりするなど、現地のニーズをより把握できるよう努めました。2017年までに55の村で1,220

人以上の女性が識字を身につけ、自信を高めています。
このプロジェクトはチャリティーコンサートを開催して支援くださる凸版印刷株式会社はじめ、皆さまからのご寄附により行っています。

人物交流事業

教職員・生徒間交流プログラム

日本と海外の教職員や生徒間の相互理解と友好の促進を目指して、初等中等教職員等交流プログラム(派遣・招へい)を実施しています。各プログラムの期間は1週間程度で、「参加・交流によって学びを深め、多文化・異文化を理解し、参加者自身が変容していく」という目的のもと、参加者は様々な地域の学校や教育・文化施設等を訪問し、現地の教職員や児童・生徒と交流します。

また、プログラム参加後の交流についても、マッチングや相談などのサポートを行っています。

教職員招へいプログラム対象国：中国、韓国、タイ、インド
教職員派遣プログラム対象国：中国、韓国
高校生招へいプログラム対象国：タイ



模擬国連推進事業

高校模擬国連

支援企業からのご寄附を得て、次世代の国際人/グローバルなリーダーを育成することを目的にグローバル・クラス

ルーム日本委員会と協力し、高校模擬国連事業を実施しています。2012年度から高校模擬国連事務局として全日本大会を共催するほか、同大会での優秀チームを国連本部で開催される国際大会へ派遣しています。2017年度からは、更に裾野を広げるべく、高校教員らと協力し、主に初心者を対象とした模擬国連大会を開催しています。

文化遺産保護協力事業

文化遺産の調査・研究の中心である奈良に文化遺産保護協力事務所(ACCU奈良事務所)を設置し、国際機関と連携して文化遺産保護や文化財の保存修復を担う人材育成のための研修や国際会議を開催しています。また、県内の高校への出前授業や一般市民向けのセミナーも行っています。

ACCUに関する広報物

ACCU ニュース

年3回発行されているACCUの機関紙です。ACCUが携わるESD関連事業はもちろん、国際教育協力や人物交流などに関する様々な事業情報を発信しています。
<http://www.accu.or.jp/jp/accunews/2017.html>



ACCU ホームページはこちら!

<http://www.accu.or.jp/jp/index.html>
Facebookへのいいね!もお願いします。
<https://www.facebook.com/accu.or.jp/?fref=ts>



キラリ発進! サステイナブルスクール
～ホールスクールアプローチで描く未来の学校～Vol.2

発行日 2018年3月15日
発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)
162-8484東京都新宿区袋町6 日本出版会館
TEL : 03-3269-4559 FAX : 03-3269-4510
URL : <https://www.accu.or.jp/jp/index.html>
Email : webmaster@accu.or.jp
翻訳・デザイン・印刷・製本 株式会社メディア総合研究所

©ユネスコ・アジア文化センター2018
ISBN978-4-909607-00-3
Printed in Japan
禁無断転載・複製



本冊子は平成29年度文部科学省「日本/ユネスコパートナーシップ事業」
によって制作されています。

